遊戯王のユウヤになりました

サルガシラン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遊戯王のユウヤ？エンタメしなきゃ……え、アクションデュエルなんてない？
エクシーズ次元？防災対策しなきゃ……え、ＡＲＣ―Ｖじゃない？

目次

遊戯王のユウヤになりました ―― 1
女心も移動販売車もすぐ違う場所に向かうもの ―― 22
それは未来の貴方自身なのですと幻が言った。 ―― 50
悪い目は誰に向いた。 ―― 93
観客席から見る世界。 ―― 129
迷路の壁を登って越えるような。 153
結局何も進まない雨の日。 ―― 168
遠くの夜と軽い奴。 ―― 184
朝の小さな計画 ―― 206

遊戯王のユウヤになりました

目の前にあるのは現状を指し示す証拠の品々。

落書きされたＤ・パッド。

尻部分に切れ目をいれられた授業用の海パン。

無くなった弁当の代わりに置かれていたおにぎりの、具材が石。

俺はどうやらいじめをうけているようである。

たすけて。

■■■■■

吾輩は転生者である。

名前は「ユウヤ」と名付けられた。

……などと格好つけたはいいが、何がどうなっているのかぶっちゃけわからない。
なかなか難しかった詰め決闘を、偶然一発で解いたのが最期の記憶だ。
まさか禁止カード使わせといてバブルマンネオを使うルートが正解とは……。
気が付けば物心ついたばかりの子どもになっていた。
焦りに焦った末に泣きわめいたのは幼児の体のせいだと言い張りたい。
今生最初の記憶は、突然に嗚咽こみの号泣を始めた息子を、笑いながら甲斐甲斐しくなだめる両親の姿に、悪辣な親のもとに生まれたわけではないと本能的に安心して泣き止んだことだ。
親にあやされる程度の成熟した精神と転生系二次創作文化の知識があった俺は、三歳になるかならないか位の体を駆使しつつ世界の情報を集め始めた。
結果、遊戯王の世界であると断定した。
しかも、「ＺＥＸＡＬ」時空である。
ぼんやりとテレビを見ているだけでも、やたらと遊戯王カード関連のＣＭが流れ、遊戯王という言葉が使われず「デュエルモンスターズ」という表現で一貫しているのが決め手だ。
新型デュエル盤が発売だの、プロ決闘者がどうだのという話がスポーツニュースでも

報じられる様には呆気にとられて真顔になった。
住んでいる土地の名前もまさかのハートランドシティだ。
主人公たちの活躍の舞台その場所に、喜ぶべきなのか焦るべきなのか判断に困ってしかたがない。
そこまで調べられた情報だけではＡＲＣ―Ｖにおけるエクシーズ次元の可能性もあった。
己の名前の不穏さもあって生まれ故郷が融合次元によって戦場に変わるかもと絶望しかけた矢先、その絶望感から救いだしたのは、奇しくも融合カードが普通に存在していたことだった。
そして絶望野郎を希望野郎に変えた、古代の機械究極巨人を使う決闘者のファンになった。
ノーネとか言わないのかーと残念だったのは内緒だ。
希望野郎に変わった俺は非常に浮かれていた。
なにせＺＥＸＡＬであれば、カードの力で洗脳されたり暴動が起こったり三つの世界が決闘によって消滅しかけたとしても、最終的にはヌメロンコードで何とかなるからだ。
デュエルモンスターズの世界に漂流教室したりゼロリバースに巻き込まれたり戦地

の被災民になることに比べれば、ナンバーズにも主人公たちにも関わらなければ安全なんて、なんと気楽になれることか。

加えて、ここは遊戯王の強さがアドバンテージになる世界。

ＯＣＧ次元から来た自分ならば、人生イージーモードで無双のウハウハだと調子に乗り出した。

プロ決闘者になって巨乳美女侍らせてファンサービスだ！とか考えていた。

が、その哀れなほど薄っぺらなロマンティシズムもすぐさま打ち砕かれることになった。

まず、汎用カードが軒並み高額である。

決闘者以外も普通に住めるＺＥＸＡＬ世界においても、元の世界と比べるだけ馬鹿らしくなるほどの決闘者人口を誇るのだ。

需要に供給がまったく釣り合っていないのか、サイクロンやリビングデッドの呼び声などの使いやすいカードほど子どもに手が出せない金額がざらである。

なんだ和睦の使者がウン十万て。

子どもが汎用カードを手に入れるには膨大な種類のパックから自力で引く以外ないのだ。

俺では自力でエクシーズや融合などのカードも当てられないし拾えない。

なぜかレオグンとかはやたらと当たるというのに……。

次に、ナンバーズやシンクロはもちろんのこと、結構な種類のカードが存在しないようなのだ。

ペンデュラムやらリンクやらがないのは仕方ないが、アニメシリーズで中核を担ったカードもチューナーまでもが調べた限りで確認ができない。

実は知る人ぞ知るレアカードあつかいで、情報がネットに出回ってないだけかもしれないが……。

最後に、ＯＣＧ次元になかったカードが山ほどあるうえ、それを把握できない。

一枚のカードから生まれた宇宙であるこの世界で、デュエルモンスターズを制作する会社は一社だけではない。

長く続くゲームゆえに、もはや誰も全種類のカードを把握できていないのだ。

まぁ、だから新たに生み出したカードだのバリアン世界のカードだのが普通に使えるのだろう。

以上によって、ＯＣＧでのデッキ構築知識も定石もほぼ役に立たないわ、カードを集めるのもまともなデッキ一つ作るのも一苦労だわで、鉄の意思も鋼の強さもない俺ではどう頑張ってもちょっと強い決闘者で終わってしまう。

カテゴリでまとめたデッキを持ってる奴なんて、追いつめても見覚えのないカードを

引いて逆転するという運命力で殴りにくるので、プロになって無双とか不可能である。
ドイツもコイツもインチキドローもいい加減にしろ……！
プロ決闘者の道を六歳になるころには諦めた。
使えるものが寄せ集めデッキだけの状態で、近所の【マドルチェ】使いの女の子が毎回デスティニードローしてくるのが普通の環境のなか、三年も粘ったことを褒めて欲しい。
もう決闘は趣味にとどめてリアリストとして生きようと決めたら、さらなる問題が発生した。
まさかの勉強である。
ＯＣＧ次元とＺＥＸＡＬ次元。
世界の変化による歴史や地理や文化の微妙な違いが山のようにある。
大人な頭を駆使してちゃんと勉強はするものの、以前の知識と混ざり「どっちがどっちだっけ？」と間違えることが頻発しているのだ。
ただでさえ小学校の授業を受けている事実にメンタルを削られる日々なのに、そのレベルの問題を間違えているとワンショットキル以上のダメージを受けて想像以上にへこむ。
なのに周囲からみれば、結構賢い子どもに見えているのが余計に心を抉りにくる。

これほど前世の知識を邪魔臭く感じるとは思ってもみなかった……！

せめて人間関係はまともに構築しようと奮闘したが、それもどうやら上手くいっていないらしい。

先に述べた悪戯されてる俺の持ち物たちがそれを物語っている。

どこで人生のプレイングミスをしたのだろうか。

最近までは、クラスのガキ大将が好きな女の子にちょっかい出したら泣いちゃったから、泣いた女の子を守ろうとした勝気な女子とガキ大将が喧嘩しだしたのを円満に仲裁できるくらい上手くやれていたと思っていたのに……。

勝気女子に「せっかく可愛いんだから、飛び蹴りなんて危ない真似はよくない」とか言ったのがデリバリー、もといデリカシーが無かったのだろうか。

もうだめだ……。

何をやっても上手く行く気がしない。

日に日に心が底知れぬ絶望の淵に沈んでいくのがわかる。

未来に希望などないのです、あるのは絶望だけ……。

■■■■■

「ユウヤ君、彼が別のクラスの九十九遊馬君だよ。仲良くするといい」

目に見えて暗くなっていく姿を見かねた担任は、俺が憔悴していく原因は理解していないものの少しでも俺を明るく変えたいらしく、良かれと思ってか他のクラスで元気が有り余っている九十九遊馬を紹介してきた。

そんな理由で原作主人公と接触した転生者など、どんな世界探しても俺ぐらいではないだろうか。

九十九遊馬。

アニメ遊戯王シリーズ四作目の主人公にしてチャレンジ精神、かっとビングの伝承者。

彼を説明するには、デュエル中に食事するデュエル飯や俺とお前でオーバーレイや決闘中にカードを創造するシャイニングドローなどの、歴戦の決闘者でも困惑する話が必要になるが今は関係ない。

話すべきなのは、視聴者から菩薩メンタルとまで称される強さと優しさを合わせ持つ折れないハートだろう。

何度も闇に落ちるライバルをその都度改心させ、親の仇のような人間だろうと窮地に

おちいれば手を差し伸べ、自分を騙し悪行を繰り返し続けた敵にはその男の善性を信じ続けついには相手が根負けして改心するという、まさに神がかった包容力で数多くの人間を救うのだ。

しかしそれは未来の話。

多くの苦難を乗り越え成長したからこそ強靭な精神を手にしたのであって、今の彼はかっとビングなる造語を使いこなす奇抜な髪形をした普通の小学生でしかないはず。

言い方は悪いが、ただの子どもになにができるというのだ。

かっとビングなんかでこの俺に満足は訪れない……。

「俺は九十九遊馬！よろしくな。お前も決闘するんだって？さっそく俺とやろうぜー！」

あぁ、よろしく九十九君。

……決闘が好きなのは伝わってくるんだが、【サイクロン】で発動した罠を止めようとする初心者さん特有のマジックコンボはなんとかならない？

「エクシーズ・トレジャーもってないなら交換しようぜ！お前の天よりの宝札ってのと。どうせなら色んなカード使って決闘したいもんな」

遊馬……そんな鮫のようなトレードを許してくれるのか。
ＯＣＧ版天よりの宝札と、モンスターエクシーズの数だけドローできる強力カードを！
まだモンスターエクシーズ持ってないからいい？
ならばお礼に俺の三十六枚あるレオグンをすべて……いらない？あ、はい。
「昼飯なくなっちまったのか？なら俺のデュエル飯分けてやるよ！小鳥たちと一緒に食おーぜ！」
おおぉ……優しさが空いた胃の腑に染み渡る……！
お邪魔してすみません小鳥さん。
でも遊馬さん。もらっておいてなんだが嫌いなトマトを押しつけるのはどうかと思うよ。
「間違えるのなんておかしいことじゃないだろ。俺なんてテストで酷ぇー点数とるし、うちの姉ちゃんとか婆ちゃんだって時々失敗とかするし。大人だって間違えるのになんでも完璧になんて誰にもできねーって」
……遊馬殿。

数週間後。

『かっとビングだ！俺ぇ!!』

「ちょっと危ないでしょ遊馬!!ユウヤくんまで！」

そこには遊馬先生とともにかっとビングする、あっさり元気になったユウヤ少年の姿があった。

先生を通して仲良くなった小鳥女医の静止も振り切って、今はなぜか木登りに挑戦している。

しかしこの男ノリノリである。俺のことだが。

前世ふくめて初めて挑戦する木登りに苦戦する俺と、手本を見せるように隣の大木を駆け登る遊馬先生はとても楽しそうである。

デュエルマッスルを駆使しているせいかサルより速く思える。参考にならないけどな！

かっとビングを受け入れてから二週間。

ノリに乗せられるまま登っているが、なかなかどうしてやったことのないことに挑むのは面白い。

やり方がまったくわからないので最初は幹からずり落ちるばかりだったのが、コツを

掴むとどんどん高くあがって行ける達成感が意外と癖になりそうだ。
かっとビング精神で出来ないことが少しずつ出来るようになっていくのが、今生で初めて心の底から満足させてくれる。
俺は挑戦に飢えていたのだ。
転生者で実はいい年しているのだと乾いたふりをしていたのだ。
他人よりもアドをとっているからと、心のどこかで何も失敗しない人間になろうとしていたどんぐりピエロでしかなかったのだ。
出来ないことを恥じる心を捨てれば、世界はこんなにもエモーショナルなことばかり。
俺はワクワクを思い出して、再び希望野郎に戻ったのだ。
笑う遊馬先生と呆れている小鳥女医が見守るなかで、もう少しで一番太くて高い枝に手が届く。
「なんだ？お前こんなこともできないのかよ！」
伸ばした肩を誰かに踏みつけられた。
不意の衝撃で落ちていく視界の端を、女子の制服を着た何者かが跳んでいた。
「な、なんだよお前!?ユウヤのかっとビングの邪魔しやがって！」
「かっとビング？ノロノロやってるからオレが見本を見せてやろうと思ってさ！」

木の根元から見上げれば、そこにはいつかの勝気女子が俺のＤ・パッドを持って木の枝に座っていた。

俺を邪魔しに参った奴は彼女のようだ。

一瞬で俺の持ち物をスっていく早業まで使いながらスカートで木登りを成し遂げる辺りは只者ではない。

恐らくは決闘者だろう。そんな人間離れした身体能力は決闘者以外ありえない。

「突然どうしたの？なんでこんなことしたの！」

なにが起こったのかを処理できない頭に、彼女の知り合いらしい小鳥女医の声がきれいに響いた。

「アンナ！」

アンナ……？アンナ……遊馬先生……俺は築根ユウヤ……Ｄ・パッド、海パン、おにぎり……

アンナ……神月アンナ!?

落ちた痛みも吹き飛ぶほどの衝撃の真実で、ぼやけていた思考がクリアになる。
ずっとどこかで引っかかっていたことを思い出し理解した。
俺は転生したのではなく、この世界の住人、築根優也に書き換えられた憑依者だったのだ。
ということは……いじめの犯人はお前かよ！
神月アンナ。
遊馬先生にランチャーをぶっ放して登場するスタイル抜群の美少女である。
空飛ぶバズーカを乗り回し、豪快に列車デッキを操る様はまさにブレーキのない暴走列車。
爆撃した理由も、転校するアンナが告白するために呼び出した好きな男子が来なかったことを恨んでのことなのだが、その来なかった相手をまったく関係ない九十九遊馬先生と間違えたのだ。
間違えたのも二人の名前が似ていただけという超弩級ドジっ子なのだ。
どういう……ことだ……。
で、その来なかった告白したかった相手というのが築根優也なのだ。
来なかった優也が悪いかと言えばそうでなく、元の俺もアンナから同様の仕打ちをうけているので呼び出しもボコボコにされると思って暴力反対だと逃げ出したのかもし

れない。

告白とわかっていて逃げ出したのかもしれない。

好きな異性の気を引きたいけど素直になれなくて、悪戯でしか関わり合いになれないなんて甘ったれた考えをする。

このぐらいの年頃の子供とはそういうものだろう。

俺にも覚えがあるしガキ大将くんがいい例である。

しかし知っての通り、その所業が好きな子に悪戯するのレベルを遥かに超えているのだ。

ここまで考えてふと立ち止まる。それっておかしくないかな？

築根優也の中身が俺に変わっているのだから、アンナがそのまま俺を好きである訳はない。

もしかしたら、彼女は俺のことをなんとも思っておらず、犯行も別の理由もしくは真犯人が別にいる可能性もある。

もしかしたら冤罪かもと、わずかな希望を持って木の上のアンナをジッと見つめる。

「な、なんだよ、なに見てんだよ！返して欲しけりゃここまで来てみろ！」

悪態を吐きつつ、距離があっても明白なほどに彼女の顔が真っ赤に変わる。

うん、わかった。観察結果その一、俺の中身がどうとか関係なかった!!!

「フン！大体お前トロいんだよ！オレが、その、落書きとか石のおにぎりとかで相手してやってるのに何にもし返してこないしさ！」

赤面したままの犯人が俺を指さしながら自供した。

俺の隣で聞いている小鳥女医も、なんとなく察しつつもその所業に顔を引きつらせている。

彼女の好意はどうにもわかり易い。

遊馬先生はまったく気付かずアンナの言動に怒っているようだが。

しかし皮肉ですね。気付いている被害者の俺は、いま思いっ切りアンナが嫌いである。

特に食い物に石ころをぶち込む辺りがどうにも許せない。

仮に告白でもされようものなら返事に調整中ですと対応してやりたいほどである。

かっとビング精神は素晴らしい。だがしかしまるで全然、この俺を菩薩メンタルへと変えるには程遠いのだ。

そもそもにして、好きな子を間違えるってどういうことだ。

冷静に考えて遊馬先生と俺が似ている部分なんてほとんどないはずだ。

名前がツクネユウヤとツクモユウマでちょっと似ていること。

決闘が好きなこと。

小鳥女医にたびたび怒られていること。
かっとビングと叫んで無茶をすること。
……情状酌量の余地と被害者側にわずかながら非があることを認めるべきかもしれない。
特に最後。
さらに言えば、先生と一緒に行動することも多くセットで扱われだしていることも自覚している。
今のところは俺は周囲に「決闘で強い方の男子」という風に覚えられているようである。
なんで髪形で分けないんだ！
「かっとビングと叫ぶ決闘の強い奴」となれば、アンナが戻ってくる頃にはとっくに先生は運命の相棒、アストラルと出会い腕が木登りの速さのごとくランクアップする時期なのだ。
そうなれば運命力によって先生は俺との差を覆し、はるか上へと昇りつめるのは明白なので、より間違え易くなっているだろう。
なんということでしょう。
俺が俺になり遊馬先生に救われてリスペクトし始めたことが、アンナの勘違いに説得

力を与えるという悲劇的ビフォーアフターを発生させてしまっている……！

大恩ある遊馬先生や小鳥女医に、己がきっかけの因縁を押しつけるなど我慢ならない。

だが俺には、転校直前に意を決した彼女からの告白にどう対応するかしか出来ることがない。

しかもどう対応したとしても考えられる結果は三つ。

一、範例通りに呼び出しから逃げだす。

数年後、範例通りに怒りの爆撃が遊馬先生を襲う。

二、呼び出しを受けていままでの嫌がらせ行為が辛かったと丁重にお断りをする。

数年後、逆恨みをこめた悲しみの爆撃が遊馬先生を襲う。

惨、すべてを諦めて自分を生け贄にアドバンス告白を受け入れる。

数年後、恋人だと思いこんでいる遊馬先生が小鳥女医と歩いているところを目撃。嫉妬のままに発動する爆撃が二人を襲う。

なぁにこれぇ……まるで意味がわからんぞ！

だがアンナなら弾けるという思考が、どうあがいても遊馬先生が爆撃される未来に繋がるサーキットを浮かばせる。

決闘で言うならば自分の手札・フィールド・墓地のカードをすべて除外されたうえ

デッキが一枚もない状態で相手がターンエンド宣言をするような状況。
サレンダーすることも許されず負ける以外に道がない。
遊馬先生、非力な俺を許してくれ……！俺はもう懺悔の用意をするしかない。
アンナと遊馬先生の言い争いをＢＧＭに、俺は力なく両手両膝をついて項垂れた。
大丈夫!?と小鳥女医が優しく気遣ってくれるのも無視して心が死んでいく……。
少年これが絶望だ。
どこかで誰かがそう呟く幻聴が聞こえた気がした。

いや、それはどうかな。

絶望するにはまだ早い、希望はある。
アンナが転校するまでまだ時間はあるはずだ。
その間に彼女を更生させれば良いんじゃないのか？
そうすれば、彼女が遊馬先生を恋の相手と間違えてもランチャーで爆撃するような事態は免れる！
だが、そんなことできるのか？
どうすればいいのか見当もつかないのに……。

――――かっとビングだ！ユウヤ！

そう、そうだ！

無理無茶無謀も諦めず困難に勇気をもって挑む、それが孤高なるかっとビング教徒の流儀！

それを教えてくれた友のため、今こそ俺が動くとき！

ドロー出来ないと思っていた自分のデッキからシャイニングドローの光が放たれたような心地だ。

そう、この超弩級暴走ドジっ子爆撃巨乳オレ娘を熱血指導し、ドジっ子巨乳オレ娘までランクダウンさせることこそが俺に与えられた使命だ!!

まずは……。

がばり起き上がりアンナを見据える。

突然俺が動き出したことを、ひゃっ、と驚く小鳥女医を尻目に目の前の木を駆け登った。

もはやこの高さなど大した問題ではない。

無言の木登りをもって、アンナと目と鼻がつきそうなほどの距離まで接近する。

ひう……！と口から小さく悲鳴をあげて枝を後ずさるアンナに優しく話しかけた。
「神月さん」
「なっ！な、なな、なんだよぅ……！」
「まずは知り合いから始めようか」

――――すべてが終わったあとに振り替えり、想う。
この時は与り知らぬことであったが、俺がナンバーズやヌメロンコードにまつわる幾つもの争いに巻き込まれて大いに骨を折ることや、神月アンナとの長きにわたる腐れ縁の末、彼女の指にシルバーを巻くことになる人生は、ここから始まったのだと。

俺の戦いは、これからだ！

女心も移動販売車もすぐ違う場所に向かうもの

ある日のクラスメイトとのデュエッ。

「――攻撃力三〇〇〇の【電池メン―単三型】で攻撃！」

「今、攻撃と言ったな？罠カードオープン！【閃光のバリアーシャイニング・フォース―】！」

要するに相手の場に三体以上モンスターがいなければ使えないミラフォだオラァァ！

発動さえできれば、これはもうハノイの崇高なる力と言っても過言ではない。

相手の単三型をすべて壊すんだ！

「カウンター罠発動。【大革命返し】」

しかし無情の効果無効。

そりゃ伏せカードあるのに無警戒で攻める訳ないよね。

あ、はい。なにも出来ません。

「ビリビリビバディー!?」

俺の場の【ロードランナー】も攻撃表示に変えられてしまったので、電撃をまとう人型電池たちの突撃が俺とピンクの小鳥を襲いライフゼロにされた。
痺れるぅ……気がしたが、ただの決闘なので軽く吹っ飛ばされるだけですんでいる。
跳び上がって喜ぶ対戦相手とは裏腹に、俺は大の字で空を仰ぐ。
勝負はいつもガチガチとはいえ、勝率がそろそろ五割を切りそうだ。
「ユウヤまた負けたのか」
D・ゲイザーを外しながら、観戦していたアンナが倒れたままの俺の顔を覗きこんできた。
「うん、負けた負けた！いやーでも楽しかった！」
いやーまさかあそこからあーしてこーして電池メンを場に揃えてくるとは思わなかった。
あんな面白いコンボを見たら負けてもスッキリと笑ってしまう。
ハッ、もしやこれがエンタメ……！
「……決闘ってそんなに楽しいのか？」
決闘に興味を持ったのか、驚異の身体能力を持ちながらまだ決闘者ではなかったアンナが聞いてくる。
「そりゃそうさ。戦って勝つのはもちろん、やりたいコンボを決めるのも予想外のコン

ボを相手が繰り出してくるのも面白いよ」
「それで負けても？」
「それで負けても！」
負けても魂を奪われず、カードにされないし炭鉱送りにもされないのだからレッツエンジョイし放題だ。
それにＡＲビジョンで立体化するモンスターの躍動をたっぷりと堪能できるのだ。楽しくないわけがない。
それに遊馬先生ではないが、決闘した相手と仲良くなれたらやっぱり嬉しい。
「カードの種類も豊富だから、自分の好きなものが描かれたカードでデッキを組むのも良いしね」
「ふーん」
決闘するだけじゃなくてカードを集めてコレクションする楽しみ方だ。
まぁ、テーマでデッキ固めるには余程の運命力かサイフポイントが必須だが。
俺の決闘盤から【ロードランナー】をとって眺めだすアンナ。
「……鳥、好きなのか？」
「ん？いや鳥は別に好きでも嫌いでもないかな」
「……ふーん」

■■■■■

アンナをアンナルーツにランクダウンマジックさせると決めてから一か月。
俺のかっとビングはなにも上手くいってなかった。

「かっとビングだ俺！百メートル九秒以内に走り切ってやるぜー！」
「付き合うよ遊馬！……ん？ゴールの向こうでアンナが手を振ってる」
「へへ、デッキはもらったぜ！ユウヤ、悔しかったら速く走ってオレを捕まえてみろー！」
「俺のデッキー!?」
遊馬先生のチャレンジに一緒に挑もうとしていたら、邪魔だからグラウンドの端に置いていた荷物からデッキを盗られ、急遽アンナをデュエルチェイサーとして追うことになった。
奴は決闘で拘束できないのでランニングでアクセラレーションするしかない。
もっと速く疾走れー！と駆けた結果百メートル十秒台くらいの速度が出た気がする。
いや、きっと気のせいだろうとは思うが、それほど早くアンナをタックルで取り押さ

えられた。
「捕まえた！」
「うひゃぅ……！どこ触ってんだ!!」
「ウェスト!?」
　これで昇進確定だと思ったら変なところを触ってしまったらしくビンタされた。
　不可抗力だしそもそもの原因は盗みを働いたお前だと言い争いになった。
　小学生の体に興味無いんだよこっちは！

「くらえー！」
「待って!?ドッチボールは顔面狙いあうゲームじゃないって！」
「ちょ、ユウヤが避けるとこっちに、プラァ!?」
「シドくーん！」
「チッ、外したか」
　決着を着けるべく次の休み時間にドッチをすれば、突然アンナが始める小学校体育系闇のゲーム。
　クラスの仲間たちは、すでに俺が避けることに発生する邪心経典という名の顔面ボールに沈み、セーフなのにみんなアウトゾーンで休んでいる。

相手チームの奴を俺がぶっ倒してもぶっ倒しても、もう仲間は帰ってこない。
ドッチボールのルール的に考えて。
これはもうアクションで回避をとりまくるしかない。
「甘いぞユウヤー！」
「ブックス!?」
一見正しいように見えた回避、しかしそれは大いなる間違いで思いっ切り顔面を撃ち抜かれた。
必要だったのは加速のほうか。

「これでどうだ！」
「食べ物を粗末にするのはヤメロぉ！」
「なんなのこれ……」
「いいから食べろオレの手作り！」
「ハガぁ!?」
「ユウヤくーん！」
小鳥女医たちも巻き込んで弁当を一緒に食べれば、元キング特製シンクロ弁当もかくやというほどの、具材でグッチャグッチャのおにぎりがアンナの手から俺の口に叩き込

まれる。
一瞬、あれ美味い？と思った瞬間に複数の味覚すべてを刺激する連続攻撃グォレンダァが突撃。
リバースしそうになるのをなんとか抑え込んで飲み込んだ。
「ど、どうだ美味しい、か？」
「……ふ」
「ふ？」
「……ふざけるなアンナ！」
「フガぁ!?」
「ア、アンナ――！」
やられたらやり返す。それが孤高なる希望野郎の流儀だ！
顔を覗きこんで味の是非を聞いてくるこの女のアゴをつかみ、残りのアンナ特製おにぎりで同じことをしてやった。
しかし、ダブルノックダウンで二人とも小鳥女医たちに介抱された。
「大将……そんなんじゃまた女の子泣かしちゃうって」
「お前には関係ないだろー」

「関係あるなしじゃなくて……」
「お前またやってんのか！」
「ボバサっ!?」
性懲りもなくガキ大将が女の子にちょっかい出してたので、ほどほどにしときなと諭しているところを、ガキ大将がまた女子を泣かせたと勘違いして、アンナの正真正銘のダイレクトアタックが俺もろともに突き刺さったりする。
バズーカではなくまだ飛び蹴りであることに安心すべきなのだろうか。

こんな風に騒動を起こすごとに、暴力はいけませんとか他人の物を盗っちゃダメとか、もっと落ち着いて考えて動けとか文字通り一生懸命に注意するのだが、非があると認めればその場では謝るものの、それのなにがいけないのかな？と言わんばかりに改善の兆候が見られない。
むしろ悪化してないかこれ？
頑張った結果変わったことと言えば、周囲からの俺の印象が「かっとビングで決闘が強い方」から「アンナの子分で止める役」になったことぐらい。
俺がランクダウンしてどうする。しまいにはロイド集めてアンナのアニキと言い出せと？

今日も下校時間になり、めげずに明日も頑張ろうと下駄箱の靴に手を伸ばした。
が、取れない。
よく見ると接着剤でくっ付いているようだ。
しばらく悪戦苦闘していると視界の端で、ゆれる赤い髪が下駄箱の陰から覗いてきた。
「……アンナァ!!」
「やばっ、バレた!」
今日という戦いは下駄を履くまで終わらない。
そのまま起こった鬼ごっこは、また始まったと残った生徒たちに笑われながら学校というフィールド内を駆けめぐったところでようやく終わった。
途中から遊馬先生や鉄男たちが乱入してきて鬼ごっこの最強進化系と化し、たった一人の鬼役は三十九人全員を捕まえる羽目になった。
だが、遊馬先生のかっとビングに付き合うため決闘マッスルを鍛えはじめた今の俺なら、全力で疾走り続ければ楽勝だった。まだクマは伏せられないので明日は筋肉痛だな!
くたくたになったその日は、捕まえたみんなに協力させて靴の接着剤を剥がして、いつも通りアンナと一緒に帰った。

■■■■■

「で？今度はなんで喧嘩したのさ」

ある日のこと。

いつもの如くアンナとガキ大将が喧嘩をしていた。

しかし、なぜ女子たちはこいつらが喧嘩を始めると教師より先に俺を呼びにくるのだろうか。

便利だからか。

俺が着いたころには取っ組み合いになって顔とか口とかを互いに引っ張りあっていた。

二人を引きはがす際に思いっ切り蹴とばされるわ無言の裏拳が飛んでくるわで、こっちもボロボロである。

痛む脇腹などを我慢しつつ、喧嘩の原因を正座させた二人に問いただしているところだ。

「こいつがオトコオンナって言った」

「こいつもタラコデブって言ってきた」

「ホントのことだろ」
「なんだよ」
「やーめなさい！」
また喧嘩を始めようとするのを静止する。お前たちの正座フェイズはまだ終了していないぜ！
二人ともすぐに手が出るのを毎度毎度いくら咎めても聞く耳を持ってくれない。
俺の熱血指導をことごとく拒否りやがって！俺はお前たちが暴力を振るわない姿をみていたいんだよ！
「でもここまでヒートアップしたのはなんで？いつもはもうちょっと穏便にすむのに」
「それは……」
ガキ大将が俺を恨みがましい目で睨んで口を閉ざしてしまった。
根気よく聞き続けると不承不承とガキ大将が口を開いた。
彼はたまたま女子の恋愛トークを聞いてしまったそうだ。
その話の内容で好きな女の子の想い人が「いつも助けてくれる男子」だったそうで、それが自分じゃないことがわかってしまい、恋心を粉砕玉砕されて心がささくれ立っていたところに、アンナがやってきて言い争いになった。
売り言葉に買い言葉かつ普段から蹴っ飛ばされてる遺恨がガキ大将をヒートアップ

させたと。
　ようするに、このハリキリボーイはフラれた八つ当たりがすぐできるタイミングで来てしまって、怒りを止めるに止められなくなったと。
　失恋直後で荒れてしまうのはわかるが、それで喧嘩しちゃうのはなぁ。
　いやそもそもガキ大将の場合は。
「アプローチの仕方を思いっ切り間違えてたんだよ」
「だってどうすればいいのかわからなかったし……」
「だからって相手が嫌がることするのは良くない。どうしてそんなことしてんのさ」
「ちょっと悪いことする方がカッコイイしモテるってうちの姉ちゃんが言ってたんだ」
「それ違う。悪いことする奴がモテるんじゃなくて、モテてる奴が悪いことしてるだけ」
　ジャックを見ればわかる。
　遊星からスターダストをパクってキングになったころも、元キングになって穀潰ししてた時もモテモテだった。
　対してクロウにはまともなフラグなどなかった。
　要は数いるモテるイケメンの中に闇落ちしたイケメンがいて、それが目立ってるだけなのだ。
「多分あの娘の中では大将、『会うたびに嫌がらせしてくる本気で嫌いな奴』でしかない

よ？間違ってもそれが好意に書き換えられることはない」
「で、でもそいつより俺と一緒にいることの方が多いし……」
　顔を青くしながらもダメじゃなーいと反論するあたりはなかなかの根性だと思う。だが……。
「普段から会う嫌いな奴より、時々会うだけでも必ず助けてくれる人を好きになるのは当然だよ。大将がやったのはむしろ、その人を好きになる手助けをしただけだと……」
「……うわぁぁん！」
　ガキ大将が突然泣きながら走り去ってしまった。
　しまった。なまじ被害者の気持ちがわかるせいですこし強く言い過ぎてしまったか。
　とどのつまり、彼もまた不器用とモテるワルという言葉で拗らせただけなのかもしれない。
　頭を抱えているとアンナの様子がおかしいことに気づいた。
「？どうしたのアンナ」
「今の話……」
「ん？」
「ユウヤもそうなのか？」
「そりゃそうだよ。実体験だもの」

「！」

おずおずと聞いてくるアンナにきっぱりと答える。

遊馬先生や小鳥女医のおかげで俺はネオニュー希望野郎に持ち直したマジサイコーっすよな経験があったからこそ、あそこまで断言したのだ。

するとアンナが頬を膨らませながらプルプルと震えだした。

あっこれはヤバい、と思った瞬間。

無言の腹パンが俺の腹を襲う。

しかし、寸でのところでその拳を受け止めた。決闘者として当然たしなみだ。

「やめろアンナ」

「フン！」

「人を殴ろうとしてその態度はどうなのさ！というか話はまだ……」

俺の手を振り払って背を向けるアンナの肩をつかんで叱ろうとした。

しかし、振り返らせたアンナの顔を見てひるんで手を離した。

うっすらと涙ぐんでいたからだ。

「……うるさい！お前にオレの気持ちがわかるもんか！」

その涙の原因がわからず、肩を怒らせて去るアンナをただ眺めることしかできなかった。

■■■■■

ダメだ……俺はダメだ。女の子泣かせるとか……。

原因が何も思い浮かばないあたりが本当にダメだ……。

自室のベットに倒れ伏す。

アンナの涙のダメージが時間が経つほどに心を抉りにくる。

あの後アンナと話そうとしたものの露骨に避けられてしまった。

小鳥さんから、アンナが落ちこんでいてその理由を知らないかと聞かれて言葉につまった。

わからないと答えると、小鳥さんはなにか事情があると察してくれたのかそれ以上は聞かずにいてくれた。

周りが妙に静かになった気がしていたが、その後はアンナが起こす騒動がなかったか

らだと気づいたときは、そりゃ子分と言われるなと苦笑した。
普段よりも肉体的には疲れなかったが精神的にはチクチクと針を刺され続けているような気分だ。
帰りは遊馬や鉄男と一緒にカードショップに寄ったがどうにも気は晴れない。
なにが悪かったのだろうか。
結果的に叱るふりしてガキ大将をいじめてしまっていたのが良くなかったのか。
気づかないうちにアンナの地雷を踏みつけてしまったのだろうか。
いくら考えても答えは出ないので、とりあえず買ってきたパックを開けた。

【ＥＭモンキーボード】が姿を現した。

猿う!?
あまりの事態に跳び上がってパックを落としてカードが床に散らばってしまった。
ペンデュラムは存在したのか!?それにしてもよりにもよってお前って。
いや、待て。
カードを拾ってよく見ると、ペンデュラムモンスターじゃなく普通の効果モンスターのカード枠だし、ＰスケールもＰ効果もない。

さらに待て、ということはこのカードは……。

ＥＭモンキーボード
効果モンスター
星６／地属性／獣族／攻１０００／守２４００
【モンスター効果】
（１）：このカードを手札から捨てて発動できる。
手札の「ＥＭ」モンスターまたは「オッドアイズ」モンスター１体を相手に見せる。
このターン、そのモンスター及び自分の手札の同名モンスターのレベルを１つ下げる。

……ＳＡＬぅ。
なんということでしょう。
使い勝手が良すぎるＰスケールとサーチ効果で、ＥＭを使うデッキで暴れまわり超スピードで禁止カードに叩きこまれたあの猿が、劇的ビフォーアフターを成し遂げている！
これもう劣化コストダウンじゃないか。どう使えってんだ。

ペンデュラムモンスターだったころのお前は、もっと輝いていたぞ……。
これもきっとドン・サウザンドって奴の仕業だ。
しかし、良き力ではなかったがこのカードだけですごい情報が手に入った。
この猿を見る限りで、この世界ではペンデュラムモンスターはただの効果モンスターになっているみたいだ。
同じパックのカードの中にも、ＯＣＧ次元ではペンデュラムだったものが同様の状態で入っていたので、猿だけのミスプリントということではない筈だ。
……それって意味あるんだろうか。
大事な個性が死んだだけになっている気がする。あれ、ＥＭくん居たの？ってレベルに。
結果的に決闘環境の悪化はなくなっているものの、このカードにとっては自分の特性をまるごと爆殺されて踏んだり蹴ったりだろう。
俺は他にＥＭもオッドアイズも持ってないので余計に良いことなんてない。
――お前にオレの気持ちがわかるもんか！
……それは俺がアンナにしようとしてることと同じなんじゃないか？
俺はアンナが他人に迷惑をかけないようになってほしいから良かれと思ってやっているが、彼女にとってやることなすことに口を出してくる俺は、余計なお節介でしかな

いのかも。
うざいのか、目障りなのか。俺のいちいちが。
もしかしたら、そんな気はなくても彼女のことを全否定してしまったのだろうか。
……とりあえず、明日アンナに会ってから謝ろう。
いやでも、正確な理由がわからないまま謝罪すると余計にこじれたりするしなぁ……。
次の日のことを考えたからか自然と壁のカレンダーに目がむいた。
……明日から三連休だった。
すこし気が楽になった自分がまた嫌になる。

■■■■■

次の日。
「……」

「……」

ハートランド美術館。

現実逃避の末に、そういえばここに持つ者を幸運にする『No.7』があったなと思いだした俺は、その恩恵にあやかろうとさっそく見に行くことにした。

だが、現時点ではまだ寄贈されていないようで完全に無駄足であった。

入館料が小学生のサイフポイントに地味なダメージを与えてきた分、徒労感が強まっている。

せめて元を取ろうと館内を隈なくまーわーるーつもりでいたのです。

「……お茶飲む？」

「……もらう」

かつてハートランドシティの前身となった街で走っていた列車が展示されているエリアに来た。

エリア中央に鎮座するでかくて古い機関車は、力強さを感じるほどのふつくしさだ。

しかし、そこではアンナが意気消沈していた。

アンナ！なぜアンナがここに？偶然か自力で入館を!?

三日間は顔を合わせられないと思っていた相手との遭遇にお互いに驚いた。

なにも話さないわけにもいかず、かといってこんな場合に何ができるか判断できず、

混乱のまま自然に場を離れるタイミングを逃してしまった。
結局、機関車の前に並ぶ椅子に間をあけて座っている。
とりあえずアンナに自販機で買ってきた森羅印のお茶を一本渡した。
「……」
「……アンナはどうしてここに？」
「……この機関車好きだし、タダ券もらったから」
「そうなんだ……」
「ユウヤは？」
「見たい物があったんだけど、なんか……無くって」
「ふーん……」
「……」
「……」
気まずい……！
アンナに普段の覇気がまったくないせいでまた調子が狂う。
彼女がくすんでいるというだけなのに、どうにも落ち着かない。
やたらとのどが渇いてお茶が進む。
「こういうの好きなのおかしいって言うのか？」

「え？」
「お前もオレのことオトコオンナって思ってんだろ」
会話の糸口を見つけられずにいると、アンナがポツリとこぼした。
……ガキ大将との喧嘩で言われたことを結構、気にしていたようだ。
列車とかメカメカしいものを好きになるのは男子、という認識が世間一般にはあるのもその悩みに一役買ってしまっているのだろう。
男女の差。普通ならそういうことに過敏になってしまう年頃なのだ。
「そんなこと思ったことないよ」
「嘘つけ」
「？じゃない。アンナと友達になってから一か月ぐらいだけど、女の子らしいところ沢山あるの知ってるし」
鬼ごっことかで腕を捕まえたときに、やっぱり男子より体が柔らかくできてるなとか。
勝負に勝ったときの喜び方の仕草が女の子らしかったりとか。
こちらの反応をうががってくるときの表情のかわいらしさとか。
もうちょっと落ち着いてくれたら言うことなしの美少女だ。
「この機関車だって女の子が好きになってもおかしくないくらい強そうでカッコイイ

よ。それに、誰がなにを好きだっていいんだよ」
「……」
「これが好きだって言えるものに男も女も、大人も子供も関係ないっ！」
「……！」
こちとら、いい年こいて遊戯王とか、と言われ続けてもやめなかったその手の大先輩よ！
いや、一度その通りかなぁと思って卒業しようとした時期もあったんだが、結局ちょっとしたら元に戻ってしまって以前より余計にハマった。
その末に遊戯王の世界に来てしまったのだからもう一生卒業することはないだろう。
「好きなものは、もういいやって思うまで好きでいていいんだよ」
どんなに悩んだって、良いなって思ったものを嫌いにはなれない。
他人にどう言われるか程度では自分の心は変えられるものではないのだ。
そこまで言って、また余計なことを言ってしまったかもとアンナの様子をうかがう。
しばらくお互い動かずにいると彼女が吐き出すように口を開いた。
「ユウヤってさ」
「うん」
「……小鳥が好きなんだろ？」

「……んぁ!?」

驚きのあまり立ち上がってアンナに向き合った。

え？ん？ひょ？

俺が小鳥女医を？なにがどうなってそういう結論に達した？

「なんでそうなった!?」

「だって決闘で好きなものを使うって言って小鳥のカード使ってたし」

「小鳥のカード？……ロードランナーか！そういう理由で使ってないよ!?」

ロードランナーを使っているのは、前に買った一パックの中をサポートカードの【スクランブル・エッグ】と一緒にうめていたので、何故だ！と怒りのままにデッキにぶち込んだらまさかの大活躍をしたので、そのまま採用し続けているだけだ。

この世界では攻撃力至上主義な決闘者も多いので、敵が一九〇〇以上の奴ばかりのときに意外と壁になってくれるのだ。

「それに助けてくれる奴の方がいいんだろ？」

――アプローチの仕方を思いっ切り間違えてたんだよ

――『会うたびに嫌がらせしてくる本気で嫌いな奴』でしかないよ？

――普段から会う嫌いな奴より、時々会うだけでも必ず助けてくれる人を好きになるのは当然だよ。

「あー……」

言われて思い出したが、俺とアンナは元々そういう「いじめっ子といじめられっ子」という間柄だった。

遊馬先生を爆撃する未来にならないようにする方法ばかり考えていたうえに、この一ヶ月の内容がずっと濃かったせいで出会ったきっかけを完全に忘れていた。

それにアンナが自分がやったことを客観視出来ているとは思ってなかった。

「実体験だって言ってたし」

「言った。うん、言ったね俺」

ええ、記憶にございます。

つまり、あれか。昨日泣いてたのは俺の発言が原因で自分もフラれたと勘違いしたからだと。

……なんだろう。昨日一日中悩んだのがバカバカしくなってきた。

まぁ悪いのは俺……なのかなぁこれ？

……まてよ。このまま失恋したと思ってもらった方が遊馬先生は安全になるんじゃないか？

自分のやってきたことがウラ目に出たとなれば粗暴な行いもしなくなるかもしれない。

小学生の失恋で終わって丸く収まるなら、このままにしていた方が……。

――思い出すのは、見るも無残なモンキーボード。その絵は、変わらず全力で笑顔の猿。

――目の前には、今にも泣きそうな弱々しいアンナの顔。

……この娘にもいつも通り笑って欲しいな。

「別に小鳥さんのことは好きじゃないよ」

「……ホントか？」

「小鳥さんには遊馬がいるしね。友達としては遊馬と同じぐらい大好きだけどさ」

「そっか……そっか！」

アンナがわかり易く元気を取り戻して、いつも以上に弾けるような笑顔になった。

……なんだかプレイミスをしてしまった気がして仕方がない。

いや、そのまま放置して小鳥女医だけを砲撃するようにこじれたら、決闘者ではない彼女はひとたまりもない。そうなったら確実に遊馬先生も危ない。

そうなってはいけないと思った。それだけだ。そうしたら勝手に元気になっただけ

だ。
アンナが好きだなんて言ってないし思えてもいない。
「へへ。なんか安心したら腹減ってきた！」
「食べ物か。そういえば、この近くにクレープの移動販売の車が止まってたような。でも……」
「それ！それ食べに行こーぜユウヤ！」
美術館に入る前に見ただけだし時間も経ってるからもういないかも知れない、と言おうとするのも聞かずに、ならシャ店に行くぜ!!と俺の手を引いてアンナは駆け出す。
その姿にもう先ほどの暗さなど微塵も感じない。
もう良くも悪くも完全に元通りである。
こんなことで彼女を更生させるとかできるのだろうか。
うん、いずれ変わるさ、いずれな。そう信じよう。
早くしないと俺ではなにも出来なくなってしまう。

どうあがいても、いつかは遊馬先生に心が向いてしまうのだ。
俺たちの関係はアンナが転校するまでの間だけで終わってしまうものでしかない。
そうなれば俺はただ口うるさい奴でしかなくなって、こうやって手を繋ぐようなこと

はない。

それをすこし寂しく感じながら、引っ張るアンナの手を軽く握り返してちょっと笑った。

二人分のハートランドクレープは、子供なのでおまけしてもらえたがやっぱりサイフに痛かった。

それは未来の貴方自身なのですと幻が言った。

はるか彼方の宇宙の世界、ネオスペース。
極彩色の空の下にあるリゾートを彷彿とさせる海岸が静かに波打つ。
ネオスペーシアンやコクーンたちが一人の高校生くらいの少年と超バカンスをしている。
しかし、それは十代ではなく俺こと築根ユウヤであった。
キモイルカさんことアクア・ドルフィンとデュエルマッスルを駆使したクロールによる水泳勝負をしたり、鬼畜モグラことグラン・モールが掘り出した土を使って、コクーンたちと一緒に超大作のプラシド究極体像を築いた。
気のいいグロー・モスを的にしてフレア・スカラベからネオスチョップを教わったりもする。
モスに打ち出し、直線上にあったはるか先のプラシドを真っ二つにした所でお墨付きをもらった。
モスさんはティンクル・モスに分裂しながら、そろっておめでとうと喜んでくれた。

彼が付き合ってくれたおかげである。初対面より好印象だ。
切れ味に小踊りしているとブラック・パンサーが俺の服の裾を噛んで引いてきた。
どうしたのかと聞くとこう提案してきた
――――自分の能力なら君をヒーローに変えてやれるぞ。
二つ返事でやってくれと言うと、パンサーが溶けるように変化して俺の身体を包んだ。
頭ごと黒く覆ってきたので、どう変身するのかは終わってからのお楽しみだ。
ブラック・ネオスかな？
「見つけたぞ！」
視界が塞がれたまま誰かが声をかけてきた。顔は見えないがその声はとても上機嫌である。
変身が完了したのか顔にまとわりつく黒い液体のようなものが取れたので、自分の姿を確認するより先に声の主を見た。
そこには魔界の警邏課デスポリスのコスプレをする、立派に成長したアンナがいた。
しかも、フライングランチャーに搭乗している。

「お前を逮捕しに来た！大人しくオレに捕まれ！」
アンナは張り出す胸元から取り出した「たいほじょー」と書かれた紙をこちらに突き付けた。
何故か二人分の名前明記欄と印鑑を押す場所があるように見えるのだが逮捕状らしい。
バカな！こいつは遊馬先生専任捜査官のはずだ！
「待てアンナ！相手を間違えてないか!?」
「どんな格好してたってお前を見間違えるもんか！」
彼女はどこからか出した姿見を砂浜に突き立てて俺に向ける。
鏡にはエビ頭かつ古き良きヒーローのような赤い装甲の付けた白タイツ姿の俺が映っていた。
まんまゼアルである。
ＭＡＴＴＥ!?
コンタクト融合だと思ってたら、俺自身とブラック・パンサーをオーバーレイしていたらしい。

どうみてもゼアルなのに、顔はしっかり自分の物であるあたりヒーロー物に出てくる微妙なニセモノ敵キャラ感が拭えない。名前はきっとゼアルウラだな。

確かにヒーローっぽい格好だけども！・ＨＥＲＯじゃなくてもロビンとかあっただろう!?

というか俺はレベル三だったのか。

多分、決闘者レベルだな。馬の骨の俺ではバトルシティには出られないのか……！

いや、エクシーズだからレベルが無い。レベルが無いからレベルゼロということではないが、計算されないならレベルゼロも同然。結局出れない！

「観念しろ！・オレがお前を人生のセメタリーに送ってやるぜ！」

「ヒーローになったばかりなのに、まだ栄光のターンエンドには早いって！」

腰の手錠を構えて大人の面差しを持つアンナの口角があがる。こいつスマイル決めてやがる！

そのシルバーだけは腕に巻きたくない、とゼアルの体と元からの筋力すべてでもって砂浜を走り抜けるアクロスザユニバース。

当然、アンナはランチャーをぶっ放しながら追いかけてくるので爆撃と爆風と砂を背中で感じる。

「オレから逃げるなー！」

「バズーカ撃つようなのに捕まるのはゴメンだよー！」

なにか状況を打開する方法はないのか。誰でもいい救援を……助けてくれ遊星ー！

アンナが現れたあたりからいつの間にか誰もいなくなっていた海岸に悲鳴と爆音だけが響く。

キングならば追われるってのは気分がいいと軽口を叩いただろうか。俺には自分が逃げているとしか実感できない。

ドン☆ドン☆と鳴る音に振り返らず命を懸けた決闘疾走でフィールを高めていると、突然に海面から水飛沫が上がった。

水族館のイルカショーを思わせるハイジャンプで、ボディビルダーのようなポーズをとったマリン・ドルフィンがドヤ顔で現れた。

そのマリン・ドルフィンが、これがラッキーカードだとばかりにカードを投げつけ来た。

受け取ったこのカードなら世界がガラリと変わるかもしれない……！

「見せてあげるよ！ヒーローにはヒーローに相応しい逃げ回る舞台ってもんがあるんだ！」

ヒーローを気取るにはあまりに情けないセリフと共に、俺は左腕に展開済みなせいで走り辛くて仕方なかった決闘盤を使ってフィールド魔法を発動する。

「【摩天楼―スカイスクレイパー―】、発動！」

「あ、待て、うわ！」

砂浜から突如せり上がる建物がアンナの進路を妨害し、互いを視認できないようにビルの森が生い茂る。

発動した俺は、最も高いビルの頂点にある避雷針に立ちすべてを見下ろした。

完全に撒けたな勝ったと確信した俺は、オーロラで満たされた状態から一転して満月が昇る夜空に変わった空を背に腕を組んだ。

気分はさながらフレイム・ウィングマンである。

ビルの上に隠れたのよ！

それがフラグだったのか猛烈な突風が横から俺を襲い、避雷針から足を踏み外す。

「ちょ、ほっせっ、フン！」

慌てて体勢を立て直そうとしたものだから、逆立ちの状態でビルの避雷針にしがみつくみっともないゼアルという世にも奇妙な絵面が完成した。

高度が高すぎるせいか風が呼吸すら難しいほど吹き付けるので動くことも出来ない。

これはでは閉じ込められたも同然！くっ罠か……。使ったのはフィールド魔法なのに。

「あ、エア・ハミングバード！避雷針から降ろすだけでいいから手伝って！」

ビルより高く飛んでいたハミングバードを見つけ救いを求めた。
しかし、赤い人型の鳥は悲しそうな顔で首を横に振った。
――――すまない。私たちは専用構築デッキの中でしか決闘者を助けられないのだ……。
そんなこと無いって！十代だってＨＥＲＯとコンタクト融合にハネクリボー専用カードぶち込んだとがり切ってる構築して勝ってきたじゃないか！
君の回復効果は意外に使えるから、と力説する救援要請も聞かずにハミングバードは悲壮感を抱えながら夜空に消えていった。
そんなものより俺を抱えて飛んでくれよ、おのれキモチュッチュぅ！
このままじゃ俺が地面とチュッチュしてしまう。キモいどころかグロくなるのは明白だ。
「いたぜ！ちょっと離れたくらいでオレから逃げられると思うなよ！」
地上からアンナの声が、どうしてか暴風吹き荒ぶはるか上空の俺まで届く。
もう見つかったかと首を上げて地上を見やれば、そこにはビルの間の道路を走るグスタフ・マックス。その砲身の先に仁王立ちするアンナ。
彼女はジャンプして宙を一回転。長い砲口の中へ身を投じた。
なにをする気なのか察した俺は、急いでその場を離脱するために避雷針を蹴飛ばして

強風に乗る。
風を掴め！来いデータストーム！
瞬間、風がピタリと止んだ。やはり罠か……。
「発射オーライ！」
大砲からフライングランチャーを伴って発射されるいつもの服装に戻ったアンナが、一直線に俺を目指す。
願いは虚しく照準をずらすための足掻きは無意味に終わり、砲弾の速度で迫るフィールを纏った爆撃が俺に直撃しゼアルが解けた。
宙に俺と目を回すブラック・パンサーが投げ出される。
そして、アンナの力強い抱擁が俺の腹を捕らえた。
「これでお前はずっとオレのモンだ！」
赤みの差した喜色満面の笑みで勝利宣言をして俺の手に手錠を嵌める。
大きな胸をさらに張るアンナと項垂れて猫背になる俺の間を煙が横切った。
二人揃って顔を見合わせてから見下ろせば、電閃が走りプスプスと空気が抜けるような音で煙を出すマシン。
フライングランチャーが程なくして爆発、俺たちは吹き飛ばされて落下した。
アンナにしがみ付かれながら落ちていく俺を、低いビルに飛び移っていたブラック・

パンサーが汗を垂らし口をあんぐりと開けながら見送った。
「まだ年末じゃないって！」
俺の渇いた叫びを最後に世界は闇に覆われ……。

――――ベットから落ちて背中を床に打ち付けた。

何が起きたのか把握できていない頭に、外からのセミの声とすこし遅れて鳴りだした時の魔術師型目覚まし時計が朝だと告げる。
落ちた衝撃で、ベットに付いた台からカードと紙が顔にひらひらと弧を描きながら降ってきた。
それらを顔からはがして寝ぼけ眼のまま確認する。
夏休み直前に小学校でやった防犯講習。そこで渡された警官の男女が描かれたプリントと、店のストレージゾーンから発掘した『N・ブラック・パンサー』だった。
……結局お前も落ちたのね。
徐々に錆が落ちていく身体を起こし、床に落ちていた夏休みの課題である「夏らしさのある絵」をまたいで、やかましい時の魔術師をラス・オブ・ネオスで止めた。

……チョップなんて、夢じゃないとこんなものだよね。
夢の内容なんて現実になるはずがないのだ。
だから安心だ。うん。

■■■■■

「ユウヤ行くぞー」
「俺は無実だ！」
「なに言ってんだ？」
「あ、ごめん。変な夢みてさ……どうしたのこんな朝っぱらから」
意味不明な夢から覚めて、朝食の母謹製大いなるカニカマの味噌汁をすすっているとチャイムを連打してアンナがやってきた。
夢を思い出して自己弁護をしてしまったが、玄関前に立つ彼女は現実のアンナなので見た目は小学生で、服装は普段よくみる白とマゼンダ柄のワンピースタイプのスポーツウェアにスパッツだ。捕まるなどアリえない。
「は？ちゃんと約束しただろ！忘れたのかよ!?」
「約束……？」

「姉ちゃんの大会を応援に行く話!!」
「……ああ、なるほど」

話は二週間前の休み時間までさかのぼる。

「【手札抹殺】を発動!」
「お、ありがとう。捨てられた【暗黒界】モンスターたちの効果発動!」
「あ、【暗黒界】のカードを、捨ててしまったー!」
俺はいつもの如く決闘をし、初めての対戦相手にドジリスしていた。
くそう、手札抹殺をトレードしてくれたから、なんだこの人っていい奴じゃんと決闘に応じたのが行けなかったのか。羽賀みたいなことしやがって!
すったもんだの末、【邪悪なるバリアーダーク・フォースー】に【皆既日蝕の書】をチェーンしハノイの崇高なる力風味コンボを成立させて、右端に置いた【魅幽鳥】の二回攻撃で勝った。
決闘者は姑息な手を使うような相手と負けてはならない勝負では正面切って勝利を掴むもの!
「ガッチャ!楽しいデュエッ……」

「ユウヤ！頼みがある！」
ガッチャして決めたかったのをアンナが遮って相談してきた。
なんでも親戚のお姉さんがデュエルモンスターズの高校生大会で全国トーナメントまで進み、その大会が今年は遊園地であるハートランド内の会場で行われるそうだ。
そのお姉さんというのが遠くに住んでる憧れの人らしく応援に行きたいが、デュエルモンスターズのことはわからないから一緒に見ながら解説して欲しいとのこと。
「いいよ。全国大会レベルの決闘とか興味あるし」
「ホントか？やったやったやった！」
特に予定もなかったので了承したら、彼女が飛び跳ねて喜んでいたのをしっかり憶えている。

「思い出したな！さっさと着替えろよ！」
「ところで行くってどこに？」
「姉ちゃんとの待ち合わせ場所！もうすぐ時間だから早く！」
「アンナ、念のため聞くけど……」
「急げ！姉ちゃん試合にも出るんだから遅刻させられないんだぞ！もうここで脱げ！オレが着替えさせてやる！」

こちらに問わせることも許さず、その場で足踏みして焦るアンナが俺のパジャマを掴んで脱がせようとかかってくる。

今の掛け合いだけでも、また暴走状態だと十分理解できた。

「わかったわかった待って待って！すぐ着替えてくるから家に入って待ってて。暑いし」

いつも通り説得を聞かないと諦めた俺は、服の裾からアンナの手を剥がして玄関内に招きいれた。

この状態のアンナをかっとビングでなんとかしようと考えるのは、ある意味でベクターを改心させるよりも手を焼くだろう。

「あらアンナちゃん。こんにちはー」

「お邪魔しまーす！急げよユウヤ！」

遊馬先生や小鳥女医たちと一緒に遊びに来たこともあるので、すでに母と顔見知りだ。

急かす声に溜息を一つ。

「へぇーデートかよー。遅刻は言語道断よユウヤー？」

「ううん。違うって」

「そういう時はちょっと照れながら否定しなよー。面白味零ねー」

ちょっかいを掛けてくる母を軽く流して部屋へ走った。
パジャマを放り投げて服を選ぶ視界の端で、開けている窓からの風によってカード手裏剣練習用の的とカレンダーが揺れていた。
その一角に「決闘大会応援・アンナ」と書かれている。
ただし、明後日からの日付で。
ちゃんと解説できるよう開示されている情報だけでもと大会について事前に調べて置いたのだ。
開催日も情報見ながら記したのだから俺が間違えている訳ではない。

はえーよアンナ……。

■■■■■

「アッハハハハハ！」
「わ、笑わないでくれよ海美姉ちゃん！」
待ち合わせ場所の駅前広場。
キャリーバッグと俺の脳が情報を受け付けない物体を横に置く、水色髪の美人が大笑

いしている。
それに恥ずかしそうに抗議する赤面したアンナを、よれよれの俺は一歩引いて眺めている。

神月海美。
アニメでは「羽原海美」の名前で登場するアンナの決闘の師匠で、夫と組んだタッグ決闘では無類の強さを誇った新婚プロ決闘者。
俺が知っているのは結婚後の名前だけだったので、親戚の高校生のお姉さんというだけではこの人を思い出せなかった。というか、旦那とイチャついてる印象しかない。
確かにアンナと見比べれば、髪形や顔の作りが似てるように見えてくる。
いやそうでもないか？親戚じゃそんなに似てる訳ないし。
「だって、アンナちゃんが相変わらずで……あーおかしくっておなか痛いー……ウッフフフ」
ゆったりとした白地に海を連想する模様のシャツとジーンズを長い足で着こなす女性が、腹を抱えているのはアンナのせいである。
海美さんはそもそも数日続く大会に参加するため、明日から一緒に参加する同じ学校の生徒たちとハートランド内のホテルに泊まる予定だったのだ。

明日の夜には大会運営主催の前夜祭に参加するので、朝早くから仲間たちと合流して、ハートランドのアトラクションを楽しむつもりだそうだ。

今日の夜にも個人的な用でハートランドシティに住むある人に会うらしく、どうせならと仲のいいアンナとも遊ぶため、一人で朝から先乗りして一晩だけアンナの家に泊めさせてもらうとのこと。

日程の慌ただしさとアグレッシブさはどっかの誰かさんに通じるものがある。

で、アンナが勘違いした理由は、海美さんが来る日＝大会の日だと思いこんでいたからだ。

海美さんからしてみれば、見知らぬ少年をなかば引きずるように必死の形相で走ってきたアンナが息を切らすのをみて、その慌てぶりの真相がいつもの盛大な勘違いなのだから、そりゃ笑うさ。

それはそれとして。

「アンナ」

「うう……！いやぁ悪い悪い」

冷や汗を垂らしながら頭を掻いて斜を向くアンナのこめかみを掴み、こちらの方に顔を固定させジト目で睨む。俺が言いたいことはわかるな。

「……」

「あはははは……」
笑って誤魔化そうとしているが無視して鉄の意思をもって無言の凝視を続行する。
最近になって下手な説教よりこういう訴え方の方が効き目があると気づいた。
「……」
「……ごめんなさい」
「何について謝ってる？」
「間違えてユウヤを怒鳴って引きずったこと……」
許してくださいってか、許してやるよお！
なんて言うと思ったか、お前の反省はまだまだ！
「もうしない為にはどうすればいいと思う？」
「……まず間違えてないか落ち着いて確認する？」
「うん、だったらいいよ」
いままで何度も言ってきたことを覚えていてくれた……！
素直に謝れる子はとても立派だよ。その子供らしいクリアーで純粋なマインドを忘れないでくれ。
「仲良しなのね」
「どうも初めまして。築根ユウヤと申します」

「ご丁寧にどうも。神月海美よ」
柔らかな笑顔で丁寧に挨拶を返してくれる様は、まさしく優しいお姉さん。
落ち着いた雰囲気と洒落っ気のある美人というのは、子供からすればかなり大人に見えるものだ。
キレイな人だなぁ。アンナにとって憧れの女性というのも頷ける。
「君の話はアンナちゃんからよーく聞いてるわ。……大変でしょう？」
「ええ。でも最近になって慣れてきました」
「どういう意味だ！」
そのままの意味だよ。
アンナの暴走癖を理解しているようで俺の苦労を察してくれている。
いい人だなぁ。アンナにとって憧れの女性というのも頷ける。
だからアンナ。ちょっとでもああなりたいと思って近づこうとしてくれ。頼むから。
「でも今日はどうして君が？」
「あ！そ、それは……！」
「一緒に海美さんの試合を見る予定なんです。アンナが決闘のことわからないから、横で解説してくれと頼まれてるんですけど……。今日来たのは言った通りアンナの勘違いでして」

唐突に焦りだしたアンナに反応できず、割り込むタイミングで俺は説明してしまった。

なにか話すと都合の悪いことでもあるのだろうか。

「え、解説？でもアンナちゃん……」

「と、ところでさ！」

怪訝な顔の俺と海美さんの意識をそらすように、大声を飛ばして海美さんの荷物を指差すアンナ。

待ってくれアンナ！それの話題を振ろうとするな、それは今俺にとって最大の万能地雷だ！

「海美姉ちゃん、やっぱりこれに乗って来たんだな！」

直視を拒否したかった眼に機械の姿をした悪夢が映る。

海美さんの身の丈ほどの長さに、大砲のようなフォルム。

砲口付近に照準器にも見える取っ手があり、中央には座席らしき窪みと展開するのだろうタービンのような物が折りたたまれている。

どうみても、フライングランチャーだった。

いや、しかしカラーリングは海美さんの髪のような青と水色だ。
まだ飛行が可能なキャノン砲を模してるだけの乗り物だと言い張れるかもしれない。そうじゃなかったとしても、これは未来の決闘盤?と無理矢理押し切ってうやむやにする!
飛行する決闘盤もある時代だそれにフライングデュエルには遊星とZ―ONEという先駆者もいるのだあっても許される許されるだろぉー許されると言ってくれ。
集いし俺の願いの結晶で新たな認識を呼び起こすんだ!
「海美姉ちゃんのフライングランチャーはやっぱりカッコイイなー!」
「……フフ。本当にアンナちゃんはフライングランチャーが好きね」
「だってだってフライングランチャーだぜ!飛べるしバズーカだって撃てるなんてスゲーぜーフライングランチャー!」
やはり願いは虚しい。
俺の願いでは光差す未知の見解は成せなかった!
フライングランチャーとはどういうことですか。フライングランチャーということです!
何度も連呼して俺の希望をバーサーカーソウルで砕かないでくれ。もうやめて俺のホープポイントはもうゼロよ。

俺は夏休みになっても手膝をついて打ちひしがれることになるのか……！

「ユ、ユウヤくん？突然どうしたの大丈夫!?」

「姉ちゃん大丈夫だよ。こいつ時々こうなるけど、ほっとけばすぐ元に戻るもん」

「そ、そうなの……ところでアンナちゃん、上手く誤魔化せたわね。内緒なの？」

「うん……後でビックリさせてたくて」

呆れるアンナと困惑する海美さんが急に小声で内緒話を始める声に目もくれず、俺は日差しで熱せられた地面から顔も心も反転召喚ができない。

今は明かされた衝撃の真実に頭がショットガンシャッフルされて心を痛めているのだ。

フライングランチャーの出所ってこの人かよ！

確かにアニメでは、自分の乗り物なのに乗りなれてない様子が見て取れたが……。

まさか、カラーリング変えての貰い物か？実は遊馬先生を襲撃する時が初乗りだったのか？

「いいなー海美姉ちゃん。オレも欲しいなー」

「ダメよ。アンナちゃんには早いし、これは私にとってすごく大事なものだもの。今日はこれのためにきたのが半分の理由だし……」

フライングランチャーをひょいと持ち上げて大切そうに見つめる海美さん。

早い遅いの問題じゃないというか、なぜあの細腕でそんな飛行兵器を軽々と持ち上げられるんだ。

しまった彼女は全国レベルの決闘者だ。謎の筋力に納得せざるを得ない。

だって当然だろ決闘者なら！

は！決闘者ならば……これは千載一遇のチャンスだ！

名案を閃いた俺はすっくと立ちあがった。

「ほら元通りに……」

「海美さん、決闘してください」

「はぁ？」

「俺が勝ったらその危険物を処分……いえ、バズーカを射出できないようにしてください！」

「突然なに言いだしてんだよユウヤ！」

口を挟まないでくれアンナ。今は真面目な話をしているんだ。

驚いている海美さんに向かって頭を下げる。大事なものだと言っていたし今回の移動手段なら破棄してくれと言っても無理な話だろう。

「最悪アンナに渡さないと確約してもらうだけでいいですから！お願いします友達の命がかかってるんです！」

「意味わかんないけどバカにしてるのはわかるぞユウヤ!!」
決闘者ならば決闘で話をつければいい。
デュエル脳も甚だしいが、これが成功すればそれだけで問題が一気に収縮し、遊馬先生たちの安全は保障されたも同然になる！
アンナもこの間の美術館行ったあと辺りから嫌がらせの様なちょっかいはしなくなったし、このままイシズ・イシュタールも驚くような未来の姿を変える特大の一撃を呼び起こすのだ！
問題はもはや泣きも入っている俺の懇願に海美さんがどう応えるかだ。
おい、決闘しろよと言っても、横のアンナのように会話のドッチボールについていけない可能性もあり得る。
決闘式強制交渉は初めてやることなのだ。この美女を困らせているだけではないだろうか。
心配になってチラリと海美さんの顔をうかがう。
その顔つきは困惑しいる……。
「いいわ。決闘者同士の会話ならこちらの方が速いもの！」
「え、ええ!?」
訳はなく。

先ほどの柔和な表情からうって変わって、自信に満ちた精悍さと瞳の奥で闘志を燃やしてこちらをしかと見つめる海美さん。
決闘の間合いを取り、決闘盤とD・ゲイザーで俺をロックオンする彼女はまさしく決闘者！
よかったちゃんとデュエル脳だった。俺好みの答えで応じてくれた。
「いざ尋常に！」
――――決闘！
しかし、未来のプロだろうがなんだろうが関係ねぇよ。超えて見せる！
これは決して負けてはならない決闘。俺は未来を救う!!
うおおお！

「【水精鱗―ガイオアビス】で【N・ブラック・パンサー】を攻撃！」
「ヲーおぉぉ!?」
ダメだった。
襲い来る激流が俺と黒い豹を飲み込みライフを削りぬかれ、俺は敗北によって吹き飛ばされた。

くっ、攻めを焦って海美さんのライフポイントを一〇〇という鉄壁にしてしまったのが失敗だったか！

未来破壊にはまず社長の愛人【オベリスク】とその他一体を生け贄に捧げて、社長の嫁を呼ばなければできないことだったのだろうか。

【オベリスク】も【青眼】も、この世界じゃしっかり伝説のレアカードだ。ああ！もう！

「ふー。危なかった」

「やったやった！やっぱり海美姉ちゃんの決闘はカッコいいぜ！」

「ありがとうアンナちゃん」

弾ける笑顔ではしゃぐアンナに微笑みかける海美さんの姿からは、決闘中に見せた戦士のように研ぎ澄まされたオーラも鋭い眼光もなく、同じ人物だとは思えないほどだ。

「だぁー負けたー……」

「へへーん。どうだユウヤ！海美姉ちゃんはスゴイだろー！」

「うん……本当にー……」

未だ哀れなほど薄っぺらな胸を張り、自分が勝ったかのように喜ぶのは憧れの人の活躍が誇らしいからだろう。

倒れたままの俺を海美さんが手を貸して引き起こしてくれた。

「ユウヤくん、あなた強いのね！思わず本気でやっちゃったわ」

「いえ全然。海美さんの足元にも及びませんでした」
「そんなことないわ。工夫を凝らしたデッキをあんなに操るんだもの！」
いいえ。手持ちのカードパワーがないから手を尽くしてるだけなんです。
海美さんは全国大会に出るほどに何人もの決闘者を踏み越えた実力者。どう考えても格上だ。
そんな相手に善戦できたのは普通ならいいことなのだろう。
もっとも、この戦いにおいては善戦では意味がないのだ。
くっ、希望を与えられてそれを奪われるなんて……ファンサービスしやがって！
「じゃあまずはアンナちゃんの家に行きましょう。遊び周るなら荷物は少なくしたいしね」
「海美さん、負けた俺はなにをすればいいんですか？」
挑んだ理由は決闘中に不審にならない範囲で話したので特に繰り返して聞かれることはない。
アンナが持ったら危ないというのは共通認識だったのですぐ納得してくれた。
とはいえ、勝ったら自分の言うことを聞いてくれと言って負けたのだから、デュエル脳ムーブをした決闘者の仁義としてこちらも彼女の要求に応じなければならないだろう。

「そんなの……ううん、そうね」
始めはこそ海美さんは、それは気にしなくていいと告げようとしたのが見て取れたが、アンナを見てなにかを思いついたようだ。
アンナの後ろにまわってその両肩に手を置き、しゃがんでアンナの肩から茶目っ気たっぷりに顔を出す。
「ユウヤくん、私たちとデートしましょう！」
……。
「はぁ」
「はぁ!?」
思わず俺とアンナがハモる。
温度差は激しかったが。

■■■■■

デート。
それは男女の関係がスピードの中で進化した時に起こる決闘。
アイススケートなどで伝説の逢引をすることに命をかけるいいムードの者たちを

人々はカップルと呼んだ……。
「アンナちゃん可愛い！やっぱりフリフリなのも似合うわね！」
「う、ううう……！」
だから、小学生女子が親戚のお姉さんの着せ替え人形状態になってプルプル震えているのを同級生男子が見るのをデートとは呼びません。
俺たちはシティ某所のショッピングモール内の服屋にいる。
先ほどまでは普通に海美さんの服選びに二人が姦しくしているのを俺が時々感想を言いつつ見守っていたのだが、ある程度したところで海美さんの標的が服からアンナに変わり現在に至る。
「こんなヒラヒラしたのオレには合わないってぇ……」
普段は動きやすい服装ばかりなせいか着慣れないタイプのゴスロリ調の白黒柄フレアスカートワンピースをキョロキョロと見下ろしている。
顔が真っ赤になったままだが、まんざらでもないようにも見える。
「そんなことない！そうでしょうユウヤくん」
「はい。勝気な表情から意表を突いてくるコンボが合っていて胸キュンポイントが高くとても愛らしいと感じます。……痛い痛い」
「……！……！」

無言の拳をブンブン振り回して当てに来ないでくれ。結構痛い。
照れを隠したいのだろうが、顔がニヤけているのを噛み殺せていないから軽い変顔になっている。
俺がこんなにノリノリなのにはとてもとても深い事情がある。
男子であるが故に最初こそ女性服売り場に入ることすら少々抵抗していたのだ。
そもそもからして女性がウィンドウショッピングにかける熱も時間もまったく理解できなかった俺は、デートという名の荷物持ちかーとも考えていたため若干低いノリになってしまった。
それを見かねた海美さんが楽しくない？と俺を心配してしまったのだ。
楽しんでいるのに水を差してしまったのを申し訳なく感じたが、誤魔化すのもどうかと思案して結局、どうしてそう熱中するのかがわからないと正直に伝えた。
海美さんはそれに対して諭すような声で真剣に解説してくれた。
「ユウヤくん。女の子にとって服を買うっていうのはドローと同じなの。お店というデッキからお金というドロー加速で服を引いて、手札を増やしてコンボを狙うのよ。沢山使える手札があれば色んな戦略を立てられるし、ドローもそれだけでワクワクするでしょう？」

サンダーボルトに打たれたような衝撃だった。
目から鱗の決闘者でもわかる説明をされては納得せざるを得ない。勉強になりマース！
そのドローを全力で見届けよう！サーチするカードだってしっかり考えなきゃダメだもんな！
アドバイスだって求められるのなら万丈目サンダーの名に懸けてキチンと答えるとも！
一、十、百、千！満足させてやるよぉ！
「もっと加減してくれよ海美姉ちゃん！」
「んー難しいわ。だってアンナちゃんの反応がいつもより可愛いんだもの！彼のおかげね」
「うあー！うわー！」
その後も海美さん主催のアンナファッションショーは続いた。
名に懸けたはいいものの、海美さんの服選びと違って服を変えるたびに感想を答えさせられ、前の服と同じことを言えば露骨に不満そうな顔で返されるのには苦労した。
試してるんだねこの俺のボキャブラリーを！こんなところで止まらず、少ない語彙の

限界にゴーウェイするかっとビングだ！

■■■■■

「このお店、いい服がそろってて楽しかったわね！」
「こ、これで歩いて大丈夫なのかぁ……？」
「アンナちゃん、可愛いから大丈夫よ」
　着せ替えと買い物を存分に堪能して最高のサティスファクションをしている海美さんと、沢山着替えさせたお詫びにと海美さんからプレゼントされた服を着ているアンナ。
　ドレスを思わせる真っ白いフリフリのワンピースを試着室の外でまで着続けるのは、まだ抵抗があるのだろう。
「ユウヤくんだってすごく似合ってるって言ってくれたじゃない」
「そうだけど……」
　それへのコメント強靭無敵最強だったんだが……いやふつくしいだったか？
　白かったから社長のセリフでしのいだことは覚えている。後半は褒める言葉を絞り出すのに必死で息切れしてたからなぁ……。

海美さんを盾にするよう陰に隠れてその脇からこっちを見つめるアンナは、とても恥ずかしがりつつなにか言ってくれと訴えかけてくる。
「いつもの動き易そうな服もいいけど、そういうのも新鮮でいいと思うよ。どこも変じゃないし」
「そ、そうか?」
俺の迷いのない返答に安心したのか、海美さんの陰から出てくる。
まぁ、あれだ。デスポリスの格好よりは、はるかに似合っているというだけの話だ。
うんそれだけだ。
気を取り直して、買い物袋を持ち直す。
結構な量があるので彼女は自分で持つと言ってくれたが、ここらは男の甲斐性だろう。
もしくは敗者への罰だ。ダメージを受けるたびに電撃を浴びせられたり、体が徐々に消えていくことに比べればなんてことは無い。
「さぁ、次のお店に行きましょうか!」
「まだやるのかよ〜……」
「アンナちゃんは見たくないのユウヤくんがカッコいい服着てるところ」
「行くぞユウヤ!お前も同じ目にあいやがれ!」

項垂れていたアンナの表情が一転、獲物を見つけたとばかりに輝き俺の手をグングンと引く。

こいつ俺をコストにして自分も着せ替える側になる効果を発動する気だな。

俺の罰☆ゲームはまだまだ続くのか……なまじデュエル脳の領域に踏み込んだ俺に魔の試着部屋という闇の扉が開かれたのだろうか……。

半端な気持ちで入ってくるなよデュエル脳の世界によぉ、という幻聴が聞こえた。

「あれ、海美ちゃん？」

男性服の店の入り口でガスバーナーの炎を連想する青い髪形の男性がこちらに声をかけてきた。

「あら？飛夫くん！こんなところでバッタリ会うなんて！」

「久しぶり。今日来るのはわかってたけど気の早い再会だね」

このミリタリーシャツを着こなす高校生くらいの男性は、どうやら海美さんの知り合いらしい。

ん？なんだか見覚えがあるようなないような……。

「アンナちゃん、ユウヤくん。紹介するわ、こちら羽原飛夫くん！私の用事の相手よ」

「初めましてボーイアンドガール」

名前を聞いて納得した。

羽原飛夫。
海美さんの夫でありタッグパートナーとして登場するプロ決闘者だ。以上。
……いやふざけているのではなく、それ以上の情報がほぼないのだ。
強いて言えば、決闘者特有の身体能力で身重になったばかりの海美さんを気遣い、決闘で吹き飛ばされるたびに受け止める愛とガッツがあったぐらいか。
まぁ、全部は今から見て未来の話だから、彼の情報は何もないのと同じことだ。
しかし、今日の用とはなんだろうか？
「彼は明後日の大会にも出場するし、アレを作ったすごいメカニックなのよ」
「アレって……まさか」
「そうフライングランチャー！」
危険をアクセルさせるすべての元凶シンクロを生み出した鴻上サウザンドはお前かぁぁぁ！
俺と……俺と決闘しろぉぉぉぉ！
「【単一化】でカバートークンたちの攻撃力を【幻獣機ドラゴサック】と同じにする！さ

らに【ミニマム・ガッツ】で……」
「【トークン謝肉祭】を発動！」
「イワァァァァーク！」
やはりダメでした。
幻獣機トークン二機がサンバカバたちごとを焼き払われ、俺は決闘のために移動したショッピングモールの中庭広場に転がった。
今度は完璧な手札がＭｅの勝ちじゃないかと確信させ、ダメじゃなーいという声が聞こえたような気がしたのに……！ライフを五〇残して超鉄壁にしてしまうなんて。
せっかくこの間の【電池メン】の子と交換した【単一化】で大量強化できたから、【ドラゴサック】の攻撃力をゼロにして畳みかけるつもりだったのに。
ドイツもコイツもアイツもソイツも人の希望を土足で踏み荒らしやがって！
いい加減沈めよ沈めぇ！フライングランチャー！
「とても楽しい決闘だったよボーイ。大会前にこんな決闘が出来るなんて嬉しいよ」
「ありがとうございます……でもなんであんな物作ったんですか？」
「……昔、廃棄予定で使える部品を集めて組み上げたらああなってしまったんだ」
羽原さんは遠い目をしているがなにがどうなったら大砲が飛ぶんだ。
どうして大砲と合体しないんだと疑問にでも思ったのか。

部品は拾ったじゃないだろう本当にメ蟹ックじゃないかチクショウ！

「元々は自分で乗ってただけだったんだけどね。彼女が転校する時に譲ったんだよ」

「転……校……？」

「ええ。もともと私は彼と同じ学校だったんだけど親の仕事の都合で引っ越したの」

「へー。そーなんだー」

俺たちの決闘が長引いていたので、見える範囲の店で買い物をしていた海美さんとアンナが戻ってきた。

転校。

……何故だろう。その言葉を聞いただけでものすごく嫌な予感がしだしたのは何故だろう。

「転校する時にフライングランチャーを賭けた決闘をしたのよ」

「何故そんなことを……？」

「それはね……」

とても大事なことを話すかのように真剣な面持ちで重々しく口を開いた。

きっと重要な理由があるのだろうと耳を傾ける。

「彼との関係を次のターンに繋ぐためよ！」

……意味不明の返答だった。なにを言ってるんだまるで意味がわからんぞ。

「フライングランチャーは彼が作った物だから、他の誰にも整備ができないの。だったらこれを持っていれば会いにくる理由は勝手にできるのよ！」
「おおー……！」
「そしてコレの所有権を賭けて決闘を挑んで勝てば、お願いを聞いてもらえるわ！」
「決闘ってそんなこともできるのか！」
説明は失敗フラグだと思います。戦略もなにも聞いてた羽原さん頭抱えてるし……。
アンナはよくわかってないのに感心してるようだが。
待てよ。そういや某ＪＯＩＮさんが手の内をすべて見せるのは恋愛上級者のテクニックと言っていたようなそうじゃないような……。こうして実際に見ると恫喝外交を連想するのは何故だろうか。
アニメでは新婚だからああなのかと思っていたが、もしかしてこの人デュエル脳と恋愛脳が融合モンスターとして現れ出ちゃってるのではないか。
いやもうそこまでの積極性があるなら「会いたかった」が理由でいいのでは……！
駆け引きの重要性は恋愛も決闘も同じよ！とアンナに力説する海美さんから離れて、羽原さんにひそひそと小声で問いかける。
「羽原さん、もしかしてですけど海美さんってアレを渡しちゃいけないタイプの方なんじゃ……」

「ああ、やっぱりわかるかい？」
「ならなんで賭けちゃったんですか……!?」
「賭けとはいえ決闘を挑まれたら断れないさ。決闘者ならわかるだろうボーイ……」
「……くぅぁ、わかってしまうのが辛い……！」
昨日までならどういうことだと言えたのに、今朝自分がそれを利用したからなにも反論できぬ！
断れないよな。固い決闘で結ばれた相手の頼みだもんな……。
「それにさ転校して距離が離れれば、彼女も視野が広がって余所に目が向くと思ってね……」
「……へぇ」
「はッ！」
振り返ると、俺たちのささやく程度の会話をいつの間にか傍で聞いていた海美さんが不気味なほどの笑みを貼り付けていた。
海美さんがポケットからボタンだらけの小さな機械を取り出し操作をしだした。
そこから数秒、空の彼方からなにかが飛んでくる。
大砲の両側に飛行のためのタービンがついた物体が飛来する。

やっぱりどうみてもフライングランチャーだった。

呼び出されたフライングランチャーが自動運転で勝手にやってきたようだ。

こんなの自作するなんて、羽原さん決闘者じゃなくても生きていけるだろう。

いや、そっちの方が成功するのでは……。

海美さんが無駄に洗練された無駄にカッコイイ無駄のない無駄な動きでフライングランチャーに飛び乗った。

「待つんだ海美ちゃん、こんなところでバズーカは！」

「これはバズーカじゃないわ……愛よ」

ああうん……痛みこそ愛って言った奴いましたものね。それが君の愛なんだね……。

なんだろうこれ新しい昼ドラでも始まったのか。

ハイライトの消えた目からは優しいお姉さんなんて印象は見る影もない。

「すこし離れたくらいで人生のデュエルターゲットのロックは外れない！それを私がわからせてあげるわ！」

「マズい！またエキサイトしだした！」

羽原さん、あれはエキサイトですむ形相じゃないと思う。

またってことはこうなることが度々あるのか……。

本当になんでそんな相手にこんな危険物渡したぁ！
やっぱりアンナの親戚だけはある。思い込んだら止まらないところが一緒だ。
おっかないな神月の女。
「勘弁してくれ！」
「待ちなさい飛夫くん！私から逃げられると思わないで！」
全速力で走りだす羽原さんを追って、海美さんは俺たちを置きざりにフライングランチャーで飛んでいく。
これはどうみても逃げ切れないだろうな……彼はもう終わりですね。
というか未来のことを知っている俺からしてみると、彼らは確実に結ばれバカップルの如き新婚になる運命なのだ。
こうなっているのは男の方が迂闊な行動ばかりとっていたが為に現れた未来を導くサーキットが完成したに過ぎない。
どうあがいても捕まる運命力に支配されているのだから、彼は早々にサレンダーして彼女を受け入れた方が苦労は少ないのではなかろうか。

――不意に、彼らの姿に逃げる自分とフライングランチャーに乗るアンナが重なっ

て見えた。

慌てて、ごしごしと目元をこすって逃走追走する二人をもう一度見た。

ちゃんと羽原さんと海美さんだ。何も幻視などしていない。

俺にはおかしなパワーヴィジョンなど見えてなどいない。

いないったらいないのだ！

仮に見えたとしても追われる側になるのは遊馬先生のはずだからやはり大いなる間違い。

「ユウヤ……」

海美さんがえらいハリキリガールになった姿にあっけにとられ静かだったアンナが俺の袖を引く。

「なに？」

「この荷物、どうすんだ？」

俺たちの横には海美さんが置いて行った、どうみても小学生二人で運ぶには辛いであろう量の買い物袋が残されている。

「……ここで待とうか。気がすんだら冷静になって戻ってくるだろうから」

ああいう暴走は経験上、収まるまで待つしかないのだ。
近くにあった長椅子に荷物をまとめて、俺たちは腰かけて待つことにした。
俺のデュエルマッスルならば運ぶこともできなくはないが入れ違いになっても困る。

結局、よれよれになった羽原さんをつれて海美さんが戻って来たのは二時間後だった。
ぺこぺこと申し訳なさそうに謝る彼女に、待ちくたびれて寝てしまったアンナに膝枕をしつつ、慣れてますからと答えた俺は酷く無表情になっていた気がする。
幸せそうに「ずっとオレのモンだぁ……」なんて寝言とよだれをこぼすアンナに足を掴まれて動けず痺れるぅし、ズボンも垂れたよだれでベトベトになった。

ああ、やっぱり逃げられなかったか……。
だれか俺と羽原さんに元気のシャワーを注いでくれないだろうか。

その数日後の話だが、羽原さんと意気投合した。理由は聞くな。

どういう機構でフライングランチャーが飛んでいるのかちょっと疑問だったので質問したら、気が付いた時には、もらったキャンディ舐めながら俺が自力でドローンもどきの飛行物体を完成させていた。

飛夫兄さんが素人への説明もやる気を引き出すのも上手すぎるのが悪いのだ。

断じて俺がメカニックの道を歩みだしたわけではない。

ただ、今なら開かないドアも開けられそうではある。

き、きっと、そのドアは遊馬先生も俺も爆撃されない未来のことだから……。

だから大丈夫だ。うん。

悪い目は誰に向いた。

「なんで……なんでこんなところに……」

薄暗い通路に切れかけた蛍光灯がいくつか。
まだ日中だというのに窓のないこの場所には真夏の日差しが直接届かず、頼りない電光と遠くに輝く通路入り口の床からぼんやりと反射する太陽光だけが、暗闇に対抗している。
点滅する灯りが俺と倒れ伏す男性と、宙高くに浮かぶカードを照らす。
その真っ黒なカードは炎を纏うようにオーラを放つ。
しかし、その色は漆黒。
新たな光源になるどころか、周囲の微かな光さえ取り込み燃焼する燃える闇でしかない。
小さくも圧倒的な存在感を放つそのカードの名を、俺は知っている。

【Ｎｏ．９６　ブラック・ミスト】

ＺＥＸＡＬ主人公の片割れ、アストラルの記憶と力であるカード『ナンバーズ』の一枚であり、宿敵ドン・サウザンドの力がアストラルの中に残留したために生まれた、意思を持つナンバーズ。

宿主の意識を操る力を持つ上に、黒いアストラルの姿を取りながらも悪人らしい危険な思想をもって何度も遊馬先生たちに反乱を起こす厄介な存在だ。

決闘盤を展開したままの俺を見下すそれを前に、暑さに起因しない汗が頬と背中を伝う。

ナンバーズ自体はアストラルが遊馬と出会った際に五〇枚散らばり、【Ｎｏ．７】や遺跡のナンバーズなどがはるか昔の戦いで五〇枚散らばったはずなので、アストラルが来るより前に存在していることに疑問はないが……。

よりにもよってこいつが既に野に放たれてるとか最悪だ。アストラルがくるまで我慢してくれよ。

はえーよミストラル！

■■■■■

『――――座の貴方。残念ー最下位です……。会いたくない相手とバッタリ会っちゃうかも』

今朝はパン主食なのでミルクでも貰っていたところ、テレビが女子アナウンサーの声で今日の俺の運勢が悪いことを告げてきた。

『でも大丈夫！運気を上昇させるラッキーパーソンは白い服を着た人、ラッキーアイテムはバナナです！今日も頑張っていきましょー！』

今日はただ大会観戦と応援をするだけなので、俺自身の運命力は関係なかった。

なので軽く流して椅子に背を預けながら女子アナの明朗な声をＢＧＭに、牛乳を飲み干した。

「あんた最下位だって。今日は気をつけなー」

「たかが朝番組の占いでしょ？気にすることじゃないって」

一緒に見ていた向かいの椅子に座る母さんが、パンをかじりつつ軽い口調で言ってきた。

斎王のようなどうみても特別な力持ってます、みたいな占い師が直に「あなた死相が

出てるわね」と言ってきたなら、最悪ダークシグナーになることを覚悟しなければいけないだろう。

だが今のはただのニュースのおまけレベルの星座占い。

一位の時だけライフイズカーニバル！と太陽が真っ二つになるまで喜んでおけばいいものだろう。

最下位の時は占いとはどんな効果だ、いつ発動する？と知らんぷりで十分だ。

「アレ意外に当たるのよねー。私が一位だった時、掃除したらお父さんのヘソクリ見つけたし」

「ほっといてあげなよ……。こっそりでも一生懸命父さんが貯めたモノなんだから」

「そうね。貯めてくれたおかげで皆でお寿司食べれたんだもの」

「あれの代金、ヘソクリ!?」

急に明かされる衝撃の真実！

道理でこの前、回転寿司に行ったあの夜に父さんが妙に意識他界系の眼をしていた訳だ。

俺はまーわーるーんです！と大喜びでキュウリ入ってないイクラを頼んでしまったが、もっと加減するべきだったろうか。

でも、父さんも若干ヤケ気味に「遠慮するな遠慮するな！」とバンバン注文してたし

なぁ……。

酔いに酔って、帰り道でハートランドシティ名物であるお掃除ロボットの「オボット」に向かって「掃除め……掃除めぇ!」と絡む様は流石に見てられなかったが。

下手に隠したせいで、父のヘソクリは回転寿司を経由して経済を回しに旅立ってしまったんだな。

「ま、お金の話よりも今日の話よ。暑くなるらしいから倒れないようにね」

「準備してるから大丈夫だよ。帽子にタオルに水筒に保冷剤に……」

「ユウヤは大丈夫そうだけど、アンナちゃんも一緒なんでしょ?気を付けてあげなさい」

「……うん、そっちはちょっと不安かな」

「え?そうなの?」

流石に真夏になんの準備もしないほどアンナはバカではないし、海美さんとの買い物の時に熱中症対策をしておくよう注意もしてある。

しかし、相手はあのアンナだ。自分の分だけでなく、もう二、三人分の用意が要るかもしれない。

単純に応援に熱くなってオーバーヒートするかもしれないので、最悪の場合に備えて手当が出来る物も持って行くつもりだ。

おかげでリュックの中は満タンなエネルギーが隙間を無くして困ってるぜ。

「油断してあんたが倒れてアンナちゃんに心配かけないようにしときなさいよー」
「ははは。大丈夫大丈夫」
そろそろ出かける時間なので、ごちそうさまをして荷物を取りに部屋に戻る。
ベットの横に置いたパンパンのリュック。これの外付けポケットにリビングにある水筒を装備すれば準備万端だ。
小学生の身体だとそこそこの重量だが、デュエルマッスルを駆使すれば問題ない。
見た目はえらいハリキリボーイになるが必要経費と受け入れよう。
――アレ意外に当たるのよねー。
……対太陽光防御のために用意した超熱血球児風の帽子を被ってから、ふと気になってD―パットからデッキを取り出す。
決闘者の運試しならこれが手っ取り早い。デッキの上の一枚だけに指をかけて引く。
「ドロー」
入れたはずのない【EMモンキーボード】を引いた。
「レギュレーション違反だバカ野郎!?」
カード手裏剣練習用の的に向けてモンキーボードを投げつける。

スカンと乾いた硬い音とともに的のど真ん中へ笑顔の猿がストライクした。
社長が嫌いなオカルトレベルの事態に顔から血の気が引いて息と魂が荒ぶってしまったが、ペンデュラム効果のないこの世界の猿は禁止カードではない。
デッキに投入されていても違反行為にはあたらないが、入れても使うあてがないのだ。
最近になってＥＭを数枚だけ手に入れたが、やはり活用法がないのでデッキには入れる気はない。
サテライトと書いた保管用の箱に仕舞っていたはずなのだが……。
確認したが猿を抜いたデッキの枚数は構築通りの四〇枚だった。
……今日、本当にヤバいかもしれない。

――――続いてのニュースです。先月――――国で発見された遺跡で発掘された遺物が盗まれました。
専門家によると、盗難にあった遺物は古代のカードのような物と考えられ……。

■■■■■

「あ〜づーい〜ー……もう無理ー！」

アンナ。早くも夏の太陽相手にサレンダー。

二日前に買ってもらったばかりの白いワンピースに、親に被されたらしいふちの広い麦わら帽子という中々にベタな服装をしているのに、男らしく足を開いて座り前傾で太ももに肘を置いている。

首からタオルも垂らし、姿勢だけ見たら完全にオッサンである。

しかし、そうなっても仕方ないと思える真夏日の気温だ。

雲一つない快晴というのがまた厄介で、ハートランドにある「ハートの塔決闘会場」は日差し避けの屋根も隠れられるシャトルもないので、観客たちはみんなたおしてやると言わんばかりの太陽に負けずに応援しなければならない。

うだるような暑さは正直言って隣の席の俺もキツい。

おのれ太陽、人々を二〇ターン熱してズシンでも呼ぶ気か。

あの世で眠れる巨人になってしまうだろう。

「海美さんの試合の予定時間まで結構あるし、それまで屋根のあるところにでも行こう

か？」

観客席は出場者を応援に来た高校生などでそこそこ埋まっているが、幸い俺たちは移動しやすい通路横の席を確保できたので、涼みに行っても戻ってきやすいだろう。

周りの席も、今朝の内に海美さんが紹介してくれた学校の友人たちが座っているので、荷物だけ置いていても見ていてくれるだろう。

「いい……海美姉ちゃんも姉ちゃんの学校の人も頑張ってるのに、オレだけ逃げてられるかよ！」

今にも溶けだしそうなほど汗だくで、本能的にか体を冷まそうと口を開けて舌をだしている。

それでも海美さんのため太陽のズシンカウンターに耐えて耐えて耐える所存のようだ。

D―ゲイザー越しにステージを見れば、いくつかの試合でモンスターたちが戦っている。

当然、それを操る決闘者たちもこの熱に耐えながら挑んでいるのだ。

熱き決闘者たちのバーニングソウルに負けていられないと思ったのだろう。

俺好みの答えだ。ならば俺も付き合うとしよう。

「だったらちゃんと水分取らないと。持ってきてるよね」

「おー……もちろんだぜー」
アンナが持ってきた去年の家庭科の授業で見た覚えがある柄の手縫いリュックから、保冷カバーを被されたペットボトルを抜いた。
彼女は中身を飲もうとひっくり返すように一気にあおった。
しかし、なにか変なのかペットボトルを逆さにしたまま振り出した。
……まさか。
「飲めねー！なんでだ!?」
「アンナ、貸して」
うがー！と憤慨するアンナからペットボトルを受け取りカバーを外して確認した。
案の定、カッチカチに冷凍され氷河期状態のスポーツドリンクが真の姿を見せた。
一見正しく見えた冷凍保存、しかしそれは大いなるよくある間違い！これはもう終わりですね。
「全然とけてねぇー！」
「ここまで凍ってるとね……。これとけるまで待ってたらアンナ倒れるよ」
「嘘だろぉ……うわぁカチコチだー硬ぇー……」
少々液化してはいるものの、この冷凍ペットボトル究極態は保冷剤代わりにするしかないだろう。

絶望したような深刻な顔でショックを受けるアンナに、俺は用意済みの水筒からフタのコップにスポーツドリンクを注いで差し出した。

絶望するなアンナ。希望（水分）はある。

「はい。あげる」

「え？それは……いらない」

「遠慮しないで飲んで。水分補給大事だよ」

「でも、それ間……スだし」

「熱中症とか熱射病って結構怖いんだよ。暑さにやられたら最悪死んじゃうんだからさ」

いいから飲みなさい。今こそお前が飲むべき時。

ゴニョゴニョとなにかか細く呟いて渋るアンナに無理矢理コップを渡す。

開いていた脚も閉じて、押し付けられたアンナの目が俺の顔とコップを往復する。

やがて乾いているせいか、カップをジッと見つめたまま彼女の喉がゴクリと鳴った。

「今日は使ってないし、ちゃんと洗ってあるから大丈夫だよ。俺の分は別に持ってるしね」

「……そうか」

すっと死んだ目になったアンナは迷いなくスポーツドリンクを飲んだ。

良い飲みっぷりだ。塩分もとれたしこれなら応援にも力も入りレッツエンジョイ出来るだろう。
「オレ、海美姉ちゃんの試合まで塔の中にいようかな……」
「さっきまでの意気込みはどこに……!?」
やはり暑さに限界バトル叩きつけられていたのだろうか。
心なしか身体全体から哀愁が漂っているようにも見える。
とりあえずアンナのペットボトルに持ってきた薄手のタオルを巻き付けて渡した。
「これ首筋とかに当てればちょっとは涼しくなるから」
「うー……あぁホントだ。冷たくて気持ちいいー……」
「ほらごらん、スゴイよ。ゼラートとデビルマゼラが並んで……いやホントにスゴイな!!」
グロッキーなアンナに興味を持たせるために、適当な試合のフィールドを指差して軽く実況したつもりだった。
しかしそこでは【大天使ゼラート】二体と【デビルマゼラ】二体が並んで大活躍している、意味不明な状態をつい二度見した。
並べる条件が厳しいからとかではなく、こんなプレッシャーだらけの大舞台の公式戦でそれをやりとげた選手の度胸……いやカードへの愛に脱帽である。

本当に帽子を取りたかったが、太陽光に対し無防備になるので止めた。
「あれどうやったんだ!?どんなコンボで……ああ!ちゃんと見とけば良かった!」
「ユウヤ……こんな暑いのに元気だなー……」
「熱いから元気なんだよ!」
引き気味のアンナを余所にその決闘を凝視して少しでもと情報を集める。
二種類のフィールド魔法が必要だから【盆回し】か？いやあれだと相手が発動してくれなければどうしようもないしそもそもどんなソリティアして【ゼラの戦士】とあの上級モンスターを集めた!アリガトウオレノデッキで一ターンで出したわけないよなってああ!考えてる内に相手がエクシーズを……。
ゾクリと、突如なにかが胸を貫き、そのまま腹と背を這い回るような感覚が全身に鳥肌を立てた。
「勝……つンだ……ミんな……期待……るんダ……!」
観客席からは遠く、届くはずのないかすれた決闘者の声をなぜか俺の耳は捉えた。
ＡＲで展開される渦巻く銀河を思わせるオーバーレイネットワークから、黒いナニカ

がせり上がるように、生まれ出るように浮上する。
――【Ｎｏ．８５】……。
それは巨大な箱だった。
相対する悪魔と天使たちを容易に収納できるだろう六面体が、フィールド全体と対戦相手に大きな影を落とす。
――【クレイジー・ボックス】！
持ち主がカード名を宣言すると、黒一色だった箱に数字らしき形をした赤い光が点り、カシャカシャと音を立てて中身を見せるように変形していく。
隙間から覗かせるように開かれた箱からは、モンスターの本体らしきものの鋭い爪や球体状に伸びるグロテスクな骨格が見え隠れしている。
「うえぇー……ああいう変なモンスターもいるんだな」
「……」
「ユウヤー？」
アレを見たアンナが話しかけてくるがそれに返答する余裕がない。
なぜか、あのモンスターと決闘者から見開いた目を逸らせない。
嫌に心臓の脈打つ音が聞こえて、肌の下で動く血の流れも感じ、まるで騒いでいるようだ。

なのに、身体は蛇に睨まれた蛙のように身じろぎもできず、自分が呼吸しているかもわからない。

おかしい。

たかが【Ｎｏ．８５】だぞ。

この世界では特別な事情を持つ『ナンバーズ』とはいえ、お世辞にも強いとは言えないギャンブルモンスター相手に、俺はなぜ過剰に反応しているのだろうか。

アレと向き合っているわけでも自分の身に危険が迫ってもいないのに首に冷たい汗が流れ、まったく寒くないのに体は小さく震えて止まらない。

箱の中のまぶたが開く。眼球がギョロリと俺をまっすぐ睨み……。

視線が交わった。

「おーいー！大ー丈ー夫かー？」

アンナが俺の肩をつかんで身体を思いっ切り揺らしてきた。

強制的に【Ｎｏ．８５】から視線が外れ、視界が四方八方をメチャクチャに捉えて酔いそうになる。

「だ、だい、大丈夫、じょうぶだから止め、止めて酔う……！」
「そっか……じゃあ飲んどけ。ほきゅーが大事なんだろ」
揺するのを止めたアンナはドリンクの入ったフタコップを差し出してくる。
それを一気に飲んでから、動かなかった身体が自由になったことに遅ればせながら気づいた。
だが、身体が自分のものではなくなったかのような異常に恐怖は消え去らず、それが吐き気となって襲ってきた。
「……ごめんちょっと、その、トイレ」
「お、おいユウヤ！」
堪えきれなくなって、心配してくれるアンナの静止も振り切って通路階段を駆けた。

■■■■■

吐きたくなったのに観客席近くのトイレは混みすぎていて、空いてるところを探して塔の内部を迷ううちに吐き気が引いてしまった。
塔の内側なのか窓のないスタッフ用と思われる通路は、冷房が効いていて汗も乾いてしまった。

それなのに頭は熱に浮かされてぼんやりとしか働かない。
席を立ってから結構な時間が経ってしまったので早く戻らなければアンナに怒られてしまう。
が、体力をゴッソリと抜かれたような虚脱感が、走りたい足に力を送るのを邪魔してくる。
もっと速く疾走……れないな。歩こう。
……たかがナンバーズを見ただけでこの有り様か。
遊馬先生に救われたのだから、いつか来る戦いでも助けになりたいと思っていたが、こんなことでは足を引っ張るだけだ。
いや、実はあの『Ｎｏ．８５』は特別ドン・サウザンドの力の影響を受けているとか……ないな。
隣にいたアンナが平然としていたのだから、俺の身体が特別耐性がないと考えた方が自然だ。
あの全身をじわりと浸食してくる悪寒。
吐けなかったゆえの胸に異物が残っているような不快感。
できるのなら、もう二度とあんなものは見たくないというのが情けないが本音だ。
この街の中にしてはゴミがわりと落ちているやや汚い道をよたよたと進む。

大会中で人がいつもより多くてオボットが上手く掃除できていないのだろうか。
結構な数のオボットを見かけたが、人通りのあるところを優先してこういう裏側みたいなところは後回しなのかもしれない。
「――――選手が倒れたんだって？」
よたよたと進んで丁字路に差しかかると、話し声が聞こえて歩みを止めた。
角に手をかけ少し顔を出して盗み見ると、ハートランドスタッフの制服を着た男性二人がいた。
「ああ。倒れていたところをＭｒ．ハートランドが見つけたらしくてな。今は医務室だ」
「その選手って、箱みてぇなモンスターエクシーズを使ってた奴だったか」
……【Ｎｏ．８５】とＭｒ．ハートランド。
ナンバーズハンターに狩られてしまったのだろうか。
ナンバーズハンター。
ハートランドシティの創設者、Ｄｒ．フェイカーがナンバーズを集めるため部下のＭｒ．ハートランドに育てさせた決闘者たち。
うかつにナンバーズを持ったまま決闘すれば、特殊な力をもたらすナンバーズを奪うために持ち主の魂ごと刈り取られ、ひどい時にはミイラのような有り様にされることも

ある。

まさか、この大会をハートランドでやったのはあのナンバーズを回収するためじゃないだろうな。

表向きはハートランドの人気者であるＭｒ．ハートランドの口利きならそれくらいできそうだ。

いや。それなら、あの決闘者のところにハンターを差し向ければ十分だ。

まさか他にもナンバーズを持っている参加者がいるのか？

それともただの偶然で、たまたま出場者が持っていたから狩っただけなのか。

「暑さにやられたんだろうってよ。対策のため合間に数回スプリンクラーで打ち水するそうだ」

「おう了解」

夏の大会となれば、意識不明者が出ても気候のせいにできるから誤魔化しやすいってことか。

Ｍｒ．ハートランドが発見者の時点で本当に熱中症ということはないだろう。

――ということは、少なくともうアレを見なくて済むのか。

ああ、良かっ……。

「しっかし勝ちあがったってのに可哀想に。試合も棄権なんだろう？」

――――――――――。

「そうなるな……。見舞いに来た子が言ってたけど、同じ学校でここまで勝ち上がったのが彼だけらしくて、相当気を張ってたんだと。運ばれてる間も『勝つんだ、勝つんだ』ってうなされてた」

「辛ぇな……。俺たちも倒れねぇよう気いつけようぜ」

話が終わったのか、声が遠くなっていく。

会場の入り口が二人の向こう側に見えていたから、そちらに移動したのだろう。

そんなことはもはやどうでもよくて、角を握りつぶすさんとばかりに手が力がこもる。

やがて脱力するように手が離れ、壁に背を預けて座り込んだ。

――――勝……つンだ……ミんな……期待……るんダ……。

あの箱が現れる直前に聞こえた、かすれ出る悲鳴のような思いつめた声が頭をよぎった。

多くの期待を一身に背負って立ち向かい、最後に姿を現したナンバーズは自ら動かず

悪い目ばかりな異形のサイコロ。
それでも勝利を掴み取った人間に待っていたのは、カードも戦う権利も奪い取りにくる決闘者。

……人が倒れたってのに何が良かっただ馬鹿野郎。

拳で膝をなぐりつける。
いまいち力が入らなくて大した痛みなど感じなかった。
それがまた腹立たしくて仕方ない。

「あ……ぁ……っ……た……ぁ」

不意にナメクジがずるりとのたくるような、遅く滑りを帯びた声が聞こえた。
声の方に目を向けると俺が来た道の反対側に男が立っている。
半袖の白いワイシャツに黒いズボンという服装は学生にも成人にも見える。

顔からは生気が感じられず、頬はこけたように痩せ目には隈が深く刻まれ、俺を見つめるその目はなにも映していないかのように暗い。
首を傾げたままゆらりと動くそれは説明のできない異様さを持ち、見える風景からその男だけが浮き上がっているように見せてくる。
「あの……なにか御用……」

ゾワリと数十分前に感じたばかりの怖気がまた背筋を駆けた。

その場から飛び退く。
遊馬と一緒にやった「十連続バク転チャレンジ」の副次成果で一足でかなりの距離まで跳べた。
それでも息苦しさは変わらず、不快さに抗いたくて思わず自分の胸元を握るように掴んでしまう。
胴体を這い回られる感覚は、男の腕にあるD―パッドを見た瞬間から襲ってきている。
この男は、確実にナンバーズを持っている。
「デュ……ゥ……エ……エ……ル」

「え……？」

男のD―パッドが決闘盤に展開され、操作していない俺のD―パッドまでもが決闘盤に変形した。

次の瞬間、俺たち以外誰もいない通路全体へと紫電が走り電灯が次々と消えていく。

冷房の音すら止まり残ったいくつかの電灯が点滅するだけのほの暗い通路に、互いの盤の駆動音だけが響く。

男は決闘盤の重みに引っ張られるように猫背となり、垂らされた腕の先には既に五枚の手札が握られている。

それでも頭だけはしっかりと上げられて、その視線が俺を射抜く。

足を擦るように決闘の距離からさがろうとすれば、足元をバチリと紫電が襲う。

やるしかないらしい。

観念して、D―ゲイザーをセットしてあの幽鬼のような男を見据える。

自分の中のなにかが、アイツはダメだ危険だと警鐘をガンガンと強く鳴らす。

……こんなに決闘をしたくない、と不快感に満たされたままやるのは前世含めても初めてだ。

絶対に負けてはならないという焦燥感のまま、立ち上がるのも億劫な身体を踏んばって怖気を振りはらうため力いっぱいカードを引いた。

「ぐっ……ガァ……」

「え……？」

驚くほど簡単に勝てた。

勝つ気がないようなプレイングで、隙を見せて攻撃を誘っているのだろうと反撃への対策を練っていたのに、相手はまるで自爆するかのように自分のライフをゼロにした。

おぼつか無いカード捌きに、今にも手札を落としそうな力ない手。

暗い洞穴のような虚ろな眼をしながらも、俺から視線をまったく逸らさない男からは不気味さばかりを感じた。

そんな男も今は決闘の衝撃で倒れてからピクリとも動かない。

ナンバーズも姿を見せず、あっさりと倒れたのに悪寒はまだ止まない。

実はただの決闘の弱い不審者で、嫌な感覚も勘違いであれば万々歳だがその望みは薄いだろう。

恐る恐る倒れた男の元へ近寄りその体を揺する。

「……大丈夫、ですかー？」

まぶたも閉じて失神しているはずの相手を呼びかけながら様子をみる。

ナンバーズの影響を受けただけなら、この人はただの一般人かもしれない。
倒れているのを放置するのは寝覚めが悪いからだ。
手を口の前にかざすと呼吸は確認できるし、首に触れれば脈もあった。
しかし、肌に熱が無い。
死体に対して冷たくなる、なんて表現することがあるがそれはアンナのペットボトルのような凍らせたような冷たさではなく、ぬるま湯に手を入れたような熱の抜けた感覚を指すのだ。
ちょうど、この男性のように。
生きているのに、あるはずの体温が感じられない。

バチリ、とそばで音が鳴る。

反射的に身体を向ければ、まとわりつくように電気の線が飛び回る決闘盤が、ひとりでにエクストラデッキの蓋を開いていた。
そこから這い出るようにゆっくりとゆっくりと一枚のカードが排出されてくる。
ナンバーズ特有の文字列が妖しく輝き、絵柄部分からアメーバ状の黒いなにかが零れ出る。

黒いカードを包みながら膨らんでいくそれに、このままでは飲み込まれると直感的に悟り、焦って尻もちをついてしまった。
情けないがそのまま逃げるように後ずさる。
二メートル、いや更に膨らんだので三メートルか。
山なりに膨らむ物体から腕や首を作るように三本の触手が生える。
天井へ向けて伸びた一本の先に、目が付くようにナンバーズの数字が光る。
ナンバーズの文字の読み方などまったく覚えていないが、あの二桁はわかり易くて理解したくないのに出来てしまった。
あの数字は『９６』だ。
人型になり損ねたような黒い怪物は前のめりに倒れながら顔を俺の目線まで下ろしてきた。
目の代わりの数字の下へ真一文字の切れ目が走り、目の前で赤い口腔が開く。
――ヨ……コ……セェ。
低く重いかすれた、声なのかも判別しづらい音が鼓膜を揺らす。
その威圧に血の気が顔から引いていく俺を余所に、怪物は核のように埋めこまれたエクシーズカードに吸い込まれていく。
すべてを飲み込み、一瞬だけ黙り込むような静寂。

浮かんだままの【Ｎｏ．９６】に爆発したように黒い火が灯る。
その黒い威圧に俺の体が強張る。
次の瞬間、弾丸を思わせる速度で俺の決闘盤目掛けて【Ｎｏ．９６】が迫る。
「なんで……なんでこんなところに……」
とっさに身体を半身にしてギリギリで避けられたのは奇跡だ。
訳はわからないが、こいつにだけは憑りつかれるのは絶対にダメだ。
どうやら耐性がないらしい俺自身がどうなってしまうかも当然心配だが、まかり間違ってアストラルが来る前の遊馬の下へ渡ってしまったら彼が危険だし、最悪すべてが破綻するかもしれない。
再び迫るカード型の災厄を横へ受け身をとるように転がり避ける。
どうする。どうすればいいんだ!?
俺はアレをどうにかする手段を持っていない。
その場しのぎの回避が関の山だ。だが決闘の間も体力を削られたせいか正直すでに体は限界寸前。
どうにかしてＭｒ．ハートランドなりのところへ行って回収してもらう?今どこに居るのか知らずに走り回ってはたどり着く前にアウトだろう。成功しても俺ごと狩られるかもしれない。

倒れた男の体が目に入る。なら【Ｎｏ．９６】を倒れてる男の決闘盤に戻す？
――半死半生の男の体。
――勝つために必死だった倒れたという選手の話。
――自分が嫌だから人に押し付ける？
……のは、無しだ！
デッキからカードを引き抜いて飛んでくる【Ｎｏ．９６】に投げつける。
直撃して弾いた隙をついて、カード手裏剣に使った【ＥＭスパイク・イーグル】を回収しながら走りだす。
案の定【Ｎｏ．９６】が追って来ているのを背中越しに感じる。
どうせ逃げるしかないなら、全力で前へ逃げてやる。
無謀だが、いいナンバーズハンターの所へ行けるまで倒れるまで走りぬいてやる！
「……かっとビングだ、俺！」
会場入り口である外の光が見える扉へ向かい駆ける。

「あー！見つけたぞユウヤ！」

――――扉の先から水筒を持ったアンナが光指す道の向こうから走ってきた。
なんて、間の悪い……！
「いい〟!?ちょ、アンナ今はこっちに来ちゃ……」
「どこ行ってたんだよ！海美姉ちゃん試合もう終わって……！」
逡巡する暇もなく互いに駆け続け。

アンナが、落ちていたバナナの皮を踏んで滑った。

ウッソだろお前!?
しかし、あの倒れ方は頭から落ちる体制で危険だ。
なんとか支えるため追ってくる【Ｎｏ．９６】のことを忘れてさらに加速する。
彼女の足を滑らせて蹴っ飛ばされ俺の顔へ飛んでくるバナナの皮を、スライディングで回避する。
そのまま滑り抜いて倒れてくるアンナの下までたどり着き、受け止めるべく腕を広げ――――。

アンナの全体重の乗った肘が、俺の鳩尾を全力で撃ち抜いた。
スクラップフィスト級の一撃である。

「ブゥラリィ゛ー!?」
「……ううん……?はっ、ユ、ユウヤ!?おい大丈夫か！死ぬなー！」
若干涙目のアンナが痙攣して倒れる俺を抱き起こした。
その様子なら俺は腹部の痛みという多大なコストを払いつつも、無事にアンナは守れたようだ。
堪えつつ上半身を上げ、俺を追う黒い脅威に向き直る。

そこにはバナナの下敷きになった【Ｎｏ．９６】があった。

思わず自分の顔から表情が抜け落ちて真顔になった。
……作画崩壊パンチを受けたような気分だ。
黄色い皮の隙間から漏れるように途切れながら上がる黒い炎。

さっきまでは寒気がする威圧感を放っていたそれが、今は「動けないからこのバナナを退かしてくれ」という救難信号にしか見えなくなった。

本当に哀れなほど薄っぺらになった彼の尊厳の失いっぷりに、寸前まで奴のせいで進退窮まっていた俺すら、あの醜態を見てやらないことが武士の情けなのではないかと錯覚してしまう。

事情がわかるわけのないアンナが怪訝な顔で見つめてくるのを横目に俺は自分の顔を片手で覆う。

ええ……どうすれば……いいんだ……。

バナナくらい自力で脱出してくれよナンバーズだろう。

あのベクターを悪として二流と吐き捨てた後に神になると豪語した【Ｎｏ．９６】だろう。

……まさかアストラルが来てないから、力が全然ないのだろうか。

『Ｎｏ．９６』は最初わざと遊馬先生に回収されてから、アメーバ状だった身体を黒いアストラルに変えて暴れだした。

おそらくアストラルの力もドン・サウザンドの力も上手く混ざらず、例えばアストラルの力に触れるとかの一定の手順を踏まなければ力を発揮できないではないだろうか。

さっきのオーラも、もしやただのコケ脅しだったのかも。

そうでなければ、バナナの皮に負けるナンバーズの説明がつかない。
いやつけたくない。
『お掃除。お掃除』
頭を抱えていたところへオボットがやってきた。ここまで巡回してくるとは働き者のＡＩだなぁ。
働き者が丸い体からアームを伸ばして床に落ちていたバナナの皮を回収し、その体に内蔵しているゴミ箱に放り込んだ。
【Ｎｏ．９６】ごと。
「え、ちょっ、それは……！」
『ゴミ。ゴミ。回収。回収』
俺の静止の声など聞くはずなく、そのオボットは仕事を続けるべくその場を去って行った。
残されたのは、あっけにとられたままオボットへ向けて意味なく腕を伸ばす俺と、なにもわかっていないアンナだけだった。
これで良いのだろうか……正直助かったは助かったのだが。

……きっとフェイカーがゴミを回収するフリしてナンバーズを持って行っただけなのだろう。
そう、信じよう。
「おい、ユウヤ……」
「ああ、うん……大丈夫……でもないかな……」
安心したからか、体から一気に力が抜けてへたり込む。
心配を目で訴えるアンナに悪いが、今は心も体も守備表示にしておきたい。
「やっぱり暑さにやられてんのか!?持ってきたからこれ飲……」
アンナが水筒を開けてコップに注ごうとし……水滴が落ちた。
もう全部飲んじゃったんだな。非力な内蔵量を許してくれ。
「ああ!し、死ぬなユウヤー!」
「……いや、熱中症で苦しいわけじゃないから、死なないよ」
さっきまでの異常な状況がただの夢だったかのようだ。
慌てふためいているアンナがいつも通りで、俺を揺する手の温度が子供らしく生きた温かさで、自分が笑顔になっていくのがわかる。
決闘以外で俺に……笑顔を……。
「アンナはどうしてここに?座ってた場所からだいぶ離れてるけど」

「だってお前がいなくなってから、暑さで倒れた奴がいるって話が聞こえてお前かもって！」
それは全然別の人の話で……ああそうか。
あの時はナンバーズを見て気分が悪くなって席を立ったんだ。
そこにそんな話を聞けば安否確認もしたくなるか。
「……もしかしてさ、ずっと探してくれてた？」
「……違うし」
「そっか」
嘘をつくならこっちを見なさい。
でもそのおかげで、やり方はともかく窮地を脱することができた。
俺ではあんな方法で解決することなど絶対にできなかった。
この娘は自分を、いやもしかしたらもっと沢山の人を助けてくれたのかもしれない。
自分が一番暑さにやられていたのにだ。
鉛を詰めたように重い腕を持ち上げてアンナの頭を撫でる。
「な、何だよ。やめろよぉ」
「心配かけてごめん。ありがとうアンナ」
「別に感謝されたいわけじゃ……えへへ」

やめろと言いつつ、はにかんだまま成すがまま受け入れるアンナ。

良いことをした子は全力で褒めて頭を撫でるものだ。

その後、スタッフを呼びに行って【Ｎｏ．９６】を持っていた男性を医務室まで運んでもらった。

多少の衰弱が見られるようだが問題はないらしい。

スタッフを呼んだ時に俺も確認したが、感じた冷たさはなく生きた人間の体温に戻っていた。

ずっと後に聞いた話だが、あの男性は数日前から行方不明になっていたらしく、その間に何をしていたかは何も覚えていないらしい。

……【Ｎｏ．９６】はどうして俺に憑りつこうとしたのだろうか。

ナンバーズハンターに目を付けられたのを察して、さっさと別の隠れ蓑に逃げようとしたのか。

それとも、あの宿主が俺のようにナンバーズの力に耐性が無くて、もっとまともな持ち主を探していただけなのだろうか。

だとしたら運のないことだ。

数いる人間の中で俺は確実にハズレの目だろう。
その果てにバナナに乗られてゴミ箱に収められるのだから、弱り目に祟り目にもほどがある。
今日一番悪い目を出したのは俺ではなく、アイツなのだろう。

観客席から見る世界。

「『幻煌龍　スパイラル』で【竜胆ブルーム】を攻撃！」
「カァリタァ!?」
トレードしてもらったばかりの青い花を纏う竜が、元の持ち主が操る青白い竜に爆殺された。
攻守が同じ数値の相手じゃ【竜胆ブルーム】の守備力の数値で戦う効果も無意味だ。
「トドメ、行くぜ。二体目の【スパイラル】で……」
「まだまだぁ！【速攻のかかし】発動！」
大会前に飛夫さんとトレードして手に入れた【かかし】が、竜から放たれた水撃から俺を守る。
手がある内は勝利への足掻きをさせてもらおう！
「Ｎｏ．９６バナナ撃退事件」から二日跨いで、大会の最終日。
あれからも観戦を続けたが結局ナンバーズは【８５】と【９６】だけだったらしく、俺

も体調を崩すことはなかった。
大会中は昼食休憩などの暇を見つけて、海美さんや飛夫さんの高校の決闘者たちに交流という名の決闘を挑みまくっていた。
俺が完全に小学生なこともあって、快く決闘やトレードに応じてくれる人が多い。
若干、隙を見て鮫のようなトレードを仕掛けてくる輩もいたが常習犯らしく周りに抑えられた。
軽いノリでシメられていたのでナンバーズクラブでいう徳之助みたいな立ち位置の人なのだろう。
とりあえず普通に交換してもらった【サタンクロース】は大切に使わせてもらうウラ。【スパイラル】の人との決闘は粘ったものの、通常モンスターの連打に俺の『白銀のスナイパー』が沈み、あえなく敗北した。
その後も【ベン・ケイ】のお兄さんや【マスター・オブ・ＯＺ】のお姉さんやらとカード交換＆決闘を繰り返す。いやー使える装備や融合系のカードがあると戦略の幅が違うなあ。
当然、決闘で勝っても負けても【Ｎｏ．９６】のような非ィ現実的なことは一切起こらない。
スカッとするぜ！そうだよ、こういうのがいいんだ！

なんだ、勝ったらオカルトカードに追い立てられるライディングデュエルって。どういうホラー？

デュエルモンスターズなら決闘で拘束しに来いよ。

いや、あの場合は俺が勝ったからアイツが拘束されに来たのか。なんてはた迷惑な自首。

そんなことがあったばかりなので普通の決闘が楽しくってしょうがない。

「楽しんでる？」

「海美さん。はい、皆さん良くしてくれてます」

【パワー・フレーム】を装備した【ロードランナー】で勝利したところに、昼食を取り終えた制服姿の海美さんが近寄ってきた。

俺が思う存分に決闘できるのは、二つの高校どちらにも知り合いがいる彼女のおかげだ。

友人とは決闘者のことなのだと言わんばかりに、沢山の人を紹介された。

「それは何より。でもユウヤ君、大事なことを忘れてない？」

「はい？」

なんのことだろう？と思うと同時に、笑顔の海美さんに両手で顔を挟まれ横を向かされた。

その先に普段通りのアンナが居た。不機嫌そうに頬を膨らませていることを除けば。

え、何故？

疑問符が止まらない俺に、困ったような顔で海美さんが助け舟を出してくれる。

「だって同年代の子が他にいないのに、一緒に来た子だけ自分を放って楽しくしてるのよ？」

「あー……ええ？」

確かに普通に考えれば、周りが年上ばかりでは寄る辺がなくなっても不思議ではないだろう。

でもアンナだしなぁ。人見知りするような娘じゃないし、初日に紹介された時も女子高生たちと瞬時に打ち解けていた。むしろ最初のうちは俺の方こそ居心地が悪かったぐらいだ。

この数日でわかったことだが、アンナの中で俺の優先順位は海美さんの遥か下に位置しているようなので、海美さんがいる間は変にかまったりしない方が良いだろうと考えていたのだが……。

困惑していると目の前の海美さんが真剣な顔で俺の両肩を掴む。

「ユウヤ君デッキを組んでいる時にこんなことない？このカード絶対相性が良いと思って入れて最初は上手く回ってたけど何回か使い続けていたら機能しなくなって実は他のカードと噛み合わせが悪かったなんてことそういうことは人間関係でも同じことがあるの趣味が合うと思ってたらちょっとのこだわりの違いで仲違いしたりねでもカード一枚じゃ上手く行かなくてもサポートカードがあれば独立したコンボが確立するように誰かが間を取り持つだけで円満に解決できることもあるのでもそれは近くに揃ってはじめて意味があるものよ」

「え？んん？え？」

「だから、ね？」

ね？と言われましても、まるで意味がわからない。

早口でまくし立てられ話の内容もいまいち頭に入ってこない。

つまり、なんか女子高生たちと上手く行かなくなったということだろうか。

それに気付かず決闘を一人でやってたからアンナがへそを曲げた……で合ってるのか？

「参ったなぁ……」

「大丈夫よ。アンナちゃんの機嫌を直すなら簡単な方法があるから」

「え！そうなんですか」

情報源に信頼がおけるので、それは是非とも知っておきたい。
普段でも学校でアンナが暴走した後に説教のプレイミスで機嫌を損ねてしまうと、休み時間に顔面狙いドッチボールという闇のゲームが始まり、よりヒドイ時はいくら謝っても鉄の意思でその日はもう口を聞いてくれなくなる。
それでも下校は必ず一緒なので、鋼の強さの気まずさがトリックスターの地味バーンの如しだ。
「ユウヤ君、耳貸して。……」
「……ええー……」
海美さんが耳元でささやかれた対応策に俺は思わず渋い顔で返してしまった。
その方法、あの娘が笑顔を得る代わりに俺が一番大事なものを失ってしまう気が……。
「早く早く、アンナちゃんが待ってるわ。ほら!」
急かす海美さんに背を押され、他の策もないままアンナの元へと向かう。
「……」
「えーと……アンナどうかした?」
とりあえずのご機嫌伺いに対しジト目で俺を一瞥すると、そのままプイと顔を逸らされる。

「おーいアンナー」
「……」
無視。
「アンナ、見て見て交換してもらった【簡易融合】と【おろかな埋葬】！これ使えるんだよー」
「……」
自慢もしたかったので成果を見せるがやはり無視、どころか眉間にしわが加わった。
そりゃ決闘しないアンナにこんな話しても効果ないよな。
「ごめん、俺だけ楽しんじゃって。まだお昼の時間あるし、今から一緒にやれることで遊ぼうよ」
「……」
素直に謝るがどこまでも無視。
その後も、折れないハートであれやこれやと言葉を変えながら謝るものの効果は無効。
くっ、取り付く島もない。届かない届かないこの謝罪を通すには本当に海美さんの助言通りにするしかないのか。
「あー……ほら、今日はなんでも言うこと聞くから」

「ホントか!?」
「あれ?」
「あ……フン!」
一瞬、すごいキラキラした顔で返事をしたと思ったら、しまったと慄いてからいかにも私は不機嫌ですといった不満顔を作り直して再び顔を逸らした。
不審に感じたので、頬を膨らませて斜を向くアンナをじっと観察する。
よく見ると、なにかを我慢するように頬の筋肉がヒクヒクと動いている。
いつもは一度機嫌を直したらそのまま仲直りできるし、今の言葉だけで機嫌が直ったようには見えなかったし……ふむ、これは。
「……アンナ、実は最初から怒ってないだろ」
「ぷふ」
嘘つきは堪えきれなくなったのか、その口から息が漏れる。
そのアゴを素早く掴み、指で膨らむ頬を挟み潰して空気を吐かせて詰め寄った。
「人が一生懸命に謝ってるのを笑うとはどうゆう了見さ。ん?」
「んぐうー」
目を逸らして口笛を吹こうとしているが、俺が掴んでいるせいでふひゅーふひゅーと空気音がなるだけだ。吹けていても誤魔化されないけどな。キリキリ吐けい。

「だっへ、お前を思ひ通りにするほーほーがはるっへ、姉ひゃんたひが言うはら……」
アンナの周りにいる女子高生たちを見回してみるとニヤニヤしているのが二人、苦笑いしているほんわかな方と我関せずなクールさんと器用に鼻提灯膨らませ寝ている人が一人ずつという、明らかに集団犯罪だったことがうかがえる。
師弟たちは一つ、みんな女友達……。
「すごいすごい！姉ちゃんたちの言う通りになったぜ！」
「わかったでしょう、少し引いて相手の攻撃を誘うのも大事な駆け引きなのよ」
隙をついて俺の手から逃れたアンナと、海美さんがハイタッチしていた。
やはり紅蓮の悪魔はアンタでございますかぁ！
アンナに良からぬことを入れ知恵をし、俺を騙して売った主犯はにこやかにサムズアップをしているが、こっちはセキュリティにドナドナされる気分である。
頭を抱えて座り込む俺の隣で、満足して上機嫌なアンナが笑った。
「へへへ、なんでも言うこと聞くんだよな！じゃあ今日から一生オレの言うこと聞けよ！」
一つだけ願いを叶えると言ってるのに、叶える願いを百個に増やせーみたいに言わないでくれ。
「今日だけだって言ってるだろう……というか人を騙す子の言うことは聞きませーん」

「はぁー!?男が二言するなんてみっともないぞ!」
「女に二言はないって言いながら、二日しないうちに似たようなことする奴に言われたくないよ」
「へいへいユウヤくーん。観念しちゃいなよー」
「年貢の納め時ぃ」
アンナに反論する俺に、ニヤニヤ見てた高校生たちによるノリの援護射撃が襲ってくる。
捌ける気がしねぇ!チクショウまんまと女たちによる罠の発動を許した俺をなんとかしろ遊作。
「あまりボーイをいじめてやるなよ」
「飛夫さん……!」
ああ、救世主がやってきた。
相手は神月の血による被害を俺より被っているだろう偉大なる先輩、羽原飛夫さんだ。
経験豊富ゆえにこの追い詰められた状況へのカウンター策を提示してくれるのではないだろうか。
この状況を見てどこか死んだ目をしている学生服を纏う彼は、ポンと俺の肩を叩い

た。
「まぁ……頑張ろうな……」
解決方法はサレンダーしかないらしい。
地面に手をつく。おそらく飛夫さんも体験したであろう蜂の踊りを俺も踊るしかないのか。
やはり未来には絶望しかない……。
落胆によって伏せられた俺へと住所が書かれた紙が差し出された。
「俺のガレージはここだ。夏休みの間ならメカニック仲間たちがいるだろうからいつでもおいで」
「おお！ありがとうございます」
「いいよ。機械いじりの同士ができるのは俺も嬉しいし……違う意味でも同士みたいだしな」
「あはは……」
遠い目をしながらも朗らかに笑う飛夫さんに、俺も乾いた笑いが漏れる。
【９６】に追いかけられて、決闘以外の対抗手段が欲しくなった俺はダメ元でフライングランチャーの制作者である飛夫さんに相談した。
いきなり攻撃的な物が欲しいと言っても断られるのは当然なので、【９６】に憑りつか

れた男性をスタッフに助けてもらった話を絡め、とりあえず人が倒れた時に安全な場所まで運べるような物を作ってもらえないかと頼んでみた。

すると、それなら作り方を教えるから自分で制作してみないか、と勧誘された。

遠回しな断りの返事かと思ったが、正直藁にも縋りたいので誘われるまま応じたのだ。

まぁ、俺がメ蟹ツクなれるわけがないので少しずつ仲良くなって対策になる物を作って貰う気だ。

他力本願は某妖精童もやった聖なる手段。たぶん許されるだろう。

「あら。目の前の私や女の子たちを放ってユウヤ君をナンパしてるの？」

「人聞きが悪いな。クリエイティブの素晴らしさをボーイに感じて欲しいだけさ」

笑顔の海美さんが飛夫さんの前に向かい立つ。

最初に会った時の様子と比べると、どこか険と緊張を含んだ声音だ。

変な嫉妬……とかではないな。この後の試合の組み合わせを考えれば、そうなるのも仕方ない。

「ふーん……。で、用はそれだけなの？」

「それと……海美ちゃんとちょっと話しにね」

海美さんの緩んでいた口元が真一文字に伸び、目元も先ほどよりわずかに鋭く変わっ

た。
その変化に見覚えがある。初めて会った時に見せた決闘者としての顔貌である。
「やるとしたら決勝だな」
「……ふふ。そうね」
大会も残すところ僅か。
休憩後の午後はシングルトーナメントとタッグトーナメントの準決勝と決勝、三人チームの団体戦の決勝があり、それが終われば表彰式となる。
両校の中で勝ち残っているのは、シングルでベスト4に数えられているこの二人だけだ。
二人はシングル戦以外にも海美さんはタッグの、飛夫さんは団体戦のトーナメントにも出場していたが、どちらも既に敗退している。
「優勝するのは、私よ」
「それはどうかな?」
男女が見つめあう。
その間に甘酸っぱいものなどなく、まるで戦士が気迫をぶつけ合うかのような緊迫感がその場を支配している。不敵に笑いあう二人は、獲物を狙う目で真っ直ぐに相手を見据えていた。

海美さんはどこか迷いが吹っ切れたかのような晴れやかな顔で、飛夫さんは己が負けることなど少しも考えていないかのように、全身から自信を放つ。

その姿が二人は男も女も関係なく、互いの実力を認め合ったライバルなのだと物語る。

なぜだろうか。

言葉少なくとも戦意をぶつけ合うだけでわかり合える相手がいる彼らが、少し羨ましかった。

■■■■■

「……」

「……」

今日の天気は曇り空。

前日までと比較して直射日光が無いだけでも応援のしやすさは段違いだが、暑さは変わってくれないし湿気は高くなるものだから、ジットリした不快感が肌を撫で続ける。

観客席から見える決闘場では飛夫さんと、名も知らぬ選手によるシングル戦の決勝が

始まる。

シングルトーナメント準決勝第二試合。

海美さんは、敗退した。

相手は、やはりこの世界にも存在したデュエルアカデミアの生徒。

決闘者の育成機関ゆえに、当然こういう大会では強豪扱い……というか結果を出していないと面目が立たないだろう。

タッグ、団体でも勝ち残っていたし、どの生徒たちも垣間見えるデッキの構成や試合の立ち回りを見るだけでもその名に恥じない実力を持っているのがわかった。

『ベン・ケイ』の人から聞いた話だが、プロを目指す者にとって彼らに勝利することは大会で上位に残る以上に重要な、超えるべき壁だそうだ。

彼らから勝利を掴んだ者はいずれもプロで大成しているらしく、一種のジンクスなのだろう。

その中で海美さんが敗北したのは、タッグトーナメントで対戦し敗北したコンビの一人だ。

つまり、一度の大会中に同じ相手に二度敗北した形になる。

リベンジに燃えていたがゆえ、敗北に涙を流した。
試合の直後こそ対戦相手と笑顔で握手までしていたが、選手用の通路で人知れず悔しさを嗚咽とともに噛み殺していた。
それをタイミング悪く俺と、居ても立っても居られなかったアンナが目撃してしまったのだ。
声をかけようとしたアンナを、今は一人にしてあげようと言って無理矢理引き留め、音を立てずにその場を離れて観客席まで戻った。
アンナはそれから時折啜りながらも黙ったままだ。
憧れの人の敗北よりも、その泣き姿を見てしまったことがショックだったのかもしれない。
それとも、泣いていた彼女に何もせず戻ったことを後悔しているのだろうか。
だとしたら俺のせいだ。
だから、そこへどう声をかけるべきかわからない俺も、ただ押し黙る以外に取れる手がない。
そんな俺たちなどお構いなしに時間は進み、眼下では決勝戦が始まった。
「決闘って楽しいものなんじゃないのか？」

沈黙を続けていたアンナが突然呟いた。
【幻獣機】の戦闘機たちが【壊獣】たちへと挑んでいく。
決勝戦ゆえか、今までの試合よりもモンスターたちが大きく投影されていることもあって、怪獣映画の世界に迷い込んだと錯覚しそうだ。
「……決闘に限ったことじゃないけどさ、楽しくてのめり込むからすごく悔しくなるんだよ」
迷いながら口を開く。
おそらくだが決闘に負けて泣く、という初めてのケースに戸惑っていたのだろう。
この娘が見てきた決闘は、勝っても負けてもいいフリー決闘ばかりのはずだ。
俺は大抵の場合、負けても楽しいしそのままリベンジを申し込んだりする。
よく決闘してくれる遊馬先生や鉄男たちも大差はない。
海美さんが本当はどう思っているかなんて俺にはわからない。
俺なりの言葉でしか答えられないことが、少し心苦しい。
ここに戻って来ていない彼女は、どこかでこの試合を見ているのだろうか。
「アンナはさ、勉強ってなると覚えられないけど、好きな物のことはいくらでも覚えられるってことない？美術館にあったような鉄道のこととか」

「そうだけど……それがなんなんだよ？」
「好きなことだから、誰よりも知りたくなるし真剣になるってこと。勝負事ならなおさらね。色んなことを覚えて試して、それで上達したらもっと強くなりたくなる」
狼柄の戦闘ヘリが甲羅を背負う青い竜を銃撃すれば、それを踏み潰して巨大グモが降り立つ。
クモが呼び水となり、張り巡らされた糸を引き裂いて三頭を持つ雷獣が雄叫びをあげた。
「結果を出したら自信にもなる。沢山の人が認めるし形に残るしね。そこからもっとってなる」
雷の三連撃を凌いだ戦闘機たちがクモ怪獣を味方に付け大型ジェットが地面の銀河から飛び立つ。
大迫力の攻防による観客の熱狂が声援となって会場を揺らしている。
隣のアンナに俺の声は届いているのだろうか
「長い時間をかけたのに上手く行かないとさ、自分がやってきたことが全部無駄だったって否定されたように感じたりするんだよ。その時間は好きな物と向き合った時間と一緒だしね」
だからこそ余計に悲しくなる。

自分よりも知識のある人間がいることを、上には上がいることを受け入れたくないとすら思うかもしれない。

オーバーレイネットワークから見覚えのない、フィールドに収まらないほどの巨体をもつ恐竜のようなドラゴンのような黒い怪物が、オーバーレイユニットを伴って浮上する。

負けじと対面から真白く輝く超巨大ジェットが飛翔し、獣の頭を有する機械たちが空を制する。

これもやはり見覚えがない。

きっとこの世界だから存在するモンスターエクシーズたちなのだろう。

この大会の中で様々な試合を見たが、見知らぬモンスターや魔法・罠が山ほど飛び交っていた。

それはこの決勝でも同じこと。もう驚くようなことじゃない。

「大事に思って積み上げてきたから、打ち壊されたら苦しくて悔しくてたまらなくなるんだよ」

大好きなことだからもどかしくて辛くなることだってある、と続けてた。

「でもそれだけの思いを込められるから、ものすごく熱くなれる……んだと思うよ俺は」

会場の大型スクリーンには、怪物と戦闘機の操り手たちの顔がアップされていた。

どちらもギラついた眼と汗を輝かせながらも、その面差しには楽しくて仕方ないと書いてある。

「よく、わかんねー……」

アンナはまだ子供だ。

経験の浅いうちからこんな話を口頭で理解しろ、なんて酷だ。

それも俺の想像だけが頼りの拙い説明なのだから、尚更だろう。

人によってはそんな体験も、それを想像も理解しようともすることなく大人になる者もいるのだ。

だが、彼女の場合なら今はまだわかり辛いというだけだろう。

「アンナなら何時か必ずわかる日がくると思うよ」

「なんでそんなことわかるんだよ」

「だって、アンナはいつも全力だからさ」

思い込んだら間違っていようがお構いなしに爆走していくのは、裏を返せば自分に揺るぎない自信があるということだ。そういう人間は大成することがある。

この娘を放っておけないのは未来の遊馬先生たちが危ないからだけでなく、それが悪い方向に向かってしまうのがもったいないと思うからだ。

結構迷惑だし危ういが、自分を疑わず進んで行ける力強い姿勢は俺にはない物で好感

を覚える。

治してほしいと思う半面、それが大きな長所となって彼女の人生を助けるかもしれない。

「だから、大丈夫だよ」

難しい顔をしている彼女に笑いかけた。

この娘が一度情熱を傾けるものができたらどこまでも突き進み、きっとそのエネルギーで俺には想像もつかない様なとんでもない方法で成果を挙げるのではないだろうか。

それは決闘でもいいし、まったく関係のないことでもいい。

少なくとも、ナンバーズをバナナで抑え込む以上のことはやり遂げるだろう。

――――だが、俺はどうだろう。

決闘は大好きだ。一度は諦めたものの、遊馬先生にカウンセリングされてからはプロ決闘者の道へかっとビングするのもいいかも、と再考したこともある。

だが『９６』の人との決闘と普通の決闘を比べてわかった。俺はただゲームとして楽しみたいだけだと。俺の中に海美さんのような敗北を苦しむ情熱はない。

相手に勝つ気がなかろうとも、できるなら勝敗で進退窮まるような決闘はもうごめんだ。

プロの世界ならば、オカルトが関わらずともそんな決闘の方が多いのは明白。

こんな半端な気持ちで入って行ける甘い世界ではないだろう。

ナンバーズを相手にできないと解った今、俺は決闘で強くなろうと拘る必要がまったくないのだ。

しかし俺から決闘を抜いたら、役に立つようで立たない前世の知識があるだけの一般人だ。

遊馬先生に付き合って色々挑戦してはいるものの、どれも広く浅く。

決闘者がはびこる世の中で、少々プールを無呼吸潜水で往復できようとも他人より優れているとは到底思えない。

普通に生きていくにしても、この世界で俺は何かを成せるのだろうか。

俺の思案など無関係に、目の前の立体怪獣映画はクライマックスだ。

黒い暴竜が吠え猛り、口腔へと破壊の意思を持つ光が収束していく。
巨大ジェットへと光り輝く暴威が放たれた。
ジェットの先から伸びる獣頭も対抗するように雄叫びを上げ、その身を赤く輝かせながら光線へと飛び込み迎え撃つ。
そのまま破壊せんと光を強めつつ一歩踏み出す怪竜に対し、飛行兵器はリミッターを超えたエネルギーによって機体へヒビを入れながらも、敵を超える力で光を押し返して行く。
その翼が光を裂き、ついには黒い怪物へと轟音を立てて激突しその中央に風穴を空けて貫いた。
その光景に呼ばれたように、ＡＲビジョンによるものではない一陣の突風が吹き抜ける。
肌にまとわりつく不快感が一瞬だけ飛び去った。
いくつもの爆炎と煙をあげながらその巨体が倒れ沈み、光の粒子となって消えていく。
爆煙が晴れる。倒れ伏す敗者と、雲の切れ間から差した光の中で堂々と立つ勝者の姿があった。

勝者は……飛夫さんだ。

最後の攻防に目を輝かせたまま放心しているアンナを置いて、爆発するような歓声と拍手が鼓膜を破りそうなほどに鳴り響く。

その中に埋もれる俺の拍手は、普通に叩いているだけなのにどこか空々しかった。

迷路の壁を登って越えるような。

次の一瞬で全てが決まる。

「行くよ……遊馬！」

「お、おう！」

夏の日差しが照りつける公園。

対峙する俺と遊馬先生の間を、風に飛ばされた砂煙が横切る。

戸惑いながら軽く構える遊馬先生を前に、俺はどこまでも真剣に画風すら変わった顔で、格闘家のような構えとコォォと鳴るほどの呼吸で、次の一瞬に備えている。

Ｄ・ゲイザー越しに見える風景には【ガガガマジシャン】と【ガガガガール】が脱力しつつ呆れた表情でこちらを見つめる姿と、俺を守るため彼らを威嚇する【サイバー・ダイナソー】の背中が映っている。

数秒間、セミの合唱だけが公園に響く。

不意に、誰かが置き去りにした空き缶がカランと音を立てて風に倒された。
それを合図にどちらともなく駆けだす。
数多のかっとビングにより鍛えられた俺たちの脚なら、わずか数メートルなど一瞬で互いの拳が届く距離まで詰められるのだ。
相手が迫る。
互いに腕を振りかぶり――――――――。

「ジャン！」
「ケン！」
――――ポン！

俺の鉄の意思を込めたチョキに対し、遊馬先生は鋼の強さのグー。
勝負は、決した。
「……ユウヤの【変則ギア】の効果で【サイバー・ダイナソー】は除外されるぜ！」
「【サイバー・ダイナソー】！」
俺のフィールドの【サイバー・ダイナソー】が隣に開いた時空の裂け目へと吸い込まれていく。

消えていくメカ恐竜の断末魔が悲しげに響いた。
「【マジシャンズ・クロス】の効果を受けた【ガガガマジシャン】でダイレクトアタック！」
「ブレオァー！」
魔術師たちの連携攻撃が、がら空きの俺へと突き刺さり俺のライフがゼロになった。
「いいよっしゃぁ！俺の勝ちだぜー！」
「遊馬が勝った……!?」
「ウソだろ！いまだに魔法カードの種類の違いもわかってないあの遊馬が!?」
「あー明日は雨かー？涼しくなるぜ！」
「ちょっと待て！素直に俺が強くなったって思わねーのかよ!?」
見ていた鉄男やクラスメイトたちによる驚愕の声へ遊馬先生がムキャー！と全身で抗議している。
それを他人事のように、俺は静かに自分の決闘盤を見つめた。
わかっていたが追い詰められた状況は、気合だけではどうにも逆転できない。
築根ユウヤ。決闘のスランプ中である。

■■■■■

「ユウヤ、決闘止めちまうのかよ!?」
「いや、止めたりしないよ。ちょっとひかえるだけ」
河原に遊馬先生の声が響く。向こう岸を犬と散歩してるおばあさんにまで届いていそうだ。
海美さんたちの大会も終わり、そこから数日跨いで飛夫さんからドローンもどきの作り方を教わった翌日。今日は遊馬先生たち男子連中だけで遊ぶ日だ。
公園で一通り遊んだあと河原で水切りをしていたところ、今度発売するパックを買う買わないの話になり俺は買わないと答えた。すると一緒にいた奴らが人とバイクの合体を初めて見たような顔で驚いた。その流れでしばらく決闘から離れようと思っていることを伝えると、さらに驚かれた。
「遊馬が勝ったうえに遊馬以上の決闘バカが決闘をやめる……だって……!?」
「雨どころじゃない……ふるぜ明日雨がヤリの！」
「だから、止めないし……ていうか失礼過ぎませーんお前らー?」
クラスメイトどもが震え声で過剰に反応しているが、俺をおちょくるのが目的だとその半笑いが教えてくれている。おっかねー!とか言いつつ、もう興味は投げる石を探す

方へ移ったようだ。
「遊馬に負けたのが悔しかったのか……誰だって調子悪い時は有るんだから気にすんなって」
「いや、そういうのは本当に関係ないんだって」
妙に深刻な顔で鉄男が慰めてくれるが、それはそれで遊馬先生に失礼だ。
まぁ、無言で鉄男を軽く睨む彼には悪いが、普段のプレイングを考えれば仕方ない所はある。
水切りに適した平たい石を選び、川の流れに逆らわない方向へサイドスローで投げる。
俺の石は二回水面を切りながら進み、その横を後から投げた鉄男の石が五回、遊馬先生のものが四回跳ねながら俺の石を追い越してとんでいった。
おかしいな。いつもはカード手裏剣の練習効果で最低でも十回は行くのに。
俺が不調なのは水切りのことだけではない。
昨日も飛夫さんの所でメカニック仲間さんたちと決闘&交換で交流をしたが、勝負は全敗。
初手でサーチカードとサーチ先が揃うという、ちょっとイケてない事態が連発した。
ポーカーならフルハウスだと思うほど、手札に揃っても意味のない同名カードが集ま

るのである。
さっきの決闘でも同様の現象が起こる始末だ。
元からかなり無茶な構築をしている自覚はあるが、いつもならプレイング次第でどうとでもなる。
今は動くこともままならない。この世界でずっと決闘をして来てここまでヒドイ引きが続くのは初めてだ。こういう時にデッキが応えてくれない、と言うべきなのだろうか。
「なんて言うか……新しく挑戦してみたいことも出来たし、ちょうど良いかなって」
最初は興味がなかったので拒もうとしていたが、メカニックの偉大なる先輩たちの教え方が上手いことも相俟って見事に電子工作にハマりかけている。
よくよく思い出すと意外と決闘が関係ない問題も多いナンバーズをめぐる戦いで、どうせならほんの少しでも役立つメ蟹ックとなってみたい、なんて思うとんだロマンチストになるくらいだ。
当面の目標はあのドローンもどきレベルのメカを自力で組み上げることである。
親切にも、飛夫さんたちが昔練習に使っていた初心者向けの工作キットをバラの状態でもらった。
教わったことを忘れない内に組んだが、構造がドローンと共通する部分が多いのでわ

かり易い。
まんまと彼らの同士になる道へ誘導されている気もするが望むところだ。
勉強のための参考書や工具やらのために貯金しておきたいので、しばらくはカードを買う金銭的余裕がないのも決闘から離れようと考える理由の一つだ。
だから、しばらくはそっちに専念して……。
「なあユウヤ」
「ん、どうかした遊馬？水切りで向こう岸まで届かせるんでしょ。良い案浮かんだ？」
新たな石を水面へ投げる俺に、不思議そうな顔をした遊馬先生が話しかけて来た。
「なんでそんなに焦ってんだ？」
「え？」
焦ってる？俺が？
投げた石が一度だけ大きく跳ねて沈んだ。
「なんて言えば良いのかわかんねぇんだけど……なんかお前無理してる気がすんだよ。さっきの決闘でも急いで勝負付けようとしてたし。らしくねぇなーって」
「確かに。いつものユウヤならもっと慎重だよな」

「そんなことは……」

ない、と続けられず遊馬先生と鉄男に背を向けて、適当に掴んだ石を放る。

投げた石は斜めに突き刺さり、ドボンという鈍い音で水柱を上げただけだった。

焦っていると言えば、いるかもしれない。

全てが始まるのは俺たちが中学生になった頃だ。あと数年しかない。

前世では思いっきり文系へ進んだので、科学方面の知識は学校で習った部分まで記憶の彼方。

文字通り一から覚え直しになるから、今から本腰入れて勉強しても遊馬先生たちの戦いで役に立てるようになるとは思い上がれない。

たとえ上手く行ったところで、未来の遊馬先生の周りには機械に強い人間はザ・ナンバーズハンターのカイトや、実は登場初期以降はずっと働いているV兄さんなどと事欠かない。

大半の問題は彼らが居れば十分だ。それこそ、俺が自力でフライングランチャーを作ってフライングデュエルができるような、決闘とメカの腕がなければ居ても邪魔なだけだろう。

いや。

そもそもの話。

元々関わらないはずの俺は、何もしない方が全て上手く行くのかもしれない。
どころか、俺がいるせいで事態が悪い方向に進む可能性もある。【Ｎｏ．９６】の件なんていい例だ。
決闘も作りたいメカも、こうして皆と共に遊ぶことですら。
俺がやろうとしていることは無駄どころか、なにもかも余計なことなのかも……。

「なぁユウヤ、もう一回決闘しようぜ！」
「え？うん、良いけど……」

■■■■■

遊馬先生の決闘の強さは、非常に緩やかに上がっている。
遊馬先生の弱さはルールをイマイチ理解していないことにもあるが、元々使っていたデッキが父親からもらった【オノマト】系を基本とするエクシーズ前提の構築だった所為でもある。
まだモンスターエクシーズを持っていない遊馬先生の場合、打点が若干低めのモンスターを多く並べて戦うのだ。気が付くとフィールドが埋まっているとかザラである。

なので、本人の拘りを尊重しデッキを大きく変えずに打点を補うカードを数枚交換し、それらをどう使えばいいかを彼のデッキを借りて実演して見せたことがある。

すると、持ち前の引きの強さでその場に合った逆転のカードを呼び込んでくるようになった。

実は【マジシャンズ・クロス】も俺と交換したカードだったりする。あと【連合軍】とか。

遊馬先生のデッキに合いつつ、俺が所持していた中では一番まともな強化カードたちである。

それでも、遊馬先生が勝つと皆が驚く程度に勝率が低いのは……勢いだけで動きすぎるハリキリボーイだからとか、色々と問題は残っているから。

だから、考えて動いてくれるようになるのは未来のためにも大歓迎なのだが……。

「えーと……これがこうであーなるから……」

「まぁ……ゆっくり考えなよ。焦らずしっかり考えた方が良いことあるよ。多分」

なんと遊馬先生が長考をしだした。

一決闘中に三度目である。

「遊馬……お前も暑さでどうかしちまったのか!?」
「この決闘、長ーなー……」
「明日は……ビルが降る……」
「俺が考えて決闘するのがそんなにおかしいのかよ!?」
見ていた鉄男たちのヤジが飛び、遊馬先生が反論する。
俺もアーク・クレイドルが降ってくるかもしれない、とか思ってしまったのは内緒だ。
現在の状況は、俺のライフは六〇〇でフィールドには【パワーフレーム】を装備して意味なく攻撃力が一八〇〇になった【竜胆ブルーム】が一体いるだけ。
それに対して、遊馬先生側は無傷のライフに【ドドドポット】と【ドドドウィッチ】、【ズババナイト】が並び、【連合軍】がモンスター二体を強化しているという状態でメインフェイズ2だ。
彼が考えた甲斐とこちらの手札事故が合わさって、正直言ってそのままターンエンドされたら手札は四枚もあって潤沢なのにサレンダーしたいほどの追い詰められ具合だ。
「で、今度はどう悩んでるの?」
「こっちとこっち、どっちのカード伏せようか考えてんだ!」
もう両方とも伏せれば良いんじゃないかな。
いや、どっちも手札を消費して発動するカードの可能性もあるので、一概には言えな

いか。

「へへ、あんまりやらねぇけど、やってみると色々やれそうなことが見えてくるモンだな！」

「……うん、そうだね」

苦笑交じりに返してしまったが、違うことをするとよく見えるのは同意しよう。

この決闘……いや、この世界の決闘がそうだ。

テーブルに座って決闘をしないので、必然的にいつも相手の全身と向かい合う。

ＡＲビジョンが有るから、視線は前を向き対戦相手の仕草や表情がどうしても目に入ってくる。

していることは前世と同じだというのに、この世界の決闘は誰かと共にやっていることを強く意識させられるのだ。

だから、盤面以外のことにまで意識が向く。

目の前の人はどういう時にそんな表情をするのか。どう思っているからそんな風に体が動くのか。

そんなことを推測して時々、相手の心が理解できたような錯覚をする時もあるほど。

神聖な儀式、なんて称されていた時は何を馬鹿なと思っていたのに、今ではアリ得る話だと納得できそうなのはだいぶ毒されてきた証拠だろうな。

少なくとも、目の前の少年が楽しそうに悩んでいるのは誰が見てもわかる。
「遊馬はいつも楽しそうだ」
「お前も楽しめば良いじゃねぇか」
「え？」
「ユウヤはかっとビングしたいんだろう？ならもっと楽しんだ方が良いじゃんか！」
呆ける俺へ遊馬先生は悪戯が成功したような顔でニッと笑いかけてきた。
「遊馬……」
「お前が言ったんじゃねぇか。『焦らずしっかり考えた方が良いことある』ってさ！」
ああ……なるほど。
それを言いたかったから、普段は直感で動くくせに長考するなんて真似をしたのか。
そうすれば、俺なら必ずそれを肯定する言葉で待つと確信して。
「……はは」
思わず笑い声が零れた。やっぱり遊馬先生には敵わない。
なるほど、小鳥女医もまだ会ったことのないキャットちゃんも、そして……いつかアンナも。

好きになる訳だ。当人が自覚してもいなかった悩みまでどうにかしてしまうのだから。

こういうことをされるから助けたいと夢想してしまう。

彼が……大事な友人が命を懸けて決闘をしていくのに、黙って見ているしかできないのは嫌だ。

たとえそれが無意味であろうとも、だ。

うだうだと悩むのも馬鹿馬鹿しくなってきた。なるようになれだ。

だから、こうしなきゃああしなきゃも邪魔とかも……除外してしまおう。

強くないも、強くなれるかどうかも忘れて、これからも俺は思うままに行こう。

「よし、決めた！カードを一枚セットしてターンエンドだ！」

遊馬先生も徹底的に迷い抜いて決定したようだ。次は俺の番。

さて、カウンセリングフェイズもそろそろ終了を宣言して、とっとと次に行かせてもらうか。

「俺のターン、ドロー！」

全て振り切るようにカードを引きぬく。

何を引いたかはまだ見えていない。

だが、久々に動き回れるカードが舞い込んで来たと指が伝えてくれている、気がした。

勝負の結果は……一番エンジョイした者が勝利を掴んだ。それだけの話。

帰りに夕暮れの中でもう一度だけ投げた石は、十二個の波紋を刻みながら河の半分まで到達した。

先はまだ長いな。

余談になるがこのずっと後に、海美さんから授かった「決闘式勉強法」なる画期的かつ意味不明な学習方法によって知識がリミットオーバーアクセルするという、俺の悩みはなんだったんだと崩れ落ちる元も子もない事態が発生する。

そんなこと、この時は微塵も想像できなかった。

この世界は決闘絡めれば大抵どうにかなるとはわかっていたが……ここまでか。

結局何も進まない雨の日。

その日のアンナは上機嫌だった。
起きる前から降り続く雨も、そのせいで蒸し暑く不快な湿気も気にならないほどだ。
お気に入りの赤い傘をくるくると回し、やや膨らんだ手提げ袋の重みも物ともせず水たまりができた道を長靴で軽快に歩いていく。
今日はユウヤの家で一緒に夏休みの宿題をすると約束をした日なのだ。
きっかけはアンナが姉と慕う従姉、海美が大会中にユウヤと宿題の話をしたことだ。
「量が多くて大変なのは小学生も高校生も同じねー」だとか「少しづつ進めても一番時間がかかって面倒なものが残ったりするんですよねー」だとかいう内容だ。
そのなかでユウヤが、日記と自由研究以外は最初の数日でまとめて終わらせたと答えた時に、海美の目が悪戯っぽく輝いた。
唐突に、もし良かったらアンナちゃんの宿題を手伝ってあげて、と提案をしたのだ。
これに対し、毎年ギリギリまで宿題を放置して夏休みを満喫するアンナは当然難色を示した。

ぶーたれるアンナをその場から引き離し、海美が囁く。
宿題のためって言えばどちらかの家で二人っきりで近づけるわ回数を分ければ何度も、と。
デメリット効果も味方に付ければ大きなメリットと展開ができるようになるの、と。
その甘言の結果アンナは、ニヤけそうになるのを抑えながら努めて渋々と嫌そうな顔で、どうしてもっていうなら手伝ってくれても良いぜ、と自分からユウヤへ頼んだ。
ユウヤは苦笑交じりに宿題を写さないことを条件としてこれを快諾した。
隣に座って二人だけで一緒に過ごす時間。
男の方は勉強ができるからわからないところを聞いて、さらに接近する顔と顔の距離。
アンナは以前クラスメイトから借りた少女マンガの一場面を急に思い出し、それを実践するかもしれないという想像が妙に恥ずかしくて、それを振り払うように片腕をブンブンと振ってしまう。
なかば押し付けられて見た時は自分の趣味に合わないと流し読んだ内容を、今はもっとしっかり見てそんな時どうすればいいか覚えておけば良かったと後悔しているほどだ。
海美の言ったことは間違ってはいなかった。

実際、いつもならば夏休み最終日の彼女と家族を苦しめる大量の宿題たちも、今日ばかりはあって良かったと思えてくるのは二人きりでいられることに胸が踊るからだ。
アンナにとって海美は理想の女性だ。
キレイで優しくてカッコいい女性で、自分では思いつかないようなことを沢山教えてくれる。
デュエルモンスターズが関わると時々変なことを言いだすのは玉に瑕だが、そこはユウヤも同じだし彼の場合は目の色まで変えて止まらなくなるのでより面倒だ。
デュエリストっていうのはそういうものなのだろう、とアンナは解釈していた。
D・パッドの通話で恋の相談にも乗ってくれるし、相手がデュエリストで自分もデュエルモンスターズに興味を持ったと伝えると、より一層親身になってルールまで教えてくれるようになった。
難しくて全然理解できていないが、ちゃんと覚えたらユウヤにデュエルを挑んで大会の決勝戦でみたような戦い方で勝ち、デートに誘わせるのがアンナの目標である。
あとデュエリストになっても、妙ちくりんなことを言いださないように気をつけることもだ。
大会を見に行くことになったのも海美から、覚えたことを踏まえて沢山の実践を見てなんとなくでもこういうことをしてみたいっていうイメージを見つけてみなさい、と言

われたことが始まりだ。
もっとも、アンナは海美の応援が第一でそのついでに、程度の気持ちだった。
それにユウヤを誘ったのはなんとなくだ、とアンナは主張する。
別に夏休みの間ずっと会えないのが嫌で、デュエルが関わることなら絶対断られないと見越して会う口実にした、なんてことはない。まったくないと彼女は心の中でうそぶいた。
軽く鼻歌を歌っていると、もうユウヤの家の前に到着していた。
約束の時間より三〇分ほど早いがなにも問題はない。彼女にとってはなにもない。
屋根のあるドア前で、水たまりで髪と服に変なところはないなと確かめてからチャイムを押した。
傘をふって水気をはらっていると、外にいる者を気遣うようにそっとドアが開かれる。
アンナより背が目線一つ分ほど高い、薄紫色の髪をした少年が笑顔で出迎えた。
「早いねアンナ。雨、大丈夫だった？タオル要る？」
「お、おお！大丈夫だって。カサ差してたし、こんな雨でぬれるほどマヌケじゃねーよ」
「あはは……。そりゃ良かった」
ユウヤが何故か乾いた笑いを漏らしているのを尻目に招かれるままドアをくぐる。

「……？」

傘立てに自分の傘を差しながら、アンナは玄関に違和感を覚えた。

この家に訪れるのは小鳥たちと一緒に遊びに来たことも含めて三度目になるが、なんだか靴と傘が多いと思ったからだ。

彼女の疑問はすぐに解消される。

案内された部屋の扉をユウヤが開け、冷たい空気が肌をなでると共に部屋の様子が目に入った。

「待てこいつ、この！」

「わぁ!?なんか腕みたいなのが伸びてきたぁ！」

「おいユウヤー！これどうやって止めるんだよ!?」

部屋の中ではロボットアームを二本生やしたX字の飛行物体が高速で飛び回り、首からタオルを下げた遊馬と小鳥がそれにドタンバタンと翻弄されている。

その騒ぎを目にしたアンナから、勉強へ向けるのもやぶさかでなかった熱意がスッと冷めた。

あちゃーと言いながら顔を覆う、目の前の容疑者へと彼女は当然の疑問を投げかけた。

「おい……ユウヤ……？」
「ああごめん。伝えてなかったけど遊馬と小鳥さんも一緒にやることになったから」
「フン!!」
「ナン、グモァ!?」
あっけらかんとのたまった男子の背中へと一閃。制裁のキックが炸裂した。
夏休みの宿題なんて消えてなくなっちまえばいいのに。
アンナは例年通りの呪詛を、胸の内でつぶやいた。

■■■■■

まだ痛む背中をさすりながら勉強机に放置して誤作動したドローンもどきを片付け、冷房の効いた部屋でペンを動かす。
窓から見える外の景色は、分厚い雲からしとしとと雨が降り注いでいるのが見えた。
クーラーの駆動音と雨音と紙をこするペンの音をＢＧＭに、友達と一緒にやっていると普段と違う状況によるやんわりとした緊張感のおかげで宿題が加速するなぁと黙考する。
この感覚がきっとフォアザチーム……！いや、やっぱり違うかもしれない。

不意に、折り畳み式ちゃぶ台の上で四つ並ぶガラスコップがカランと鳴った。
「……あきたー」
「俺もー……」
向かい側に座るアンナが降参とばかりに両手を突き上げてバタリと倒れ、俺の左側にいる遊馬先生もつられて机に突っ伏した。はえーよ二人とも。
「始めてからまだ十分も経ってないよ……？」
「もう十分もやったんだろー」
「アンナ、そんなんならクレープ無しだからね」
「んー……！」
不機嫌そうにこちらを睨むアンナの姿に俺は自分の眉間を揉む。
俺が報連相を怠ったゆえのやる気ロスト事件とはいえ、もうちょっとなんとかならないだろうか。
部屋に来た瞬間に機嫌を損ね、帰ってやる！と言いだしたアンナを、この間食べたハートランドクレープを今度おごるからと説得してなんとか引き留めたがあまり効果はないようだ。
彼女の算数ドリルを覗き込むと、二ページ目の半分までしか進んでいなかった。開始から間もないとはいえ進みが遅い。遊馬先生の方も見たが似たようなものである。

「遊馬もさ、せめて服が乾くまでは頑張ろうよ」
「あぁー……」
来る途中で車に水をひっかけられたらしく、遊馬先生は俺の服を、小鳥女医は母さんが用意した服を今は着用している。元の服は洗濯乾燥中だ。
アンナより先に呼んで小鳥女医には詰まっているところを教えて終わらせ、アンナが来た後は遊馬先生を押し付け、もとい任せる作戦だったが……その処理に時間を取られ台無しである。
「二人とも、こういう時に一気に進めておいた方があとあと楽よ」
「んなこと言ったって全然やる気でねぇしさー。夏休みのだってまだ半分以上あるだろー」
「もー。そんなだからいつも最後の日に大慌てするんじゃない」
見かねた小鳥女医も援護してくれるが、遊馬先生も起き上がってくれない。
こちらは最初から乗り気でなかった分、立たせるのは余計に難しそうだ。

本来はアンナとするはずだった宿題に、二人が加わることになったのは昨日のことである。
遊馬先生たちと遊んだ帰りに小鳥女医と、遊馬先生の姉である明里さんとバッタリ出

会った。
俺はその日のメンバーと共に何回か九十九家へ遊びに行っているので、明里さんやおばあさんの春さんにも顔を覚えてもらっていたこともあって話が弾んだ。
友達と図書館にいたという小鳥女医は順調に宿題が進んでいると言ったところで明里さんが「アンタらは宿題進んでるのー？」と話をふり一緒にいた男子連中の顔が苦くなった。
黙る奴らに代わり俺が、ほとんど終わってますし明日友達のを手伝うぐらいです、と返答した。
すると明里さんから「ならついでに遊馬のも見てやってくれない？ほっとくと全然やらないから」と頼まれたのだ。「姉ちゃんだってギリギリになって自分の宿題、俺にまでやらせるじゃねぇか」と小声で抗議する弟を「何か言った？」と姉が笑顔で黙らせるあたり姉弟のパワーバランスを如実に現していた。
断る理由はないから引き受けると、小鳥女医もわからない所を教えて欲しいと参加を表明した。
もうすぐ帯を黒くできるらしい空手の練習帰りの明里さんに遊馬先生は逆らえず、渋々と参加が決定。鉄男たちも誘ったが、都合がつかないだのまだ宿題するべき時ではないだのと逃げられた。

「大体、なんで毎年毎年こんな山みたいに宿題出るんだよ！」
「だよな！夏〝休み〟だぜ!?なんで休ませてくれねーんだー！」
「お前ら、宿題しに来たんだよね……？愚痴大会じゃないんだからさ」
起き上がってウガーと叫ぶ二人を前に天井を仰ぐ。にぎやかになってきたな……。
この二人は初対面こそケンカで始まったものの、お互い遺恨を引きずることを好まない性格なので昼休みのドッジボール一騎打ちをもって和解してからは、思うまま全力で生きていることと小学生らしい元気がバーニングするソウルを持つところが同じなせいか、割と波長が合うようだ。
「でも確かにもう少し少なくならないかなーって私も思っちゃうかな」
「おおう、小鳥さんもか……まぁ、一気に渡されるから余計に多いと思っちゃうけどさ」
漢字の書き取りや算数ドリルに夏休み中の日記、絵、自由研究にエトセトラエトセトラ。
俺の場合は内容が難しいとかはないが、小学生だからこその多種多様さもあってとにかく手が疲れるし面倒だとも感じる。彼らは普通の子供ゆえに面倒さも輪をかけたものだろう。
「休んでる間に勉強したこと忘れて困らないようにってことだと思うよ」

「その宿題に困ってんだよこっちは！」
アンナが吠えてまたも倒れた。
子供の体感時間で考えると夏休みというのはとてもとても長いものだから、その間の経験は強く胸に残ったりするだろう。いい経験も宿題で苦しむことも含めて覚えていくものだ。
「勉強させるにしてももっと楽しくできるのとかねーのかなー」
「ユウヤー決闘してるだけで頭良くなる方法とかねぇかー？」
「そんなのあったら俺が知りたいよ……」
ゲームのお金を現実で使えないかな、レベルである遊馬先生の発言に苦笑する。
この世界の場合ならわりとアリ得そうな代物ではあるが、あったとしてもインチキ講師のいいかげんな指導が関の山だろうからわざわざ探す気にもなれない。
「それはないけど、わかんないとこあるなら決闘に例えて教えてみるから頑張ろうよ遊馬。ほら、かっとビングかっとビング」
「そのかっとビングはいらねぇかな……」
「アンナも。決闘……じゃわからないか。できる限り列車とかに例えてみるから。起きてー」
「そんなことできんのかよ……？」

「わかんないけど頑張って見るよ。せっかく一緒にやるんだしね」
再び机に突っ伏す遊馬先生の背を軽く叩き、寝転ぶアンナには声をかけると両者のそのと体を起こした。一度引き受けた以上は俺も熱血指導で勉強をさせマス。
「あ……ユウヤくん。ここなんだけど……」
「ん。ああ、ここで聞いてるのはさ……こういうことで……」
しっかりやっている小鳥女医からの質問に、少し体を彼女の方へ近づけてドリルに書き込みながら出来るだけ噛み砕いた説明をする。わかり辛い所が解ければ一気に宿題が終わるらしい彼女はモチベーションが高く進みが早い。……視界の端でアンナが口を開けたままこちらを食い入るように見つめているが、どうかしたのだろうか。
「じゃあ、コレを……こうするんだ！さすがユウヤくん頭良い！」
「……あはは。まぁ、社会科以外は得意……だしね、うん」
小鳥女医の屈託のない褒め言葉に歯切れ悪く答える。
こうやって褒められるたび、小学生レベルの勉強で間違えることがある自分を思い出し、ワンターンキル級のダメージが心へ突き刺さる。
前世では一番得意だった歴史と地理は、今では一番の苦手科目だ。
以前は年号も出来事も関連人物も、常にそらで言えることが密かな自慢だった歴史の暗記も、今ではその暗記がこの世界の歴史を覚えることの邪魔にしかなっていない。

「デレデレしてんな、よ！」
「あ痛てて……止め、蹴る……なって！」
ちゃぶ台の下から、アンナによる蹴りの連打がゲシゲシと俺の足へと繰り出される。
隙をついて蹴撃を足で挟み込んで捕らえ床へ押さえつけた。まったく。落ち込んでいる暇もない。
あとデレデレもしてないっての。
「うわ！ちょ、はなせよヘンタイ！」
「ヘンタイ言うな。ほら、お前の足を放してほしければぁ今すぐ宿題にぃ取り掛かるのぉだぁ」
「くっそー、そんな脅しにくっしないぜ！オレは絶対に……やらない！」
「お前今日何しに来たんだよ」
確固たる意志をもったサボる宣言に語気が荒くなった。
またも寝転ぶアンナの姿を見て、今日は全然進みそうにないなと確信めいた予想が頭をよぎる。
そんな言い争いを無視して、自分のドリルから目を逸らしたいのであろう遊馬先生が俺の用紙を覗き込んでいる。
「なあ、ユウヤは何やってんだ？自由研究っつってたけど」

「これ？時計を分解して中がどういう構造になってるか描いてまとめてるんだよ」

飛夫さんにお金を使わずにできる機械いじりの練習ってありませんかと聞いたところ、家に壊れた時計やもう使ってない機械があるならそれ分解して元に戻すだけでも意外といい経験になるぜ、とのことだった。

なので父さんから、何ゴミで出すか解らずホコリを被っていた腕時計を数本もらって好きに分解して戻している。応用するなら紙にまとめた方が後々楽だし、それを自由研究ってことにして宿題も片づけてしまおう、という魂胆である。

「分解……？なんか難しそうなことやるんだな」

「要所要所の絵と改造の仕方だけ書いて、あとは適当な時計の情報そえて終わりだから、そんなに難しいことじゃないさ」

とりあえず提出用の紙には、逆回転のさせ方や長針短針の役割を逆にする方法とか実践して書いておくつもりである。

俺の自由研究のコツは「ほどよく雑な内容でまとめる」ことだ。

大人の頭で大真面目にレポートを作ってしまうと、提出した教師から親にやってもらったなと勘違いされ、返却された用紙に「らいねんからはじぶんでやろうね！」と書かれてしまう。

まぁ仕方ないかと己に言い聞かせ、満足できない哀しみが飛来した一年生の秋の実体

験である。
　ここで楽する分はドローンもどきの改造にでも有効活用しよう。
「これも使うのかー？落ちてたぞ」
　寝転んだままのアンナが腕だけ伸ばして手の中の腕時計を見せてくる。
　片づけた時は気付かなかったが、さっきのドタバタで腕時計の一つが床に落ちたようだ。
　えーとそれは……。
「それは普通のより複雑だから、宿題には使わないよ。昨日いじってて部品が部屋のどっかに飛んでっちゃったから、中身よくわかってないしね」
「ふーん……ん、なんだこの時計？時計の中に時計が入ってんのか……？変なの」
「時計に時計？アンナー、ちょっと見せてくれよ」
「ほれー」
　アンナが遊馬先生へと腕時計を軽く放る。
　こらこら。安物なうえ元々壊れてるといっても、他人の物を投げ渡すんじゃない。
「これは……あれか！変形して乗り物になんのか!?運転席のメーターに似てるしさ！」
「そんなわけないじゃない」
「じゃあ小鳥はわかんのかよー？」

「ええ?·えっとこれは……きっと外国の時間もわかるようになってるのよ!·」

自由な発想の遊馬先生と、名答を思いついたとドヤ顔している小鳥女医。

しかし残念ながら二人ともハズレだ。遊馬先生から腕時計を渡してもらい答えを明かす。

「これは横のつまみで動かせるストップウォッチがついてるんだよ。物によっては遊馬が言ったような速度計がついてるもあるんだけどね」

「そ、そうなんだ……」

こういうタイプの時計をギリシャ語で「時間」と「記録」を組み合わせた造語で――――。

「クロノグラフって言うんだよ」

必要なものが足りないので、どうやっても動かないそれを顔の横で掲げた。

遠くの夜と軽い奴。

ソレが永い眠りから目覚めた時、最初に己の失態を悔いた。

かつての決戦から、どれほどの時が流れたかはわからない。

だが、自分を眺める人間たちの会話から、断片的にではあるが大体の察しは付く。

まだ自分が目覚めてよい時ではないこともだ。

自分の役目は、戦いの影響で生まれた厄介な怪物を封じ続けることであった。

奴を放置すれば自分たちの奔走が、この次元ごと水泡に帰すこともあり得る。

しかし、あれは消し去る訳にも行かず時が来れば世に放たなければならない。

だからこそ大それた結界まで建築し、奴を誘い込んで自分ごと石板に封じ込めたのだ。

誤って封印を解かぬよう決して誰も踏み入れてはならないと、かつての人間たちに協力させて結界ごと地中深くに埋めさせた。

だというのに。

結界は掘り起こされ最初に踏み入った人間は欲に駆られて、あろうことか封印の宝石を根こそぎ剥がし、奴は自由の身となった。加えて自分は「あーていふぁくと」とやらとして晒しものだ。

時折姿を見せる「おーなー」や「すぽんさー」とやらの欲望まみれの眼を見るたびに、そのぶくぶくと肥えた腹を食いちぎり、残りを次元の彼方へと投げ捨ててしまいたくなる。

人間どもの愚かさは重々承知していたが、どれほどの時を経ても全く成長していないようだ。

幸いにも奴へ打ち込んだ楔は抜かれてはいないらしい。

我が半身を使った奴への呪いだ。ろくに力を振るうことも、蓄えることも出来はしない。

楔のおかげで奴の動きがわかる代わりに自分も力の大半を使えないが、上手くいけば予定通りに封じておけるだろう。

しかし、そんな楽観視などしてもいられない。

あれはとうにかの者に接触しているのだ。まごついていては同胞たちにあわせる顔が無い。

まずは己を納めた封印の石板から抜け出し、更に今の人間どもが施した檻からも脱出しなければならない。結界から無理矢理に移動させられたせいで石板の封印式も歪んでしまっている。外すにも時間がかかりそうだ。舌打ちをしたいが、石の中ではそれも敵わずまた怒りが募った。

待っていろ。すぐにこの「けぇす」とかいう透明な壁から脱出してみせる！

■■■■■

ぶるりと震えて目が覚めた。

見慣れていないテントの暗い天井に、消灯されているランプがぶら下がっている。

思わず出たあくびのせいか、涙で濡れている目元をこすりながら体を起こした。

もぞもぞと寝袋から這い出て、同じテントで寝ている今日会ったばかりの子供たちを起こさないよう、懐中電灯を取ってそっと彼らをまたいでいく。

テントから出ると夜風が心地よく吹いていた。

昼間は目に優しい緑色をしていた周囲の木々は、今は黒にしか見えずなかなかの威圧

感を放ち、月も出ていないせいか真っ暗だ。散々鳴いていた蝉の声もこんな夜中では流石に黙り、揺れる木々のざわめきだけが耳へ降ってくる。立ち並ぶテントも中に人がいることはわかっているが、どれも寝静まっているせいで暗く静かな姿に、俺に妙な異物感と孤独感を与えてくる。

再びあくびが漏れた。トイレどっちだったっけか。

普通の子供が一人でいれば少々ひるみそうな光景だが、あいにく素直に怖がれるほど幼さは持ち合わせていない。むしろ都会では感じ辛いものが刺激してくるのは風情があって良いものだ。

山奥なので車の音もしない静かな夏の夜道を、ハリキリ尿意を治めるために歩き出した。

ハートランドシティから遠く離れたキャンプ場。

今日は、遊馬先生の誘いで参加したサマーキャンプの一日目だった。

三泊四日の長丁場を予定するこのキャンプは、主催している所が遊馬先生の父、九十九一馬さんに毎年仕事の依頼をしているらしく、バイトとして来る明里さんともども親子三人で参加しているそうだ。去年は小鳥女医と鉄男が加わって、今年はそこへ俺とアンナも参加している。

他にも沢山の子供が参加しているため、班分けでは見事にバラバラになってしまったが、班の子供たちともレクリエーションと決闘を通して仲良くなれたし問題はない。【グレイドル】の子が【エネミーコントローラー】を交換してくれたので、左！右！ＡＢ！とＡＲビジョンを使ったコマンド入力とボタン連打の競い合いを始めるとちょっと受けた。

それにしても濃い一日だった。

俺と遊馬先生で森を天狗のように駆け回り、他の子が真似したらどうすんのと明里さんにげん骨で叱られアンナが明里さんの強さに惚れて弟子入りしたり、鉄男が昼飯の流しそうめんで華麗な箸さばきを見せて麺が天に昇ったり、小鳥女医ふくむ女の子たちが山の動物にさらわれた末にアンナが彼らの頂点に立って【ビースト】系カードを献上されたり、俺が飛夫さんとこのメカニックたちから実験を押し付けられたメカで動物たちからアンナを引きはがしたり……。

預かっていたメカはあらかた壊れてしまったが、みんな無事で良かった。

帰ったらどう言い訳しよう。山分けしてもらったカードを渡したら許してもらえるだろうか。

丸太で縁取りされた階段を下りながら、キャンプ後に取らねばならない責任で憂鬱になる。

「寝ないでうろつく悪い子誰だ？」
「うおぉぉぉ!?」
突然、後ろから肩を掴まれながら囁かれ、思わず叫び声を上げてしまった。
一日の疲れから残っていた眠気も飛んで、飛び退いて後ろの下手人を確認する。
そこにはラフな格好に見覚えのある腕章をした、軽薄そうな雰囲気を持つ男が立っていた。
「うわ何ビックリしたぁ。なんだチャーリーか」
「夜中に叫ぶなよ。余所のキャンプ客に迷惑だろ」
相手が不審者や旅行者のナッシュでなく、サマーキャンプのスタッフだったことに胸を撫で下ろした。しかし向けた懐中電灯の灯りで眩しがる姿が妙に様になっているのが少々腹立たしい。

チャーリー・マッコイ。
ライフイズカーニバル！がキメ台詞のギャンブルデッキ使い。
アニメでは、手術を受ける少女のため持ち主に幸運をもたらす【Ｎｏ．７】を盗んで騒動を起こす冒険家兼電脳じゃないトレジャーハンター。一馬さんが失踪したショックで運に固執する男だった。

そんな未来はともかく現在は一馬さんの教え子の大学生でバイトスタッフだ。使うカードも交換したカードもギャンブルカードが多く、程度の差はあれ運に頼る所は元からのようだが。

「驚かす気満々の声かけしといて何言ってんのこの野郎」
「サプライズは会話の潤滑剤だぜ、ヤー坊」
「やっぱ完全にその呼び方で固定なのか……」
ヤー坊、とは俺のことらしい。
尊敬する教師の息子であるツクモユウマと、フルネームが似てる俺ことツクネユウヤ。名字でも名前でも呼び間違えそうだからと、この男は決闘をしてから俺をそう呼び始めた。正直遠慮したかったが「なら遊馬をマー坊とでも呼ぶか」という呟きによって苦渋の妥協をせざるを得なかった。遊馬先生をそんな豆腐やナス料理みたいな呼び名させてたまるか。
その後も様々な言動を見た結果、こいつを敬う気は消え失せた。当人も気にしてないし。
「もうとっくに消灯時間だ。夜のお散歩は危ないぜ？昼間のこともあるし、そうじゃなくても闇に乗じて怖ーい奴が狙ってくることだってあるんだからな」

「ご忠告ありがとう。トイレ行ったらすぐ戻るよ。そっちは見回り？」
「いや？俺は今日仲良くなった女の子とお喋りしてきた帰り」
「お前が闇に乗じて女狙いに行ってるじゃないか」
「おいおい、人聞きが悪いな。男として女性のお誘いを無下にできなかっただけだって」
　する気が無いの言い間違いじゃないのか。
　ヘラヘラ笑うこの男の特徴として、見た通りの軟派男であることが挙げられる。
　現に今日一日だけでもキャンプ場の女性スタッフに余所の女性客と、若い女性を手当たり次第に口説いていた。同じ回数だけ明里さんからしばき倒され仕事に戻されていたので、ナンパに成功していたとか言われてもちょっと疑わしい。
「それが本当かはともかく、遊び過ぎて俺たちのキャンプに問題を飛び火させないでよ？」
「火遊びはお手の物。流石に一馬先生や坊主たちに迷惑かける真似はしねえさ」
「だといいけど……。じゃあおやすみー」
　話もそこそこに切り上げて踵を返し、再びトイレへ歩き出す。するとチャーリーが俺に追いついて隣に並んで来た。
「どうしたの」
「子供一人じゃ危ないって言ってるだろ。ちょっとお散歩しようぜ」

「まぁ、いいけど」
　どうせトイレまで往復する間だし、目くじら立てて拒否する理由はない。立場もあるだろうし。
「迷惑かけないとか言ってるけど、ナンパしてサボってたのは含まれないの？」
「ヤー坊くらいの歳だとまだ知らないだろうが、大人が美女を見て口説かないでいるのは、エチケットに反するんだ。今のうちに女の褒め方を覚えておかないと将来大変だぞ」
「どこの国のマナーだ。堂々と子供にウソを吹き込もうとするのは止めろよ」
　そういうのは俺の性に合わないし、何故かはわからないが俺がチャーリーのような真似をしたら、明里さんのげん骨が可愛く思えるようなヒドイ目に遭うと第六感が警鐘を鳴らしている気がする。
「そもそもサボりって言われてもな……俺が必要なことあったか？ほとんどはヤー坊がまとめてくれてたじゃないか」
「……そうだったけどさ」
　初対面の子供が相手と言う点を除けば、普段学校でやっていることと変わらないので正直言って、うちの班は監督役の大人がいなくても困ることはほとんどなかった。
「坊主や嬢ちゃんたちだけで十分だと思ったから、ちょっと離れて見守ることにしてた

だけさ。口を出さずに居た方がお前らの経験になると思ったしな」
「経験？」
「何でもかんでも手を貸したり代わりにやってやることを助けるとは言わないのさ。相手が八方塞がりになった時だけの方が、そいつの成長に繋がるんだよ」
「……」

ピタリと足が止まった。
チャーリーの言葉にも一理ある。確かに子供のやろうとしていることを、こちらの方が速いからと大人が口や手を出してばかりでは、彼らから意欲や試行錯誤する力を奪ってしまうだろう。
俺は遊馬先生のかっとビングに付き合う際に、彼が言い出す子供特有の発想を結構否定しがちだ。この間の「立ちこぎブランコから跳んで最高飛距離を目指す」チャレンジの時にも、いろいろあったのち最終的にアアクセルシンクロォォ！と叫んで跳ぶと飛距離が延びるという結論に達した辺りは、確実に俺の悪影響だろう。
もう少し彼らのやり方を尊重しつつチャーリーの言うように手助けするにも距離感を省みた方が、彼らの未来のためには良いのかもしれない。

ただ……。

「サボりの正当化じゃなければ、もうちょっと素直に受け入れられるんだけどなー……」

「おっと、バレちまったか。はっはっはっは」

良いことを言っているように見えるが、こいつ思いっ切り俺たちのことを見てない時があったので完全に口からでまかせである。おかげでアンナたちを助けに抜け出せたのだが、それはそれ。

笑って誤魔化そうとしているこの男を咎めようと口を開きかけたその時、茂みの向こうからガサガサと物音がしだした。

「ヤー坊。ちょっと後ろにさがってな」

庇うように音源と俺の間にチャーリーが立つ。

じわじわと近づいてくる音は、結構な大きさの何かが動く物であることが予想できた。昼間の動物たちが懲りもせずにやって来た可能性もあるので、二人そろって警戒を強める。

大した間もなく、ナニカが茂みを突っ切って飛び出してきた。

飛び出してきた影を捕まえようとチャーリーが腕を伸ばす。しかし、触れる直前で驚いたように彼は腕を引っ込め、その脇を影が見事なステップですり抜けて躱し俺のもとへと駆けてくる。

狙いは俺か！咄嗟に距離をとろうとしたが、かかとを階段の段差にひっかけてよろけてしまい襲撃者のタックルをもろに腹で受け止めることになった。
「ンミッッ……ッォオ!?」
吹っ飛ばされそうになりながらも、なんのと倒れるのを踏ん張って痛みごと堪えた。
「捕まえ……ん？」
抱え込んで伝わってくる胴体の感触と、こちらの腰に回された腕らしきもの。
体に触れる感覚から、相手が野生動物でなく人間であることが理解できた。
影の正体を確かめようと腕を離して見下ろすと、Tシャツがめくれ上がって見える肌と短パンが見え、自分の腹の方へ目を向ければ見慣れた赤とオレンジの髪が震えながら腹にめり込んでいた。
「アンナ……？どうしたの？」
「ユ〝ウ〝ヤ〝ぁぁー……！」
腕の中で見上げてきた襲撃者は、なぜか内股なうえに涙目で鼻声のアンナだった。
状況が飲み込めずチャーリーを見やれば、肩をすくめて困ったように笑っていた。

■■■■■

「……なるほど。確かにこれは一人で来たくないね」
「そーだろー!?……ううヤバい」
三人で公衆トイレまでたどり着くと、入り口の電灯が普通に切れかけて点滅していた。
周りに他の灯りが無い分、その頼りなさが浮き彫りになってむやみやたらと不気味な雰囲気を生み出している。目に悪いし、電灯の点滅がこの間の【Ｎｏ．９６】を思い出して気分が悪い。
ここはバナナを思い出して留飲を下げよう。
アンナは俺と同じくトイレに行きたくなって目を覚ましたが、最寄りのトイレがこの有り様で近寄りたくなくなり、別のトイレを目指したそうだ。それは良かったのだが、そこで近道をしようといういらない発想が湧いてしまって、藪を突っ切って道なき道を走り出した。が、案の定迷いさらにタイミング悪く、持っていた懐中電灯の電池が切れてしまったらしい。
道を外れたせいで街灯の光が届かない闇に独りぼっち。寝る直前にテント内のみんなで怪談をしたせいでまとわりつく、振り向いたらなんかいそーという悪寒。割とギリギリの膀胱。
色んな意味で限界バトルだったろう。

そこへ俺たちの話し声が聞こえてきて、一も二もなく声の方向へ突進したのがさっきの真相だ。
「オ、オレを置いて先に帰ったりするなよ！怖いからじゃなくて、ライトがないからだけどな！」
「大丈夫だから早く行っといで」
「絶対だぞ！絶対だからな!!オッサンは……どっちでもいいや！」
「雑だな。それにまだオッサンって呼ばれるような歳じゃないって言ってるだろアンナちゃん」
まぁ、アンナは昼間ナンパしまくってたチャーリーを「オレああいう奴嫌い」と蔑む目で見ていたので、この反応は割とマシな方だと思う。大人がいて安心したからだろう。
俺とチャーリーに念押ししながら女子トイレへ駆け込む彼女はやたら必死である。先に帰れというフリみたいだ。俺も男子トイレの方へ入ろうとすると、彼女がトイレの入り口から何か言いたげに首だけひょっこりと出した。
「ちゃんといるってわかるようにしててくれよ！」
「わかるようにって……例えば？」
「う、歌うとか！」

「いや……夜中の公衆トイレで歌う子供とか、それこそ怪談でありそうだよ」
「変なこと言うなよバカぁ！」
　セルフＢＧＭを要求されたがハーモニカも草笛に適した葉っぱも無かったので、誰か近くに居るとわかれば良いのだからと、そこそこ大きめの声でチャーリーと話しておくことにした。

「――――で、目の仇にされてあやうく遺物の盗難事件の犯人にされるところでな。俺は端の方で発掘に関わってただけだってのに」
「そうなんだ……。随分嫌味な刑事が担当してたんだね」
「まったくだ。ちょっとそいつの愛人に手を出したからってなぁ」
「前言撤回。自分で付けた火種じゃねえか。火遊びはお手の物じゃなかったっけ？」
「だから収めるために言ってやったよ。『俺が盗んだのは彼女の心だけだぜ』ってな」
「油注いで焼かれに行ってどうすんだよ」
　こいつ本当に、まともに取り合うとこっちが損をするタイプだなぁ。
　用を足したあともアンナを待って、最近あったツイてなかった話で会話が弾んでいる。
「決闘してた時もそうだけど、自分から危ない橋を作って渡るような真似してない？」

「そうか？どうなるか自分でもわからない方がスリルがあって面白いだろ。決闘も人生もな」
「スリルねぇ……じゃあこんなのはどう。しっかりデッキから抜いて家の棚にしまっておいたはずのカードが、何故か二枚もデッキに混ざって初手で引いちゃうのが度々起こるとか」
「待て。話の方向性が違うんじゃないか？」
「意味わからなくてゾクゾクするを通り越して笑えてくるでしょ？」
「怖がらせたいにしても、もうちょっと反応に困らないホラーにしてくれよ」
「いや怪談とかじゃなくて。これチャーリーと決闘してた時の話だからね」
そして、その時だけという訳でもない。
抜いたはずの【スパイク・イーグル】とまた【モンキーボード】が邪魔しに参ったとばかりに顔を出した時は、スリルとか通り越して決闘中にカードを山の彼方へ放り投げたくなったからな。
今日は【凡骨融合】の少年や【異次元の偵察者ビート】の少女の時も同じことが起きたし。
「マジか……なんかに呪われてるんじゃないのかヤー坊」
「洒落にならないからそういうこと言うの本気で止めて」

自分で気づいていないだけで「決闘で……笑顔を……」と言い続けるもう一人の僕的な相棒霊が憑いてることを想定しなければならなくなる。決闘で除霊できるのかもしれないけれど、残念ながら決闘霊媒師の知り合いはいない。決闘者で幽霊っぽい人とは知り合う予定はあるが。

「あースッキリしたー！」

洗った手をプラプラと振りながら清々しい顔のアンナがトイレから出てきた。

その手をTシャツにゴシゴシこすり付ける彼女へ、持ってきたハンカチを差し出す。

「服で拭わない。ほら、使いなよ」

「別にいいじゃんか……借りるけどっ」

「それだけじゃないよ。全然知らない所で近道しようとして迷うとか、あそこに俺たちが来なかったらどうする気だったのさ」

「うえー……キャンプ来てまでお前の小言聞きたくねーよー」

戻ってきたので早速帰るか……なんて言うと思ったか。嫌だろうと聞かせるぞ。

キャンプ場内だからと夜の山を舐めてかかって遭難したらどうするんだ。本当に危ないからな。

「まあ待てよヤー坊、何もなかったんだから良いじゃないか。そういきり立つなよ」

「そーだそーだー！」

「甘やかすな。何か有ってからじゃ遅いんだから」
アンナは味方をしてくれるチャーリーを盾にするように背中へ隠れ、いーっ！と歯を見せてこちらを威嚇してきている。黙っててくれチャーリー、今は真面目な話をしてるんだ。他に怒る人がここにいない以上、俺が叱るしかないだろうが。
「……ま、でも危ないことしてたら心配になるもんだよな」
「おいオッサン、裏切るのかよ!?」
俺とアンナの間で、やれやれと笑っていたチャーリーが何かピンと閃いたような顔をしたかと思えば、急に逆のことを言い出した。なんか怪しいけどその方が助かるし良いか。
「そうだよ。だからこんなに怒ってるんだ」
「大事な相手を気にするのは仕方ないよな」
「そうそう」
「しかも女の子だ。一端の男として守りたいのは当然だな」
「そうそう」
「で、ヤー坊。お前がそんなに怒ってる理由はなんだ？」
「だから、アンナが大事な女の子だからに決まってるだろ」
「……ふぇ？」

大事な友達、しかも女子にはヒドイ目にあって欲しくないと思うのは普通のことだろうに。

何を言ってるんだ。

……ん？今なんかニュアンスがやや違うこと言わなかったか俺？

不審になって顔を上げると、ヒューと口笛を吹くしたり顔のチャーリーとその後ろでプルプル震えながら茹だったように頭から煙をだして顔を伏せるアンナの姿があった。

……うん。見なかったことにしよう。どうやって煙出してるとかツッコんでられないし、点滅する電灯のせいで赤面した顔もよく見えなかった。

「えーと、だから……心配だからもう止めてね」

「……おう」

なんかもう怒る気を削がれてしまったので適当にまとめると、アンナは下を向いたまま消え入りそうな上擦った声で返事をした。

「じゃあ、お二人さん。明日も早いんだからとっとと戻って寝るとしようぜ」

既に歩き出しているチャーリーが朗らかに促してくる。おい、この空気なんとかしろよ。

どうしようもないので、その後ろを二人でついて歩くことにした。

「結局お前、どっちの味方してたのさ」

「決まってるだろ。女の子の幸せの味方だ」
「そりゃあ立派なことで」
「アンナちゃんは素直みたいだから、わかりやすいしな」
「……うるせーよオッサン」
「だから、呼ぶんならできればチャーリーの方で頼むぜアンナちゃん」
クックックと笑うチャーリーを、頑なに俺の方を向いてくれないアンナが小声で非難する。
それ暗にアンナを単純とかバカ正直とかっていってないか？
「しっかし、ヤー坊があそこまで言うとは思わなかったぜ。将来有望だな」
ほっとけ。
もうこれ以上この話題でいじらせないために、話題を変えさせよう。
「ところで、明日の宝探しゲームって懐中電灯って必要なのか？」
「話の舵取りはまだまだみたいだけどな」
「いいから答えろサイコロカーニバル」
「持ってなくて大丈夫だ。中は電気通ってるし、謎解きに必要ならその場所に置いてあるからな」
明日の午前中にやるのは、キャンプ場近くにある遺跡の中で行われる本格的な宝探し

ゲーム。

いくつかあるルートを班ごとに選んで、用意された問題や仕掛けを解きながらルートごとに置かれたお宝を手に入れて脱出するまでを競争するそうだ。

説明してくれた遊馬先生が、今年で全ルート制覇できそうだぜ！と息巻いていたのを覚えている。

一馬さんは専門家として……というかその遺跡を発見したチームの一員だったらしく、当時の状況を知る人間として案内者たちのまとめ役や緊急時には救助の先導を務めるそうだ。

「ヤー坊は特に楽しめるだろうさ」

「ああ、宝を見つけたらカードがもらえるっていうのは遊馬から聞いてる」

宝はカードとお土産屋のストラップで、終わったら豪華特典としてそのままもらえるらしい。去年のカードは【サイクロン】だったという。俺のキャンプ参加の決め手だ。この世界においてもレアカードでもなんでもないが、俺は持ってないからそいつをこっちに寄越せ……！

「それもあるけどな、それだけじゃない」

「他にも何かあるの？」

「その遺跡にはデュエルモンスターズみたいな伝承があるんだよ。決闘者なら壁のレリーフまで楽しめるだろうさ。特にお前みたいな決闘バカはな」

ああ。そんな話も一応聞いてはいる。でも、この世界ならそんな場所いくらでもあるだろう。

それに明日行くのは俺たちが生まれた年に発見された所だ。

十年近い時間でとっくに調べつくされて、数年前からレクリエーションに使うことまで許可されているのだ。

そもそも遊馬先生が何度も来てるのに今まで何もなかったんだから、危険などあるわけが無い。

朝の小さな計画

その夜、アンナは眠れずにいた。

――アンナが大事な女の子だからに決まってるだろ。

「……へへ。えへへ」

アンナの寝袋からはにかんだ笑い声が漏れている。その顔には締まりがない。

テント前でユウヤとチャーリーと別れ、そのまま自分の寝床に潜りこんだ後のこと。

先ほどは突然であまり頭が働かなかったので、大した反応はできなかった。だが、横になっているとユウヤから言われた言葉を思い出して、それがぐるぐると頭を回って止まらなくなった。

暗い中で迷ってちょっと、本当にちょっとだけ怖かった時に、好きな男の子が来てくれた。

その子から大事だと言われた。

アンナは顔が熱を持ち始めたことに気づき、それを隠すように頭ごと寝袋へ突っ込んだ。彼にしがみ付いた部分が妙に暖かくて、パタパタと音を出しながら寝袋の中で足が宙を漕ぎ始める。

そろそろ寝なきゃマズいと思いつつも、嬉しさと興奮と気恥ずかしさがない交ぜになった感情が、眠気を遠ざけてしまう。そしてまた彼を思い出す。

――アンナは大事な女だからー。らー。らー。らー……。

「ふへへ……えっへへへへ」

そうしているうちに、過分に美化されたユウヤが若干異なるセリフを吐き出した。

頭を回るうちに想起が妄想へ暴走を始めると共に回す足は速く、音は大きくなり――。

ゴスッと、寝袋の外から軽く叩かれた。

「ふぐんっ……!?」

「……アンナちゃん、うるっさぃー……」

アンナが思わず寝袋から顔を出すと、隣で寝ていたアンナと同じ班の少女が不機嫌そ

うに睨みながら苦情を告げてきた。アンナが悶える音で目を覚ましてしまったようだ。
「……わ、悪ぃ」
「……」
少女はアンナの謝罪を聞くと満足したのか、そのまま反対側へ向いて再び眠りだす。
そしてアンナは、さっきとは別種の恥ずかしさで熱くなり、再び顔を寝袋にうずめた。

■■■■■

「んお。アンナおあよー」
「おっ!?……お、おう」
翌朝。
アンナが顔を洗いにテント近くの水場へ行くと、歯を磨いていたユウヤと鉢合わせた。
隣の子に叩かれたあともしばらく眠れなかったアンナは案の定寝不足だったが、不意の遭遇に眠気が少し飛んでしまった。対するユウヤは半開きのうろんな目のまま歯磨きを早々に再開している。
昨日の出来事と、寝起きを近くで見られたくなかったので、アンナは油を指しそびれ

た機械のように鈍くぎこちない動きでユウヤから距離を取って洗顔を始めた。
「アンナ、あの後眠れたー？」
「……全然」
「やっぱり？一度目が覚めると中々寝れないもんだよね。テントだし。今日も色々やるらしいからお互い気を付けようか」
寝不足の元凶が半分寝ているような声で、アンナを気遣ってきている。
その平然としている様子が、彼女の寝不足でだるく重い頭に怒りのスイッチを入れた。
「……お前のせいじゃねーかっ……！」
「え、なんで？」
完全に予想外だという反応で返してくるこの男子にアンナは段々と腹が立ってきた。
こちらはユウヤの言葉のせいで一晩中悶々とさせられたのに、当の相手は何もなかったかのように普段通りだ。自分だけ意識しているようで非常に面白くない。
彼女は怒りの果てに反撃の手段を思いついた。
こうなったらオレもユウヤを大事な男だって言ってやる！
こいつもオレのことが頭から離れなくてドキドキしっぱなしになって、どうしようも無くなれば良いんだ!!――――と。

「ゆ、ユウヤ！」
「おぉ……!?」
うがいも終わって洗面用具を片付けていたユウヤは、声を荒げたアンナに小さく肩が跳ねた。
「オレは、オレは……その！」
「う、うん……？」
自分は実はすごく恥ずかしいことを言おうとしているんじゃないか。
アンナは確実に赤くなっている顔に薄々感づきながらも、絶対に言ってやるという強い意思がブレーキを踏みつけることを拒んで止まらない。
「だから、お前を大……！」

「お？早いな、お二人さん」
意を決して伝えようとした言葉の続きを、急に湧いたチャーリーが遮った。
「ふん!!」
「ドウグオブ!?」
「チャーリィー!?」

アンナは目の前の邪魔者へと、明里に弟子入りして教わったばかりの正拳突きを腹に打ち込む。

運悪く、近づくまでアンナたち二人を視認できず、かつその状況をまったく理解できていなかったチャーリーは、予想外の拳をモロに受けるハメとなりその場に沈んだ。

「この！この！」

「もう止めろアンナ！チャーリーのライフはもうゼロだって！」

「はーなーせー!!」

崩れ落ちたチャーリーへ追撃をしようと暴れるアンナを、ユウヤが羽交い絞めにしてなんとか止める。

「あ、明里のパンチより効いた、ぜ……」

「チャァーリィィー!?」

ガクリと気を失うチャーリーを前に、ユウヤの大げさな嘆きが朝っぱらのキャンプ場に響いた。

その後、目覚めたチャーリーに揃って謝るアンナたちの姿があったという。

■■■■■

察しの良かったチャーリーは笑って許したが、そうではないユウヤに暴力反対！と散々叱られた。
その後もめげずにアンナはユウヤに大事宣言をしようと、二人で話せる機会を伺っていた。
しかし……。
「ユウヤ、さっきの話で……」
「ユウヤ兄ちゃん、決闘しようぜー！」
「お、よーし相手になるよ！今度は負けないぞー」
「へへーん。おれのほうが強いからむりだって！」
最初は後ろから声をかけようとしたところを、正面から駆けよって来た年下の子にかっさらられ。
「アンタらホントにデュエル好きね。普通、キャンプにまでカード持ってくる？」
「持ってないとなんか落ち着かなくて……なぁ鉄男」
「だなー。決闘者はみんな、なんだかんだデッキ持って来てるしな」
「その連帯感、わっかんないわねー」
デュエルが終わるまで待っていたら、鉄男や明里と話を始め。
「ユウヤ……」

「ユウヤくん、昨日借りた……飛ぶ無線機？っていつ返した方が良い？」
「そういえば小鳥さんに渡したままだったっけ。うーん……昨日みたいなことが起きても困るし、キャンプ中はそのまま持っててもらって良い？」
　ちょっと行ってたトイレから戻ると、小鳥との会話に割り込めず。
「遊馬、プチトマト食べられないからって服のポケットに突っ込んじゃダメだって……」
「か、隠してねぇーって！ちゃんと食ったんだよ！」
「そう？確かにお皿の上に何にもない。きれいに完食してるね」
「そーだって！ほら俺、早弁早グソは超得意だからな！」
「本当に何にもないね。……お前プチトマト、ヘタごと食べたの？」
「ギク……!?」
　朝食時にはユウヤが遊馬を構っていたせいで話せず、ついでに自分はヘタを取って隠し。
「ユウ……」
「すいませーん、そこの人ー。カード落としましたよー！」
「あん？……おう、確かに俺のだ」
「良かった……あれ？このカード、何にも描いて……？」
「オイ、ガキ。他人のモンをジロジロ見てんじゃねぇよ」

「あ、すいません、どうぞ」
「……チッ」
　食後は、ユウヤが落ちたカードをスキンヘッドのチンピラみたいな男まで届けに走り。
「ユ……」
「チャーリー。そろそろ集合時間だって明里さんが呼んでたよ」
「ちょっと待てヤー坊。あの桃色の髪の人と仲良くなってくるまで……」
「そんな時間ないよ。ほら行くぞー」
「俺なら短時間で行ける！くそ、俺としたことがあんな美女がいるのを見落としていたとは……！……止めろヤー坊、引っ張るなって！素敵な出会いが遠退いて行くー……！」
　最後に、ユウヤが仕事サボってナンパしようとする男を引きずっていくせいで、班行動になる時間まで結局二人っきりにはなれなかった。どうしようもなさに、アンナは普段のユウヤのように手膝をついて崩れ落ちたくなった。
　こうなるなら途中でユウヤを無理矢理引っ張って告げてしまえば良かったと悔やみ、それじゃまるで告白するみたいだからまだ照れ臭くてヤダと思い直した。
　しかし、そんなことでアンナが諦めることは無い。

彼女の中に一度決めたことを簡単に曲げるような、ぬるい根性はないからだ。

隙をみて今日中に必ず言ってユウヤを困らせてやる！とアンナは新たにした決意を、とりあえず心の隅へ追いやって、今日の宝探しゲームに勝つぞと気合を入れた。

■■■■■

――同時刻、キャンプ場周辺にて。

「いやはや……遠方からご足労いただき感謝いたしますよ」

「めんどくせえ場所に呼びつけやがって……暑いわ山ん中で不便だわ、ガキだらけで鬱陶しいわで最悪だぜ」

「すみませんねぇ。ここは私の〝研究材料〟を集めるのに、時期も含めて最適の条件を持つものですから……」

「ハッ。アンタの事情に興味なんてねぇよ。んなことよりその分報酬は弾んでもらうぜ？なにせ俺の仕事は安くねえからな」

「ええ、ええ、それはもちろん。では前金代わりと言ってはなんですが……こちらを」

「おいおいおい、こいつは……！」
「ククク……あなたのお仕事に大変役立つと思いますよ」
「この……【Ｎｏ．】は、ねぇ」

ユウヤ、異界へ落ちる。

「ユウヤ君。かつて決闘は、人の魂を強くするための神聖な儀式だったと言われているんだ」

子供相手だからか柔らかい口調で、九十九一馬さんが語る。

その優しい声音のなかに、こちらを案じる心遣いや持ち前の豪胆さがにじみ出ている。

「付喪神という考え方がある。思いが込められた物には神様みたいな何かが宿るっていう話だ。それが転じて、人間の心にも不思議な力を持った存在がいると信じられていたんだ。冒険していると世界各地で実際にそういうモノから力を借りていた、という昔話を沢山耳にしたよ」

原典である漫画『遊☆戯☆王』における〝カー〟のようなものだろうか。

千年アイテムはなくとも、この世界の場合は【Ｎｏ．】で代用はできそうだ。【Ｎｏ．６２　銀河眼の光子竜皇】の例だってある。人間時代のナッシュの話で出てきた海の神や

ミザエルのドラゴンも実はただ【Ｎｏ．】であるだけでなく、そういう類の存在だったのかも知れない。

「ある所では精霊。別の所では召喚獣。式神、使い魔、神……。呼び方はいろいろあったが、どれも石板や札を使って体の中や自然から呼び出して力比べや、知恵比べをしていたそうだ。俺たちが元いた遺跡はそうやって呼び出した精霊をより強く立派にするための決闘や、集めた精霊の保管をしていたらしい」

事実、あの遺跡はどこか見覚えのあるモンスターを描いた四角いレリーフが、所狭しと壁に敷き詰められていた。古代のナッシュ対ベクター戦は文字通り石板で決闘をしていたことを思いだす。ドローで天井から石板が落ちてくるイメージが先行するけれど、あれは確かに決闘だった。

「つまり、あそこは古代の決闘スペースだったっていうのが俺の立てた仮説だ」

――――で、このオカルト話の詰まるところは。

「目の前のモンスターたちは、ＡＲビジョンじゃなくてその精霊ってことですか」

「おそらくな」

当然のように宙を漂う【クリボー】の群れ。俺たちを警戒心むき出しで取り囲む【超重武者】に【六武衆】に【忍者】たち……。他にも、彼らの背に隠れて山ほどいる。

見上げれば青や赤、橙に白に黒。色をつぎはぎにされた空が覆い、見下ろせば元居た石造りの遺跡の砂利道とはうって変わって、整地されたようなツルツルした黒紫の地面があった。モンスターたちの向こうには、四方を巨大な檻たちで組み上げられた壁が高くそびえ立っている。

ここは普通の場所じゃないと景色のすべてが訴えかけてくれば眩暈もする。

熱に浮かされて働かない頭で、なんでこんなところに居るのかを現実逃避に思い出す。

■■■■■

「――――これでがら空きになった所に【トレジャー・パンダー】と【パンドラの宝具箱】でダイレクトアタック。これでピッタリ、二六〇〇ダメージです」

「正解だ！」

俺の後ろで「やったー！」とハイタッチする音がした。

キャンプ二日目の遺跡探検中、俺は遺跡にそぐわない長机で詰め決闘を解いたところ

だった。

遺跡を班の子供たちと共に進んで行った先の広い一室。他の客もまばらにいる中で「宝探しゲーム・中間ＣＰ!!」と書かれた紙を貼った机の前で一馬さんが待っていた。

その周りで全ルート共通の中間地点のため、先に着いていた遊馬先生やアンナたちが出された問題である詰め決闘を解けずに頭を悩ませていたのである。

最初は問題も簡単だし、昨日チャーリーに言われた言葉から、まだ私が動く時ではない……と今日は一歩引いてゲームは他の子たちに任せる気でいた。

しかし、直感で動くタイプの決闘者ばかりが集まっていたせいで俺以外はギブアップ。ヒントを出してもらうより早く、お前なら解けるだろ!?とアンナに詰め寄られてしまったのである。

別の班なんだからそれはダメなんじゃ、と断ろうとすると一馬さんが、班の垣根を越えて協力できるのならそれは良いことだぞ、と容認。結果、俺が三つの班の代表解答者みたいな形になった。

「じゃあ、これが中間チェックポイント通過の証。君の班の分だ」

「ありがとうございます」

一馬さんから差し出された【運命の発掘】を受け取る。

この世界は【エクシーズ・トレジャー】みたいな条件付きとはいえ大量ドローできる

魔法カードが山ほどあるせいで、罠のドロー補助が驚くほど簡単に手に入るのだ。現に俺はこれと同じカードを七枚持っている。

最初はドロー補助を集めて【エクゾディア】組んで満足!と喜んだが、肝心のパーツが全種類レアカードなせいで、手札どころか一種類も手元に集まらなくてこんなんじゃ満足できねえぜ……と崩れ込んだのは四歳のころだ。

「ユウヤにいちゃんスゲー!こんなむずかしいのかんたんにといちゃうなんて!」

「えっ……!あーその、あれ。詰め決闘だって決闘だから相手がいるんだ。用意した相手がどうしたいか考えれば、答えが見えてきたりするよ」

「そーなのー?」

「今回は宝探しゲームだろ?だからきっと罠を全部はずしたあとに、【パンダー】と【宝具箱】を一緒に通させたいのかもって思ったら解きやすかったんだよ」

「へー」

ぶっちゃけ簡単だった、なんて解けなかった子に言うのは良からぬと思ったので、興奮気味に聞いてくる最年少に適当な理由で答える。

すると、それを見ていた一馬さんが困ったように笑いだした。

「そこまでバレてたか。君はどうやら、目の前にあるもの以上に考えることができているんだな。遊馬と同い年なのに大したもんだ」

「あ、あはは……。今日はいつもより調子が良かっただけで……」
「へへ！ユウヤはスゴイだろー、遊馬の父ちゃん！」
「いや、なんでアンナが胸張るのさ」
中身が大人だからこその俺への褒め言葉に苦笑しながら言葉を濁すと、得意げにアンナが笑う。
適当に返事をしたが実際、この遺跡に入ってからは好調だ。
例えて言うなら、授業が少なかった日の帰り道。いつもよりも時間も体力もある中で何をしようかと帰路につくような身軽さと余裕がある。
そんな気分で歩くこの遺跡はすこぶる楽しい。通路の壁にあったレリーフを見ながら、あの絵柄は【心眼の女神】かなとか、わかり辛いけどあれは【クリボー】っぽいな何クリボーだろう勝手に出てきたりしないか、と想像しているとついつい班の子たちに置いていかれそうになるほどだ。
「はっはっはっは！明里たちから聞いていたが、しっかりしてるな。負けてられないぞ遊馬！」
「おう！今のは助けられちまったけど、次の問題は俺たちに任せとけユウヤ！」
「いや遊馬、みんな別々のルートだから次は一緒じゃ……あれ……？」
九十九親子のやり取りから暴投された借りを返す発言の途中、青い光が目についた。

感心している一馬さんの胸元が光っているのだ。
正確には彼の胸ポケットの中が発光している。携帯電話か小型のD・パッドかなにかだろうか。
「そこ、なにか光ってますよ?」
「何?まさか……!」
指差して伝えると、彼は慌てて胸ポケットから見覚えのある形をした発光物を取り出した。
瞬間、驚愕で俺の喉が鳴る。
青い光を淡く放ち不思議と引き込まれそうな神聖な雰囲気があるそれは、輪の下に二本線と逆三角を取り付けた黄色いナニカ。見ようによっては「皇」の字を模しているようでもあった。

どうみても『皇の鍵』だ。

「一体どういうことだ……?今まで何の反応も示さなかったのに……」
「それ、って……」
「ん?……ああこれは、何でもないんだ」

光り出した皇の鍵を訝しげに見つめる一馬さんは、俺の零した疑問を誤魔化した。
当然だ。息子の友達でキャンプ参加者である以外に関わりがない子供に、謎のアイテムの説明をしないのは当たり前の話である。
なので、隣の遊馬に訊ねた。頼む、よく似てるだけで、どこの土産物屋にもある無駄にカッコイイキーホルダーだと言ってくれ。
「遊馬……アレなにか知ってる？」
「父ちゃんが持ってる奴か？去年、父ちゃんが冒険中に見つけたモンだよ」
そういえば、皇の鍵は一馬さんが手に入れ、遊馬に渡された物だったはずだ。だから今、この人が持っていてもおかしい話ではないのだろう。
「……それって去年のいつ頃？」
「十月の終わりぐらい。父ちゃん、大ケガして帰ってきたから大変だったんだぜ」
「――――」
眩暈がした。
デュエルモンスターズ絡みの遺跡。遊馬たち。朝見た白紙同然の変なカード。光る皇の鍵。
【ウィジャ盤】の如く、これから何か起こるぞというメッセージを並べられているような気分だ。さっきまでの心地よさなど消し飛び、嫌な予感が背筋に脂汗を伝わせている。

「ユウヤおにいちゃん、早くいこーよ！置いてっちゃうよ！」

俺の揺れるマインドなどお構いなしに、うちの班の少女が奥への通路の前で俺を呼ぶ。

ゆっくり喋っていたからか、気がつけば机の周囲には俺と遊馬とアンナ、そして一馬さんだけになっていた。

返答しようと顔を向けるとその少女が、遺跡の奥から出てきた人影とぶつかりそうである。彼女はこちらを見たまま歩いていて気付いていない。

「キャッ……」

「アア？」

危ない、と声を出すには一足遅く、少女は男性とぶつかって尻もちをついてしまった。

「……チッ」

「あ……ごめんなさい……」

少女を苛立ち交じりに見下すその男性の顔を確認して、俺は目を見開く。

今朝、妙なカードを持っていたスキンヘッドの男が、そこにいたからだ。

「……まあ、いいぜぇ」

スキンヘッドの男の口角がニタリとつり上がる。その妖しい眼差しは少女だけでなく、この場にいる全員へと向けられている。

朝見た時とは明らかに違う。
視界に収めた時から、あの男に感じる不快さと同じものを最近俺は味わっている。
この短時間でどうやって手に入れたかなど推測するより早く、確信した。

今、あの男は【Ｎｏ．】を持っている。

悲鳴をあげるように叫びかけた。
「そいつから離れ……！」
「どうせ全員、この蝉丸様のカードになるんだからなぁ！」

男――――蝉丸が喜々とうたい上げると同時に、勢い良く掲げた手が眩むような閃光を放つ。
皇の鍵とは似ても似つかぬ赤黒く禍々しい光のせいで見えにくいが、その手にはカードらしきものが存在している。察するにあれが奴の【Ｎｏ．】だろう。
何をする気だと考える間もなく、変化は起こった。カードから、ひときわ強く輝く幾

筋もの光線が人や壁のレリーフへ向けて伸び出す。
それが直撃したレリーフから、刻まれたモンスターが消えた。
さらに蝉丸の目の前にいた少女が光を受けた瞬間に、糸の切れた操り人形のように倒れた。奴が出てきた通路の先が薄っすら照らされ、そこにも彼女と同じように倒れる人間が何人も見える。
「う……うわあああぁ!?」
「きゃあああ?!」
「フッハハハハハ!!」
理解できない。それでもあの光に触れてはならない。
一拍遅れてそれがわかった客や子供たちの悲鳴と混乱の声が響く中に、蝉丸の嘲笑が混じる。パニックになって逃げ惑う人々を背中から打つように光線が走り、彼らは次々と倒れていく。
「何なんだよアイツ!?」
「遊馬！みんなを連れて外へ走れ！外の明里たちと協力して、人をここに近づけるな！」
「父ちゃん!?」
アンナが叫び、一馬さんが指示を出して蝉丸へと駆けだし、その姿に遊馬が狼狽えた。
そんなことは関係ないとばかりに一閃が俺たちの元へと迫る。このままでは俺かア

ンナに直撃する軌道だった。
「アンナ、危ない！」
「ユウヤ、危ねぇー！」
「え、げふぇ!?」
「あ、どお!?」
アンナを光線から守るために突き飛ばそうとしたと同時、アンナも同じことを考えたらしく俺たちは互いを突き飛ばし合った。
「のわ！」
「ぐむ!?」
光線は避けられたものの、アンナはよろけて遊馬にぶつかり、俺は大きく吹き飛び決闘盤を構えていた一馬さんの背中へと激突。その衝撃で彼のその手から決闘盤と皇の鍵が宙を舞い、弧を描いて皇の鍵が俺の腹へと落ちる。
瞬間、皇の鍵の光が増し蝉丸の【Ｎｏ．】よりも強く輝いた。
「な……」
青い光が、空間を埋めていく。

風船のようにしかし光の速度で膨らむそれは、瞬く間にその場にある全ての物を飲み込んだ。

……

――――光がおさまった後。

その一室では、壁面には彫られていた絵柄が一つ残らず消え、枠のような石が一面に埋め込まれるだけとなり、床には数十人もの人間が魂を抜かれたように倒れて眠っていた。

そこにはユウヤたちの姿も、蝉丸の姿もない。

ただ地面には忘れられたように倒れた机と決闘盤、そして皇の鍵が落ち、

部屋の中央中空。そこには不安定に輪郭を揺らがせる青い空洞が、ぽっかりと開いていた。

■■■■■

「ユ……く……ユウ……ん……ウヤ君……ユウヤ君！」
俺を呼ぶ誰かの声と揺すられる振動で目を覚ます。
最初に見えたのは黒紫の何か。そこに影が落ちていることに気づいてそれが地面であることと、自分がうつ伏せになって倒れていることを理解した。
「……一馬、さん？」
「良かった……目が覚めたか」
不鮮明な意識のまま声の主を見れば、安堵した一馬さんが俺を見下ろしていた。
身を起こして徐々に頭にかかったモヤが晴れていくと共に、気を失う直前の出来事を想起してまぶたが跳び上がった。
「そうだ、アンナ……遊馬！一馬さん二人は、他のみんなは!?」
「ユウヤ君、落ち着きなさい」
「落ち着いてなん、が……！」
「ユウヤ君！」
詰め寄ろうと持ち上げた俺の身体がそのまま崩れ落ちた。
身体が重い。頭もひどい風邪を引いた時のように重く、締め付けられるように熱い。
立ち上がろうとするけれど腕にも脚にも力が上手く伝わらず、かたかたと震えるばかり

だ。

突然の体調不良に戸惑っていると、一馬さんが手を貸してくれた。

「しっかりするんだ。立てるか？」

「あ……ありがとうございます……」

引っ張りあげられて立ち上がり、ふらつく身体を気力で支える。

「厳しいことを言うが、気を抜くな。まだ、手放しで安心できる状況じゃないようだからな」

「……え？」

――人間だ。

――人間が〝狭間〟に落ちてきた。

――メズラシイ。メズラシイ。

――原因はあいつらか？

――それ以外にあるか！

――そうでしょうか？それにしては様子が……。

周りには俺と一馬さん以外の人間の姿はなく、代わりにデュエルモンスターズらしき

生物たちが距離をはかりながら俺たちを包囲して、口々に理解できる言語で会話をしていた。

あまりの光景に、思わずD・ゲイザーを付けていないかと自分の顔に触れて確認する。

「……一馬さん、俺ダメみたいです。モンスターが人の言葉を喋ってる幻聴がします」

「問題ないぞ。俺にも同じ幻聴が聞こえてるからな」

「それ、二人そろってダメってことでは……」

「軽口が叩けるなら、イカれていても十二分だ」

ニッと笑ってサムズアップする一馬さんに、俺の症状に頭痛が追加された。

いやしかし、それぐらいの寛容さがなければこの異常事態を乗り切れないのかも、とその考え方を受け入れる方向に舵を切る。

カードゲームではよくある話、カードゲームではよくある話……。

「あれ、どう見てもARビジョンじゃありませんよね……？」

「ああ。彼らは〝デュエルモンスターズの精霊〟だろう」

「精、霊？」

そういうオカルトは、やはりこの世界でも同じなのだろうか。

訝しんでいた俺に対して一馬さんは懇切丁寧な精霊についての解説が始まり、今に至る。

「それがどうしてここに……？」
「それは俺たちが〝次元の狭間〟に……」
「そこの人間たちよ！」
一馬さんの話をしゃがれ声で遮りながら、モンスターの輪から小さな影が勢いよく飛び出した。
その姿は子供の頭くらいの大きさで、毛だらけの丸い体に手足が伸びるシルエット。【クリボー】の一種かと間違えそうになったが、その大きく開く三つ目が否定している。
「【クリッター】……？」
「これは一体何の真似だ!?」
大の大人である一馬さんを見下ろす高さで宙に浮く【クリッター】は、怒りを隠すことなく俺たちを怒鳴り散らした。
体格に合わないその威厳ある老人のような低い声に、俺を背に隠しながら前へ出た一馬さんが反論する。
「待ってくれ。何の真似と言われても、俺たちも気が付いたばかりで状況が……」
「惚けるでない！あれを前にして、かようなホラが通ると思うか!!」
「あれ、って？」
【クリッター】が指差す先へ促されるまま振り返った。何かがあるわけではなく、俺た

ちをモンスターたちごと囲うようにそり建つ高層ビルほどに高い壁があるだけだ。強いて何かあると言うなら、他と比べてその壁だけに赤い曲線で描かれた模様があることだろうか。

「は……？」

違う。模様、ではない。

鈍い頭を上下させ全貌が見えたことでようやくわかった。壁が書面であるかのように、一面を使って太くあまりにも大きく描かれたソレは、

〝二つの数字〟だ。

「【Ｎｏ．】を持ち込み儂たちをその中へ閉じ込めたのは、お主らなのかと聞いておるのだ！」

高く高くそびえる壁。そこに刻まれた『６８』という【Ｎｏ．】の文字が、押しつぶすような存在感で俺たちを見下ろしていた。